ダーク・フロンティア・ブルース

市川丈夫

イラスト ぽぽるちゃ

富士見ファンタジア文庫

「祈ってる場合じゃなーい!」
怒りのこもった叫びと共に、
拳骨がジャスティスの脳天に落下した!

ダーク・フロンティア・ブル

邪神の周囲に、帯状の神聖陣が現れた。
サウンド
ジャスティスの召喚した奇跡が発動する!

「…………騒ぐな…・・・・・」
フェブレスはナイフで脅すと、
セシアの小さな身体の上にのしかかった。

ダーク・フロンティア・ブルース

市川丈夫

富士見ファンタジア文庫

とはできません。
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。 また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。
本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡するこ
本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。
本作品は縦書きでレイアウトされています。
また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

口絵本文イラスト ぼぼるちゃ

目次

かいこう
【第一章 リオ・ロボ邂逅】
しつちたい しゅうげき
【第二章 ネヴォワ湿地帯/襲撃】
【第三章 ワルーン村/錯綜】
【第四章 ワルーン村/憤怨】
きくそう
ふんえん
【第五章 ヨブ・ゾラーン/決着】
あとがき

かいこう
【第一章 リオ・ロボ/邂逅】
何人かは泣いていた。
何人かは泣く力すらなかった。
えいえん
やみ
あんこく
いや
おくそこ
永遠に続く底なしの間である。 闇黒は嫌らしい湿気に満ち、生臭い匂いも充満している。
なまぐさ にお
じゅうまん
くうふく
れいき
だれ
その闇の奥底で、子供たちは泣いていた。
親の名を呼び、空腹に苦しんでいる。 冷気は、とっくに子供たちの体力を奪っていた。
逃げる気力もない。
誰も助けになど来てくれない。
じょうきょう
子供なりに状況に絶望した・・・・・二日目のことであった。

「みんな......そこにいるんだね?」

誰かがそう呼びかけた。
いっせい
子供たちは一斉に顔を上げる。

あわ
せいこう
そこに..............淡い光が現れた。 青白い聖光がゆっくりと近づいてくる。
てんし
そして子供たちは確かに……天使を見た。

「よかった......みんな無事なんだね!」
えがお
こうごう
闇黒をかき消すように、まばゆい笑顔がきらめいている。 声の主は、神々しいまでに愛らしい少年であった。
かたさき
かがや
ひとみ くも
ようこう
柔らかそうな金髪が、肩先で揺れて輝いている。大きな水色の瞳に曇りは無く、陽光めいた光彩を放っていた。
こうさい
きんいろ つえ
ひざまず
白い長衣に身を包んだザクセン人の少年は、金色の杖を握り、子供たちの前に跪いた。
まさに画から抜け出た天使。 その天使の笑顔を、子供たちは呆然として見つめていた。

こわ
「もう安心していいからね! 僕、君たちを助けに来たんだよ」
不思議な笑顔であった。
ぬく
なぜか温もりが伝わってくる。 初めて会う少年に安堵を覚え、子供たちはその胸に躊躇
なく飛び込んでいった。
「お、お兄ちゃん!」
「怖かったよ!私、すごく怖かったよ!」
ちゅうちょ

全員を抱きしめ、少年はうなずいた。
ふくろ
「もう大丈夫さ! 僕が来たからにはもう安心! みんなおうちに帰れるよ!」
かたわ
きほうせき
少年は、金色の杖を傍らに置いた。その頂点で青白く輝く希宝石が、
少年の取り出した小さな袋を照らし出した。
「わあっ!」
「ここに来てから、何も食べてないんだろ? 好きなもの、食べていいよ」
あめだま
袋の中からは、色とりどりの飴玉、スポンジケーキ、チョコレートが飛び出した。
「ぼ、僕これ!」
あた
初めて、子供らから声があがる。 慌てて手を出すのを制して、少年は菓子を分け与えた。
「大丈夫、慌てずにゆっくり食べて」
「お、お兄ちゃん、腕……渇いた……」
「うん、これ飲んでいいよ」
すいとう
少年は、あらかじめ用意していた水筒も差し出した。 みな夢中で白湯を口にする。
その飢えた姿を、少年はいたましそうに見つめていた。
よく見れば子供たちの身体には、細かい切り傷があちこちにできている。
きず
いつしゅん
えがお
だが少年は大きく息を吐き、一瞬でまばゆい笑顔を取り戻していた。
からだ

「でもよかったあ・・・・・・ 生きててくれて・・・・・・」
「ジャスティス様!」
あんど
安堵した背中が、不意に呼びかけられた。
たくま
そうねん
に
ぎんいろ かがや そうこうよろい
振り向いた少年の前には、逞しい壮年の男が立っている。鈍い銀色に輝く装甲鎧をまとった、髭面の
騎士がそこにいた。
ひげづら きし
かんせい
「おお、こちらに……なんと、みな無事ではないか!」
「よかったですね、パブロさん!」

つえ
ジャスティス・・・・・・そう呼ばれた少年はおもむろに杖を手にして、立ち上がった。
「さらわれた子供は八人でしたね。みんなそろってるはずです」
「え、ええと••••ミゲルにマリア・・・・・・アルベルトにペロン・・・・・・た、確かに!」
がしゃんと鎧の音を立て、ギアナ人の騎士はその場にへたりこんだ。
「いやあー、安心しましたあ!」
重い鎧が辛いのか、騎士パブロはぜいぜいと息を切らせている。その人の良さそうな顔を見つけ、子供たちも飛び上がった。
「あっ、パブロ様だあ!」
「パブロ様が来てくれたあ!」
歓声を上げる子供たちを、パブロは嬉しそうに眺め回した。

そうせいしん
「おお、おお、私も嬉しいよ!みなが無事で何よりだ! これも創世神様のお導きだ!」
めいもく
「本当にそうですね」
きょう
せいきょうと あかし
せいいん
少年・・・・・・ジャスティスも瞑目して、右手指を器用に折り曲げた。聖教徒の証たる聖印を結び、胸の前で十字を切る。
かんしゃ
「子供たちを救ってくれた創世神アイオロス様に感謝しましょう。さあ、みなさんも......」
うなが
十三歳とも思えぬ威厳に満ちた声に促され、パブロも聖印を結んだ。
子供たちも、をほおばるのを忘れ、目をつぶる。
いの
だがその瞬間・・・・・・
「祈ってる場合じゃなーい!」
とつぜん
のうてん げんこつ
なぐ
突然の声と共に、ジャスティスの脳天に拳骨が落下する。続けてパブロも殴られる。
めいわく
少年は、迷惑そうに顔をしかめた。
「痛いなあ! 何するんだよ、ライオット?」
「あんたこそ何してんのよ、こんなとこで! お祈りなんて、村に帰ってからすればいいでしょ! なんで今してんのよ、今!」
こわね
突き刺さるような声音である。

ぼうぜん
その姿を子供たちは呆然と見上げていた。
おど
真っ赤な髪が、踊るように跳ねている。
勝ち気そうな少女は、拳をぶるぶる震わせていた。大振りな当ても、汚い外套も、貼った二本の大剣も、そして腰にぶら下げた大型拳銃も、どこか偉そうである。
かがや
ひとみ
じゃい
みじん

だが生き生きと輝く赤い瞳に、邪意は微塵も感じられない。
ローマナ人の少女は、ふんと鼻を鳴らした。
のんき
「本当に……よく呑気に祈ってられるわね」
「だって僕は祈るのが仕事だよ。 神様に、 この幸運を感謝しなくちゃあ……」
「だからそれは後でもいいって言うの!」
いちべつ
ライオットと呼ばれた少女は、子供たちを一瞥すると、今度は騎士に向き直った。
へんいじゅうたいじ
「だいたいあんたもあんたよ、 パブロ! あたしらが引き受けたのは、変異獣退治だけのはずよ!
人質がいたなんて聞いてないわよ!」
ひとじち
「あれ、そんなはずは……」
こわごわ
パプロは、怖々ジャスティスを指さした。
「その件についてはジャスティス様にちゃんとお話ししたはずですが……」
「ジャスティス!」
えりくび
おくぼ きし
ライオットは相棒の襟首をつかむと、ぎりぎりと奥歯を軋ませた。
背せ

「変異獣退治だけだから、
一万ドルクで引き受けたのよ……人質救出もあるなら、上乗せしなきゃだめでしょうが!」
「そんなことできないよお!」
ふく
あら
ぷうっと頬を膨らませ、ジャスティスは不満を露わにした。
のうか
「依頼した村人は、みんな貧しい農家の人たちなんだよ!
この子たちの親だってそうさ!そんな人たちからお金なんて取れないよ!」
「もう聞き飽きたわ、そのセリフ」
あき
ライオットは、呆れたため息を吐いた。
「だったら地方市に行って、軍隊でも派遣してもらえばいいのよ。からならタダだもん」
「村から地方市までは片道三日はかかるよ。 その間に、この子たち食べられちゃうよ」
「だったら村の騎士パブロ様だけで戦ってもらうのね。なんたって騎士だもの」
いつう ようつうも
かわいそう
「パブロさん、胃痛と腰痛持ちなんだよ。可哀想じゃないか」
せいき
いなか
「そんなの知らないわよ! だから聖騎士にもなれない田舎の騎士って嫌ーよ」
「あ、あと痔もあるって」
ライオットは、めまいを据えた。この一年、何度、こんな不毛な会話を続けたことだろう。
気を取り直そうとする少女の背に、パブロはおずおずときりだした。

「あのお……そろそろ夜明けです」
「だから何よ?」
こま
もど

「グズルンが、この巣に戻ってくると思うんですが・・・・・・」
その忌むべき名を聞いて、ライオットは意識を切り替えた。
「分かったわ、パブロは子供たちを連れて先行して。ジャスティスも付いていくのよ」
ご えい
「いや、護衛ならライオットの方が安心だよ。 ここは僕が焼き払う」
ひそ
うかが
少年は声を潜め、辺りを窺う。
おそ
はら
たび
「でないと、またこいつら湧いて出て、パプロさんの村を襲うよ。
その度に、子供がさらわれて困ることになるからね」
「よ、よろしくお願いします!」
せんどう
しんぱい
立ち上がったパブロは、出口へと子供たちを先導していく。心配そうに振り向いたライ
オットは、相棒をじっと見つめた。
「早く来るのよ、 ジャスティス」
だいじょうぶ
「僕を心配してるの? 僕だってもう一人前だよ、大丈夫、大丈夫」
やすう
「その安請け合いが心配なのよ」
かた
やみ
仕方ないとばかりに肩をすくめ、ライオットも闇の中へ走り出した。
その背を見送り、少年は一息ついた。

「さて、始めるかな……」
ジャスティスは、金色の枕で辺りを照らし出した。周囲は、ぬめぬめと濡れ光る黒い盤で包囲されて
いる。 洞窟の行き止まりには、地下水が湧き出していた。
どうくつ
その冷たい地下の泉に.....
えんすいたい
きつりつ
幾つものいびつな円錐体が屹立していた。
あかぐろ
いろど
なまぐさ
お
赤黒く彩られ、生臭い匂いを放つそれは、意外にも整然と洞窟に並べられていた。
えさ
「産まれる前でよかった……あの子たち、幼体の餌にされるとこだったよ……」
めいもく
つぶや
ほっとして、ジャスティスは右手で聖印を結んだ。 瞑目して意識を集中し、一言呟く。
テイク
「第一撃……」
こうりん
少年の手に聖なる力が降臨した。

「爆発音…………」
先頭を行くパブロが、一瞬立ち止まった。
えがお
だがライオットは、笑顔でうなずいた。
「ジャスティスが巣を焼いているはずよ。 ご心配なく。 あたしらは先を急ぎましょう」
「そ、そうですな………」
はさ
どうくつ
子供たちを間に挟み、一同は暗い洞窟を縫うようにして進んでいった。

ねえ
「ねえ、お姉ちゃん、どこの人?」
「どこの村に住んでるのお?」
はな
すっかりなつき、ライオットの手を離さぬ子供が言う。 それを、パブロが静かに制した。
どの
めいわく
「こらこら、みんな気安く話すでない。 ライオット殿にご迷惑だぞ」
「いいけどさ……ちょっと、あたしの外套で鼻水拭かないでよ!」
迷惑そうに、ライオットは顔をしかめた。
それでも子供たちは離れない。口の悪い少女の本性に気付き、パブロも微笑を漏らした。
ほんしょう
びしょう
だが不意に・・・・
「どうしたの、お姉ちゃん?」
急停止した少女に、一人の子供が呼びかけた。だが答えず、 ライオットは耳をそばだてている。
いや耳だけでなく、索敵機能全てを。
きくてき きのうすべ
「上よ、パブロー」
とつぜんさけ
じゅう
げきてつ
たた
ず じょう じゅうだん
突然叫び、ベルトから銃を抜き放つ。撃鉄を叩きつけ、少女は頭上に銃弾を連射した。
「ライオット殿!」
れつか
てつこうだん
しつ
つぶ
劣化ウラン徹甲弾が、躍りかかる幾つもの黒い影を正確にぶち抜いた。キチン質が潰れる音が響き、
ぬめつく体液が宙に飛んだ。

ひび
「きゃあああああっっ!」
子供たちが、おののいてその場に伏せる。
てんじょう
ゆうやく
しつこく かいぶつ
おそ
こうちゅう

洞窟の天井から勇躍した影は、いずれも漆黒の怪物だった。
恐らく甲虫が変異したものだろう。一メートルほどの身体は、黒光りする装甲に覆われていた。 長い腕と長い脚の間には、何本もの短い節足が突き出ている。
からだ
そうこう
おお
うで
あし
せつそく
とうぶ
さし
きば
獲元
だが何より不気味なのは、その平べったい頭部であった。 ぎちぎちと軋む長い牙は、
物を求めて口からはみ出している。
へんいじゅう
変異獣グズルンを次々撃墜し、ライオットは銃弾を素早 詰め替えた。
けいこく
「まだいるわよ、パブロ、後ろ!」
警告を捕らえ、騎士は長剣を振り回した。
きし ちょうけん
「ちいいっっ!」
げきとつ
かんだか
やいばたた
金属と金属が激突する甲高い音。と同時に、火花を散らしてパブロの刃が叩き折られた。
「パブロ様あっ!」
子供の悲鳴と騎士の苦悶が重なる。
のが
びき
たお
かまじょう
迎撃を逃れた一匹の黒い影が、パブロを蹴り倒し、両腕に付いた鎌状の心を振り上げた。

ごういん
だが先ほどの個体とは明らかに、形状が異なる。身体も優に二メートルは越えていた。
「お逃げくださいっ!」
間隙を衝いて、パブロは腰から短剣を引き抜いている。くたびれた騎士は、果敢にもグズルンの喉元へ刃を突き入れた。
のどもと
「子供たちを連れて、早くっ!」
ぜつきょう こうさ
悲痛な声に、変異獣の絶叫が交叉した。
グズルンは、騎士の身体にのしかかり、輝く鎌先を強引に胸元に突きつける。
かがや
むな
こうかく
パブロも必死に短剣を変異獣に叩きこんだ。だが重装甲めいた甲殻には、傷一つ付けられない。
空しい刃の激突音が響き渡った。
げきとつおん ひび わた
「あんたたちは逃げるのよ!」

せま どうくつ しつそう
子供たちをかばいつつ、ライオットは狭い洞窟を疾走した。
岩場を飛び越え、少女は出口目指して子供たちを走らせる。
「この先を右に行って! そこでお父さんたちが待ってるわ!」
「お姉ちゃんも逃げて!」
心配した子供たちが振り返る。
けつせん へん
にら
しかし少女は、決然と変異獣を睨み付けた。

「お姉ちゃんはね......」
ライオットは腰に手を伸ばした。 素早く拳銃を引き抜き、鋭く味ぶ。
「......これが仕事なのよっ!」
そくとう ぶ
かたぐち
れつか
と続けざまに、ばかでかい銃声をグズルンに叩き込んだ。
側頭部へ、肩口へ、劣化ウラン徹甲弾が襲いかかる。
てつこうだん
おそ
悲鳴を上げて、変異獣は後方へ飛び退いた。
じゅうだん
がんじょう そうこう
あき
だが銃弾は、甲殻をひび割れさせただけに過ぎない。
頑丈な装甲に、ライオットは呆れた口笛を響かせた。
くちぶえ
れんしゃ
だいじょうぶ
「さすがに成体は違うわね! こいつの連射をくらっても大丈夫とは恐れいるわ!」
*
こし もど
マント
せんとう きのう
だが冷静に、ライオットは六連回転式拳銃を腰に戻した。 外套を跳ね上げ、戦闘機能を
全起動させる。
じんこうきんにく
かいじょ
のうは
〈全人工筋肉、リミッター解除〉
〈対敵脳波ジャミング開始〉
〈事後の戦闘活動、記録スフィアに登録〉
網膜が瞬時にして、表示文字で埋め尽くされる。膨大な変異獣データからグズルンの戦闘能力を検索
。 義眼は、子供たちがすでに遠く離れたことを確認していた。
けんさく
はな
かくにん
「だったら思いっきりやらせてもらう!」

ちょうやく

叫ぶや、ライオットは大きく跳躍した。グズルンも地を這うように飛び、一気に間合いを詰める。
真正面から激突した両者に、パブロは思わず声を上げた。
ましょうめん
げきとつ
どの
「む、無茶だ、ライオット殿!」
せつだん
よこあ
少女の首を切断せんと、変異獣は横合いから鎌先を突き入れる。 が、
ライオットは難なくそれを受け止め、唇を不敵に歪めてみせた。
くちびる
ふてき
ゆが
「おあいにく.....読めてるんだよ!」
げきはつ
ごういん
少女の腕の人工筋肉が瞬時に盛り上がる。 激発した怪力がグズルンの左腕を強引に引き抜いた。
どっと生臭い体液があふれ出る。
なまぐさ たいえき
すご
「す、凄い......!」
さい
パブロには、他の言葉が思いつかない。 十六歳の少女は、変異獣に力で勝っていた。
ぼや
しかし絶叫するグズルンは、続けて右腕も叩き込んだ。その一撃にも、ライオットは素早く左腕を反応させる。
「炎熱刀!」
とうしん しゃしゅつ
やいば
ヒート・ブレード
らんぼう
ライオットは義手の手首から、分厚い刀身を射出した。
変異獣の刃とがっきと組み合い、乱暴に跳ね上げる。
にぎ
と今度は自分の右腕を握りしめた。
「こいつで死んでもらうわ!」

おのれ
ほうしん
じどうてきだん
ライオットは、
己の右腕を引き抜いた。腕に仕込まれた黒い砲身四〇ミリ自動擲弾筒を露わにする。 至近距離。
ためらいもせず、グズルンに乱射した。
あら
しきんきょり
ひとく
「人喰いカブトムシがあっ!」
たいそうこうだんとう
からだ
対装甲弾頭が、次々グズルンの身体にめり込んだ。 腹が吹き飛び、 頭が四散する。
「や、やった...さすがは......」

ばくはつ
あき
爆発にもかまわず、 パブロはライオットの戦いぶりに呆れるだけであった。
せんがいき
「戦鎧鬼ライオット......」
けしん
し
はら
戦争の化身を目前に、騎士は言葉を失った。
たいこう
変異獣に対抗すべく、全身に武器を内蔵し、脳以外の全身を人工化した戦鎧鬼こそ、この世界最強の兵器である。 外見だけは少女だが、戦慄すべき人造人間だった。
せんりつ
「ほら、立ちなさいよ」
乱れた髪を掻き上げ、ライオットは一息ついた。パブロに手を貸し、間に付いた泥を手で払ってやる。
「ああ、結構ですよ・・・・・・それにしても危ないところを本当にどうも・・・・・・」
「礼なんかいいけどさあ・・・・・・それにしてもだらしないわねえ」
くしょう
かた たた
ライオットは、苦笑して騎士の肩を叩いた。
ほうしゅう
「ま、その分報酬は上乗せしてもらおうかな・・・あんたもこの危機を救った礼が一万ドルクぽっちなんて、安いと思うでしょ?」

「は、はあ......しかし村長がなんと言うか」
いとく
「説得してよ、騎士様の威徳でさ」
どうくつ
自信ありげに笑うと、ライオットは洞窟の出口へ視線を向けた。
「それよりあんたも行った方がいいわ。 子供だけ先行させるのも危険だしね」
へんいじゅう
「そうですな、変異獣は一匹とは限りません。 他にもいる可能性が.........」
起きようとして、パブロは悲鳴を上げた。
がんばん
今度は岩盤の陰から、別のグズルンが飛び出して来たのだ。
変異獣は、油断していたライオットに襲いかかり、その身体を壁面に投げ飛ばした。
おそ
へきめん
どの
「ライオット殿!」
すさ
りよりよく
ほうこう
少女は、凄まじい膂力で洞窟に叩きつけられた。そのまま倒れることも許されない。
ひび
かまじょう うで
りの咆哮を響かせたグズルンは、その鎌状の腕でライオットを壁面に押しつけた。
「しまった......!」
くもん

苦悶しつつも、ライオットは敵としっかと組み合った。
さっきの成体とは違い、下腹部が大きく膨らんでいる。
ふく
「卵の・・・・・・母親か............!」
うめ
のどもと
ようしゃ
そう呻く喉元には、容赦なく鎌の刃が押し込まれていく。
ライオットは、その腕を必死に握り、くい止める。だが刃先が白い柔肌に触れるや、早くも鮮血が噴き出し始めた。

だ
せんけつ
のんき
やみ
「ライオット殿! 今、参りますぞ!」
「来るんじゃないわよ!」
さけ
パブロを制して、少女は叫んだ。
「それより子供たちの所へ早く! あたしのことはいいから!」
きし くちびる
しかし、と言いかけ騎士は唇を噛んだ。
たんけん
へんいじゅう こうかく つらぬ
手にした短剣では、変異獣の甲殻は貫けない。 無力な自分が情けなかった。
「逃げろって言ってんのに......!」
ライオットも全力を振り絞る。
しだい
だが刃は次第に、喉元に食い込んでいった。
「ライオット殿!」
もう一度、パブロが叫んだ時であった。
「ライオット、どうしたの?」
どうくつ
ひび
わた
呑気な声が洞窟に響き渡った。
とつぜん
もど
つえ
あぜん
闇の奥から突然、白い聖衣の少年が駆け戻っている。
杖を手にした少年は、唖然としてライオットとグズルンの戦いを凝視した。
ぎょうし
「へ、 変異獣じゃないか!」

たお
テイク・トウ
「み、見りゃわかんでしょ! 手伝ってよ!」
呑気な問いに、ライオットが悲鳴を上げる。
あわ
だが察したジャスティスは、慌てて右手に聖印を結んだ。

「分かった、今助けるよ！ 待ってて！」
叫んだ少年は、金色の杖を振り上げた。 杖の頂点から聖光が炸裂する。
同時にジャスティスの声音が高らかに宣言した。
こわね
「第二撃！」
倒れたままのパブロも、目を見開いた。
ラウンダバウト
「迂回衝撃弾！」
ほうせき
ばくこう しょうかん
杖に祭られた希宝石メタライトが、 爆光を召喚する。 聖印を結んだジャスティスの手から、創世神の力が起爆したのだ。
「ちょ、ちょっと待った！」
せつな
瞬間、ライオットに嫌な予感が走った。だが少女は、その刹那を凝視するしかない。
うな
ジャスティスの指から放たれた電光が、唸りを上げてグズルンの後頭部へ突き刺さった。一撃は、厚い甲殻をへし折り、変異獣の頭蓋を粉砕する。 瞬間、
変異獣の頭部は衝撃に四散し、その体液は高熱で一気に蒸発した。
いちげき
ふんさい
しょうげき
たいえき こうねつ
「さ、最悪っ......！」

なまぐさ
きょたい
生臭いグズルンの体液をまともに浴び、ライオットは泣きたくなった。 重い巨体を何とかはね除け、少女はげほげほとむせかえる。
「一応、礼は言うわよ、 ジャスティス・・・・・・」
「無事でよかったあ、でも......」
あくしゅう
駆け寄った少年も、悪臭に顔をひそめた。
はな
「ごめんねえ、もっと引き離した後、吹っ飛ばせば良かったよねえ...僕いっつも、後先考えないんだよねえ・・・・・・」
「そのセリフも聞き飽きたのよ......」
そで
ぬぐ
こし
袖で体液を拭い、ライオットは視線を転じた。 そこではまだ、パブロが腰を抜かしている。
彼はほおっと少年を見つめていた。
ブルセ
「さすが聖戦官様だ・・・・・・」
騎士の視線が、金色の枝に集まる。今頃、聖戦杖に畏敬の念が湧いたらしい。
照れたように、ジャスティスはうなずいた。
「そうですね。 まだ駆け出しですけど」
サウンド
「いえ、素晴らしい奇跡でしたよ・・・・・・」
ひとみ
どうけ

とも
改めて・・・・・・ パブロの瞳に尊敬と憧憬の光が灯った。 この世界で知らぬ者のない存在。
そして辺境の住人にとっては、見るも稀な伝説的存在。
まれ

その一人こそ、 少年ジャスティスであった。

わくせい
かつて惑星には、八大陸があったという。
せいじゅく
創世神アイオロスが造りし惑星には、人の子が栄え、 成熟した文明が花開いた。
だが、すべては潰え去った。
はん き ひるがえ
創世神に反旗を翻す勢力が出現したのだ。
あやま
げんざいしゃ じゃしんてい
創世神が誤って産み落とした原罪者、 邪神帝ルシフェルの登場である。
およ
かなた ほうちく
邪神帝は数億に及ぶ邪神群を率い、 創世神を暗黒の彼方へ放逐した。
太陽は力を失い、星座は四散した。
ゆうごう
フロンティア
動きだした八大陸は激突し、巨大な一つの大陸へと融合する。その激変は八十億の民を呑み、人間社会を粉砕し尽くした。
オールド・ハザード
《古代災厄》と呼ばれる終末である。
それでも、かろうじて生き延びた人間社会は、都市国家を再建するまでに回復した。
やみ
おお
たとえ闇に覆われ、 邪神が闊歩する世界でも、人々は必死に生き抜こうと努力していた。
《新大陸》
そう呼ばれる世界の物語である・・・・・・

じぶ...... じぶ...... じぶ......
音を立て、ぬかるみが泡を噴いていた。
でいど
あくしゅう
黒い泥土の下には、有毒なガス溜まりがあるのだろう。 交易路は悪臭に満ちていた。
こうえきむら
《交易村リオ・ロボへようこそ》
みちしるべ
錆び付いた道標は、冷たく湿った東風にあおられ、ぎしぎしと悲鳴を上げている。
そまつ
しつちたい
交易路の左右には、粗末な木造家屋が並んでいた。 およそ五十件。 ネヴォア湿地帯に最も近い、リオ・ロボ交易村であった。
おれい
「本当になんと御礼を言ってよいか......」
ちんざ
村の中心に鎮座する聖教会で、騎士パブロは何度も頭を下げた。

じゅんれい とちゅう
「巡礼の途中なのに、お力を貸していただきありがとうございます。無事子供らを救い出すことができました。 みな感謝しております」
「それはいいけどさあ・・・・・・」
なが
がたつく古びたテーブルにつき、ライオットは不満そうに夕食を眺め回した。
ねむ
「感謝の宴がこれえ? 豆のスープに黒パンだけ? 眠る元気も出ないわよ」
せいいっぱい
「これがこの村人にできる精一杯のもてなしなんだよ、ライオット」
ぎょう ぎ よ
ジャスティスは、行儀良く聖印を結び、胸の前で十字を切った。

あきら
「だから僕はありがたくいただきます。 パプロさん、どうもすみません」
「後で白タポンのムースをデザートに......」
「えっ! 僕、白タポン大好きなんです! うわあ、今日は素晴らしいごちそうだなあ!」
礼儀正しく、少年はパブロにも十字を切る。 騎士は慌てて顔を赤らめた。
礼儀正しく、少年はパブロにも十字を切る。騎士は慌てて顔を赤らめた。
きょうしゅく
「いや、そこまで恐縮されますと......」
「かえってイヤミだっつーの」
かじ
諦めてライオットも、黒パンを齧りだした。
都市国家ヴァスランに属する村である。
えいせいと
だが中央都ヴァスランはおろか、より小さな衛星都、さらに小さい地方市からも遠く離れている。
悟って、戦鎧鬼は小さく呟いた。
さと
せんがいき
つぶや
しょくりょうじょう
まんせい
「ま、こんな辺境の村じゃ、食糧事情も悪いわよね。
ギアナ地方は慢性的な食糧不足って聞いてるし・・・・・・」
しゅうかく
「いえ、収穫が終わったばかりなので、 本当なら食糧は豊富にある時期なのですが......」
パブロの言葉に、ぐっとライオットの眉毛が跳ね上がった。
「あるはずだけどなによ?」
クルセイダー
いつこう
「え、ええと...... 中央都ヴァスランから聖戦官の御一行がお見えでして......」
うそ
こうぎ
唐突にスープ皿を突き放し、 ライオットは頭を抱えて身をよじった。
唐突にスープ皿を突き放し、ライオットは頭を抱えて身をよじった。
「嘘でしょう! そいつらのために食糧を供出したってわけ? いったい何人来たのよ?」
「およそ百人以上......」
ばんさん
「それであたしらの晩餐がこうなったの?」
「ま、ありていに申しますと......」

なな
不満げにむくれ、ライオットはパブロを斜めに睨んだ。
にら
「でも神官たちなら基本的に菜食よね? 供出してない肉とかないの?」
「それが聖騎士様たちもご同道で... 今日は貴重な牛三頭を丸焼きにしました」
「抗議する!」
とまど
やおら立ち上がり、ライオットは宣言した。

「食べたきゃ自分たちで持ってくりゃいいのよ!
それを村にたかるなんて・・・・・・あたしが文句言ってあげるわ!」
「い、いやそれは......」
戸惑う騎士に、 ジャスティスも同意の声を上げた。
そこ
「ライオットさあ......ごちそうを食べ損ねたから、恨んでるんでしょ?」

「あんた、あたしがそんなに食い意地の張った女だと思ってんの? 見損なわないで、これは平等な社会正義のためなのよ」
だが少女の演説を無視して、 ジャスティスはパブロを心配げに見つめた。
クルセイダー
「でも、ヴァスランの聖戦官が来てるなら、村の大事なお客様じゃないですか。 おもてなししなくてもいいんですか?」
リオ・ロボ村の教会には、騎士と神官が一人ずついるだけだ。騎士はパブロであり、パプロの妻が神官を務めていると言う。宗教儀式はもちろん、厄介事、裁判沙汰まで全て二人が取り仕切っている。村長に次ぐ、村の代表者と言ってよい。
ぎしき
やつかいごと さいばんざ
びしょう くず
だがパブロは微笑を崩さなかった。
れんらく
きゆうきよ
あいさつ
「何の連絡もなく、急遽立ち寄られたようですな。 村長の挨拶だけで結構だそうです。私みたいなただの騎士にも用は無いそうで」
しょくりょう
「何の連絡もなく、食糧を......」
ライオットの怒りが増長された。
「だいたいヴァスランから何の用よ?」
ほろばしゃたい
せんがいき
窓辺に近づき、戦鎧鬼は目を細めた。
とも
暮れゆく空は闇を濃くし、家々には僅かな明かりが灯り始めている。その村の外縁部に、幌馬車隊の焚き火が明滅していた。
めいめつ
いんぎん
ふはい
てつつい
「よーし、あそこね。 腐敗した聖戦官どもに正義の鉄槌を下してやるわ」
「えーっ、本当に行くの?」
「当たり前よ、あたしはやると決めたら本当にやる女なの! まあ見てなさい」
とびら
ライオットは、教会の扉を押し開けた。慌ててパブロが追いすがる。
どの
「ライオット殿、どうかそれだけは......!」
こがら
だが扉を開けた瞬間、きょとんとライオットは立ち止まった。門の前で、小柄な青服の男が慇懃に頭を下げていた。
いた
「失礼致します............この都市国家ヴァスランの最高評議員ラエモスと申します」
その背後で、従者らしい者も一礼する。
あら
振り返り、ライオットはジャスティスと視線を合わせ、とまどいを露わにした。
とうかつ
評議員と言えば、都市国家を統轄する最高行政官である。 軍部を束ねる将官、 聖教会を束ねる教会長と並ぶ権力者だ。
やさ

のぞ
だがラエモスと名乗った男に、さして威厳は無い。 小さく背を丸めた、優しげな顔立ち
で教会の中を覗き込む。
「聖戦官ジャスティスと戦鎧鬼ライオットとお見受けします」
「その通りですが......」
よそお
ジャスティスも席を立ってうなずいた。 ライオットも、慌てて平静を装った。
ばんさん とちゅう
だま
おそ
「いったい何の用? 今、豪勢な晩餐の途中なのよ。 用があるならお早くどうぞ」
だが、ラエモスの視線は切実だった。
「頼みがあります。 あなた方のような方が必要なのです。 だからこうして会いに来ました」
クルセイダー
「僕は、ただの聖戦官ですよ」
せんがいき
「あたしもただの戦鎧鬼よ」
「だから頼むのです」
ラエモスは、再び頭を垂れて言った。
「我々は邪神に狙われています。命を......いや、脳髄を狙われているのです」
少年が、 ライオットを振り返る。
黙って、戦鎧鬼もうなずいた。
ぼんさん
二人の晩餐に、新たな客が一人加わった。

従者たちを外に残し、教会のテーブルにはラエモスだけがついていた。
パブロも席を外している。 ラエモスの前には、少年と少女だけが座していた。
さい
くろかみ
ちんつう
恐らく三十歳前後だろう。 黒髪を油で固め、沈痛な表情で座している。
青い長衣が映え、やけに蒼白な顔に見えた。
そうはく
「食後に見せるのは気が引けますが......」
てのひらだい
言って、ラエモスは掌大の金属片を差し出した。数万枚の平面映像を収録できる、携帯用の記録カー
ドだ。
受け取ったライオットが、おもむろに起動する。 瞬間、顔をしかめた。
「後でデザート食べるんでしょ?」
「あんたは見ない方がいいよ、ジャスティス」
「えっ、どうして?」
だが少年は、果敢に記録カードを引ったくった。 一瞥した途端、青ざめる。
いちべつ
とたん
「これ・・・・・・」
絶句して、ライオットに突っ返す。 戦鎧鬼は、もう一度「現場写真」を見つめ直した。
くだもの
はじ
ざせいしや
弾け散った果物にも見える。

だが割れているのは人間の頭蓋だ。大きな裂け目に、頭骨がはみ出している。
しかし裂目の中央は、ぽっかり空洞と化していた。
くうどう
「殺られたのは、あんたと同じ評議員だね」
犠牲者の青い長衣に気づき、 ライオットは映像を次々切り替えた。
「次は女ね......次は子供 家族全員?」
ふく
「使用人も含めて二十二人です」
たんそく
嘆息して、 ラエモスはうなずいた。
のうずい
「十日前です。 評議員エンリケー家全員、一夜のうちに脳髄を奪われました」
じゃしゅうもん
「邪宗紋だね・・・・・・」
ライオットは、記録カードをジャスティスに差し出した。
青い顔のまま、少年は恐る恐る、映像を覗き込んだ。
のぞ
やしき げんかん
あかじゅうたん
きょだい
わいざつ
恐らく、屋敷の玄関広場だろう。 広い赤絨毯に、ねじくれた白い巨大な文字が猥雑に書き残されている。
こしおび
少年は小首をかしげ、 腰帯を探る。 取り出した茶色い手帳は、すり切れてぼろぼろだ。
しる
〈アイゼンの書〉と記された手帳をめくり、 ジャスティスはため息をついた。
「すみません、知らない邪宗紋です・・・・・・」
クルセイダー
「いいんです、 現場を検視した聖戦官の知識にも、教会にも記録はありませんでした」
ラエモスは、また大きな息を吐いた。
ひょうざいん
ざんきつ
「さらに五日前には評議員ペレスが、三日前には聖戦官ガリエゴが惨殺されました」
ぎせいしや
「全部で犠牲者は?」
「七十二人。とにかくヴァスランの要職を占める評議員、聖戦官が次々と殺されました」
「なるほど......けどなんで、こんな辺境の村に来てるわけ? 何か手がかりでも?」
ライオットの問いに、評議員は昔ながらの紙製の地図をテーブルに広げて見せた。
はいそん
えい
「この先に......今は廃村ですが、ワルーン村というのがありましてね。
最近では人も通わぬ未開地ですが、そちらへ飛んでいく妙な光が目撃されています」
みよう
「光......ですか?」
まゆ
ジャスティスが眉をひそめると、ラエモスは手元の記録カードを指さした。
「そうです、 先をどうぞ」
少年は映像を切り替える。
そこには、慌ててシャッターを押したのか、少々ブレた映像が映し出される。闇の中、幾つもの赤い光が乱舞する様子だ。

やみ
らんぶ
かくだいかいせき
「次が拡大解析した画像です、どうぞ」
「う......わっ!」
ぎょうし
ジャスティスの小さな悲鳴を聞き、ライオットも身を乗り出して映像を凝視した。 顔を しかめて、
少年に同情する。
「デザートは明日の朝にすることね」
のうずい
せんめい
乱れ飛ぶ赤い光の中には、ぬめつく脳髄が浮かんでいる。映像が鮮明なだけに、生々し
さも格別であった。
いつち
あとち
「聖教会と評議会の意見は一致しました。
ワルーン村跡地には何かある......そう考えて、精鋭の調査部隊が編成されたのです」
「だったらさあ・・・・・・」
おそ
うーんと伸びをし、ライオットは向かい合う依頼主に、 眠そうな視線を振り向けた。
じょせい
たの
「なんでまたあたしらに助勢を頼むわけ?」
「ライオット、それは......」
クルセイダー
へんいじゅう
せいきし
「調査部隊だけで聖戦官が十数人、聖騎士なら百人ぐらいいるでしょ?」
なな
にら
ライオットは少年を制して、 ラエモスを斜めに睨みつけた。
「あんたたちだけで事を済ませればいいのよ。 なぜ、そうしないの?」
「私はただ、多くの味方が欲しいだけです」
きまじめ
ラエモスは、生真面目な声で言った。
ちょうせん
じゃしん
「恐らく............我々に挑戦してきた敵は邪神です。ならば、聖戦官は何人いてもいい。そんな
話をすると、この村の村長が教えてくれたんですよ。 巡礼の聖戦官がいると・・・・・・」
じゅんれい
ほほえ
怪訝な顔のジャスティスに、ラエモスは少しだけ微笑んで見せた。
たいじ
うで
ごえい ぜひ
「変異獣の巣を退治なさったそうですね。
それだけの腕をお持ちなら、護衛に是非加わって欲しい・・・・・そう考えて、参った次第で
す」
あせ
ラエモスは、額の汗を拭った。
だい

「特に、聖戦官ジャスティスには、是非とも協力していただきたい。 高位の邪神が相手なら、一人でも多くの聖戦官が必要なのです」
せんがいき
ライオットは、不服そうに評議員を見つめた。だが戦鎧鬼の刺すような視線にも構わず、ラエモスは聖戦官に正対した。
「お願いです、聖戦官ジャスティス力になってください! 相応の礼はいたします!」
少年は「現場写真」を見つめ、ラエモスを見つめ ・最後に相棒を見つめた。
「ライオット......」
ジャスティスは、相棒の顔を覗き込む。
だが戦鎧鬼は不機嫌そうに微笑んだ。
「変異獣退治の話、聞いてるのよね?」
「は、はい、もちろん......」
「帰ってきたのが今日だってことも?」
めんどう
かみ
ラエモスがうなずくと、少女は面倒そうに髪の毛をいじくった。
つか
ねむ
「だったらあたしたちが疲れてるの、分かるわよね?
今夜はさっさと眠りたいのよ。依頼の返事はまた明日にしてほしいわ」
「えっ、でもさっきライオットは............」
ふともも かげ
言いかける少年の太股を陰でつねり、ライオットは慇懃な笑みをつくってみせた。
「どうかしら、それで.........?」
「分かりました、急なお話で申し訳ない」
みよう
席を立ち、ラエモスは深々と一礼した。
なにとぞ
「ですが何卒お受けください。 何卒......」
もくれい
ライオットもはっきりと黙礼する。
その晩、 デザートは出てはこなかった。

「きかなくても分かってるわよね、ジャスティス? あたしはこの依頼、乗り気じゃない わ」
「でも・・・・・・」
J
「まあ聞きなさいよ」
きし
ねがえ
しんだい
ライオットは、ベッドの中で寝返りを打った。パブロが用意した教会の寝台は、暗闇で妙な軋み声を上げていた。
「あたしたちはここの教会に協力することになるのよ。らはあたしたちよそ者を・・・・・・はっきり言えばあんたを目の敵にしてくるわ。 そんな奴らと巧くいくはずないわ」
かたき
うま
「......かもしれないね」
せんがいき
「絶対と言っていいわ。それにね......」
戦鎧鬼は、ため息と言葉を同時に吐いた。
ひょうざいん

だいきら
「あたし、評議員って奴が大嫌いなのよ」
となり
いたわ
うたぐ
まくら
隣のベッドで、 ジャスティスは労るように問いかけた。
「ラエモスさんも、信じられない?」
いせいしや
だま
「疑り深いと思うでしょ。 でも為政者って奴には、ずいぶん騙されたわ。それに......」
告白するような声だった。
からだ
「あたしの身体をこんなにしたのも······
　　あたしの国の評議員たちだった。同じだとは思えないけど······同じに見えるのよ。ごめん」
「いいんだよ、それより......」
ジャスティスは、ベッドから身を起こしてライオットに手を伸ばした。
「こんな身体なんて言わないでよ。僕はライオットに何度も助けてもらってる。だから僕
　　はライオットの身体、好きだよ」
「バカね......!」

うず
枕に顔を埋め、ライオットは吹き出した。
「いくら相棒だって......女の子に『カラダが好き』なんて言うもんじゃないわよ」
「そうかな......僕、 変かな?」
くらやみ
そうよ、とうなずき、ライオットは少年の小さな手を握りしめた。
　　こんな暗闇でも、ジャスティスの手は確かに自分を探し当てている。 不思議なほど暖かい。
「・・・・・・じゃあ、僕の考えを言ってもいい?」
「ええ、どうぞ」
びしょう
静かに、ジャスティスは微笑を浮かべた。
「僕はラエモスさんたちに協力する。僕に何かできるなら・・・・・力を貸したい」
ライオットは手を強く握り、問い直した。
「あんた、あたしの話を聞いて......」
「もちろん聞いたよ。 でもね・・・・・・」

ジャスティスも、少女の手を握り返す。
ゆる
じょうだん
「子供まで殺されたんだ。 何か罪があるとは思えない。でも殺された。僕は許せないよ」
やつ
「ここの教会の奴らに任せとけばいいのよ」
クルセイダー
じゃしん
「僕は聖戦官だよ。 邪神がいると聞いて、見過ごすことは絶対にできないよ」
「協力が得られない確率が高いわ。引き受ける理由も無いし」
「断る理由も無いんだよ。 まさかライオット、見て見ぬ振りをするのかい?」
「冗談......!」
えがお
せんがいき
いたずら

ライオットが言いかけると、闇の中で少年が悪戯っぽく笑った。見えずとも、その暖かい笑顔がライオットの胸に広がった。
「あんたはずるいわね、ジャスティス」
まくら
うんざりした顔で、ライオットは枕に突っ伏した。
雄
「そうやって笑えば、あたしが引き受けると思ってるんでしょ? 嫌な子ね・・・・」
とうはつ
え
戦鎧鬼は、真っ赤な頭髪を掻きむしる。 そのいらつきに微笑み、ジャスティスは改めて問いかけた。
「じゃあ、引き受けるんだね?」
めんどうくさ
ライオットは、面倒臭そうに舌打ちした。
「...............分かったわよ」
「本当、本当にいいの?」
なっとく
「ただし・・・・・・引き受けるんじゃないわよ。 見て見ぬ振りをしないだけ、いいわね?」
びしょう
ライオットは疲れたように微笑した。ジャスティスが決心した...
・相棒はそれだけで、自分を納得させていた。
がいえん
しゅくえいち

翌朝、ライオットたちは、リオ・ロボ村の外縁に広がる宿営地ヘラエモスを訪ねた。
ほろばしや
と言っても、ただの草原である。整然と並んでいるのは、二十台以上の幌馬車だった。
せいきし
おのおの
たんれん
そして宿営地では、百人以上の聖騎士が各々の任務に就いている。 朝の鍛錬に励む者、
祈りを捧げる者、警備に当たる者・・・・・・
誰もが、見慣れぬ聖戦官ジャスティスに聖騎士式の敬礼を送ってくれた。
よく訓練された、規律正しい部隊に見える。
せんぱつ
「選抜された一線級部隊って感じね」
ライオットは、感心して口笛を吹いた。
ほんごし
「この作戦、聖教会は本気で本腰入れてるわね......」
兵士の一挙手一投足だけで、ライオットは部隊を正確に評価している。
まだ宿営地だと言うのに、部隊には緊張が張っていた。
きんちょう みなど
クルセイダー
それは聖戦官の動きだけでも感じられた。
おどろ
しゃく
すれ違う少数の聖戦官は、部外者を見てもさして驚きはしない。軽い会釈だけで済ませ、任務に没頭している。
ほっとう
ふつう
あいそ
サウンド

（ま、これが普通の聖戦官か......）
愛想の無さを覚え、ライオットは先を進む少年を思いだした。
元来、聖戦官とは聖教会の中でも絶対的上位者にある。 聖騎士が選ばれた騎士であるように、聖戦官とは選ばれた神官なのだ。
いつ
じゃしん
[サウンド]
そして聖戦官とは、 この世界で唯一、邪神にうち勝つ力......奇跡を行使する者である。
せいせんじょう
あかし
彼ら聖戦官が持つ聖戦杖は、ただの身分の証ではない。
その頂上に据えられた希宝石メタライトは、創世神アイオロスの力を召喚する媒体なのである。
しょうかん
ばいたい
くちく
邪神を駆逐するため、創世神の力をかりて戦う者。それが聖戦官だった。
奇跡召喚の複雑な文言を瞬時に起動すべく集中力を強め、高度な修練を積み重ねる。
そして何より強靭な信仰心を維持する。
きょうじん しんこうしん
いじ
聖戦官になりうる人材は、数万人の聖教徒から一人出るかどうかだ。自然と選民意識を持ち、時に傲慢な階級でもあった。
ごうまん
ジャスティスも、その一人である。
かいな
にお
いしつ
だが相棒の少年にエリートの匂いは皆無だ。
ジャスティスの異質さを改めて感じ、ライオットは草原を進んでいった。
きぼうせき
「話は通してあります」
ほろばしゃ
ラエモスは、その幌馬車の間を縫って、 先導役を務めている。
ジャスティスとライオットは、評議員の後に付いていった。
「ですが、 まずは指揮官と会っていただきたいと思いましてね」
「調査部隊の指揮官ですね、お名前は?」
ジャスティスが問うと、評議員は前方の幌馬車を指さした。
「彼がそうです. 聖戦官ウォーデン・・・・・・」
せいきし
いそが
ひときわ大きな幌馬車の周囲では、聖騎士たちが忙しげに立ち働いている。さながら臨時司令部といった風情だ。
ふぜい
たいせん
その中央で、一人の男が座していた木箱から立ち上がった。 泰然と白い聖衣を着こなし、ゆっくりとこちらに視線を転じる。
どの
「ラエモス殿、その二人か......?」
おうよう
しょうかい

低い声を放つ男に、ラエモスは鷹揚にうなずいた。 そして二人に紹介する。
クルセイダー
「ヴァスラン聖教会の聖戦官、 ウォーデン殿ですよ」
ほそおもて
きんぶち めがね
めた
背の高い、細面のギアナ人だ。 金縁の眼鏡がやけに冷たい印象を与える。 三十代半ばの彼もまた、
ジャスティス同様、聖戦杖を握りしめていた。
せいせんじょう にぎ
「初めまして、ウォーデンさん」
やはり周囲の聖騎士たちが敬礼を送る。
歩み寄ったジャスティスも、笑って手を差し出した。だが儀礼は、無視された。代わりに、ウォーデ
ンはラエモスを斜めに見た。
なな
「まだ子供ではありませんか............!」
聖戦官ウォーデンは、ジャスティスを見下ろした後、ライオットを一瞥した。
たよ
「それに女だとも思わなかった。本当にこの二人、頼りになるのですか?」
「それはもちろん......」
まちが
ラエモスは、自信を持って胸を反らした。
へんいじゅう
いちべつ
「昨日、変異
獣グズルンを巣ごと退治したと村長から報告があったのだよ。頼りになることは間違いない」
「ならいいのですが......」
ウォーデンは、声も低めずに言を続けた。
みよう
「作戦の失敗は許されません。妙な足手まといになるなら、連れて行かない方がいい」
ライオットの胸で、怒りの小爆発が起きた。
えんりよ
きづか
ウォーデンの言葉には、遠慮も気遣いもない。こめかみ辺りの血管がねじ切れかけた。
(なんなのよ、この聖戦官は······)
だが落ち着いて、指揮官を観察してみる。
そうはく
こわ
どう
きんちょう
顔色は、妙に蒼白だ。表情も強ばり、 微動だにしない。
声に緊張も現れていた。辺りには書類の山と無数の薬瓶が散乱している。
くすりびん
ただなか
誰が見ても、ウォーデンは非常識な激務の真っ只中にいる様子だった。
いっぱい
(作戦のことで頭が一杯らしいわね......)
いきどお
仕方なく憤りを押さえると、 ライオットは顔をしかめて相棒に囁いた。
「ずいぶんはっきり言うわよねえ・・・・・・あたしたちの目の前でさあ・・・・・・」
「ラ、ライオット......」
せんがいき

しゃべ
戦鎧鬼も、わざと聞こえるように喋っている。だが動じる気配も無く、ウォーデンは二人の協力者に
向き直った。
クルセイダー
たいど
あやま
つか
「ああ......悪かった。 私の態度で気を悪くしたなら謝ろう。少し疲れているのだ・・・・・・」
くたびれた息を吐き、ウォーデンは改めて手を差し出した。
こんがい
「聖戦官ジャスティスに、戦鎧鬼ライオットだな。 ではとにかく、よろしく頼む。
危険な任務になるだろうが、 どうか協力してくれ」
またも無感情な声で素っ気なく言う。
「うーん、どうしよっかなあ......」
あくしゅ
一応、握手を交わしながら、 ライオットはそっぽを向いてみせた。
そこ
「あんたらのおかげで、昨夜はごちそう喰い損ねたのよ。 協力する気出ないなあ・・・・」
めんどう
たいこう
面倒そうな声で、 ライオットも対抗した。
「またそんな、ライオット......」
「だってそういうもんじゃない」
きょうしゅく
かす
とウォーデンは、少しだけ恐縮するように微かに礼をしてみせた。
「本当に悪かった・・・・・・信用していないわけでもない。だがこの作戦はだ。君たちが戦力にな
らなければ、我々が迷惑する。 そして君たちにも迷惑がかかるだろ
う......それを心配しただけだ」
めいわく
じゃしん
邪神退治なの
ちんしゃ
言葉を選びながら、ぎごちなく陳謝する。
ゆうのう
おそ
>
ライオットは、この表情の変わらぬ男を理解しようと努めた。有能だが、人付き合いが
恐ろしく下手なのだろう。感情がまるで伝わってこない。
ひろう
じゅうせき
そしてこけた頬が、ウォーデンの疲労と心痛を物語っている。 作戦の重責で、周囲にま
で気が回らないのかもしれない。
ライオットに少しだけ、同情の念が湧いた。
じゅんれいしゃ
「気にしないでください、 ウォーデンさん」
察したのか、ジャスティスも微笑する。
びしょう
「巡礼者でも、その土地の教会に協力するのは当然です。 なんでも協力しますよ」
少年は相棒を指さし、嬉しげに口を開いた。
たよ

「それにライオットは. ・他のどんな戦鎧鬼にもひけをとらない最強の人です!
必ずお役に立ちますよ、僕が保証します」
「あんたは誰が保証するのよ・・・?」
迷惑そうにライオットはうなじを掻いた。
「まあいいわ、聖戦官様に頭下げられちゃあ、仕方ない。
日給五千ドルク、食事付き、弾薬の無償提供で手を打つわ」
しょうていきょう
「そう言ってもらうと助かる」
あっさりと、だがやはり無感情に、ウォーデンは礼を言った。
フロンティア・クルセイダーズ
およ せいきし
けつめいしや
「我々新大陸十字軍・・ ・聖戦官及び聖騎士は、 邪神や血盟者と戦い、
市民を守るのが任務だ。どうか聖職の一端を担うと考え、協力してくれ」
せいしょく いったん にな
力の込もらぬ励ましに、ライオットは苦笑する。
その笑みを、ジャスティスは不思議そうに見上げていた。
「なにがおかしいのさ、ライオット? 僕、変なこと言ったかな?」
「あんたは言ってないわ、あんたはね」
頼りになるのかどうか、今度はライオットが指揮官を心配する番だった。だがもう二度も「悪かった
」と言わせている。 ライオットには、 それで十分だった。
「おおっと、新入りかい?」
だん
ほえ
とつぜん
微笑むライオットに、突然にやついた声がかけられた。振り向けば、白銀の装甲 鎧が立っている。
長剣を携えた黒髪の騎士は、黄色い歯を見せつけて一同に近づいた。
ちょうけん たずさ
くろかみ
めがね
「どうやらウォーデン様のお眼鏡にかなったらしいな。
めでたし、めでたし...... うまいこと、がんばれよ」
「あんた誰よ?」
おく
申し遅れたな。このヴァスラン聖教会の聖騎士団長、ガルシアというもんだ」
そうこうよろい
慇懃に礼をし、右手を差し出す。
あくしゅ
しり すべ
だが聖騎士ガルシアの手は握手もせず、するりとライオットの尻に滑り込んだ。
[............!]
あぜん
ジャスティスが唖然とする。
しかしライオットは、表情も変えずに左腕を振り上げた。瞬間、彼女の手首から炎熱刀の刃が素早く
飛び出す。
・ブレード いぼ すばや
あご
ガルシアは後ろへ飛び退き、大げさに顎をさすった。
「ひえーっ、本当に戦鎧鬼なんだな! いい斬れ味だよ、髭を剃るには丁度いい!」
「つ、次は首を取るわよ!」
みよう ろうばい

妙に狼狽して、ライオットはわなないた。
せいきし
ちかん
「あんた、本当に聖騎士団長なの! ただのピカピカ鎧の痴漢じゃない!」
ごあいさつ
「御挨拶さ。スキンシップ、スキンシップ」
きよか
「誰がスキンシップを許可したのよ!」
めまい こら
だが両者の間で、ジャスティスは目眩を堪えていた。
けんか
「やめようよ、ライオット.....ここで喧嘩なんてさあ・・・・・・」
「喧嘩じゃないわ、悪いのはあいつよ」
おれ
「そうそう、悪いのは俺。 この俺様の手」
かた
へらへらと笑いつつ、ガルシアはジャスティスの肩を気安く叩いた。
たた
「まあ君にもいつか、分かる日が来る。 素晴らしいものは意外に身近にあるものさ」
「素晴らしいものって何ですか?」
「だから君の相棒のふくよかな........」
もう一度、ライオットが炎熱刀を振るおうとしたその時・・・
「いい加減にしてください、団長殿!」
どの
......
すばや
素早い声と共に、少女が機敏に前に出た。
そうこうょろい
ちょうけん
少女............と言っても、聖騎士である。 ガルシア同様、白銀色の装甲鎧をまとい、
長剣を腰に下げている。
こし
きんぱつ
あざ
かみ
だが何より印象的なのは、その波打つ金髪であった。
夜目にも鮮やかなその髪は腰まで届き、躍動的に揺れている。

やくどう
ひらめ
女聖騎士は、上官の前に立ちはだかり、強い眼光を閃かせた。
クルセイダー
心の
「よその聖戦官様に見せる態度ですか、 それが! まだ朝のお祈りもしていないのに!」
「なあんだ、アレナか」
うるさ
かわい
煩そうに手を打ち振り、ガルシアは女騎士から飛び退いた。
しゅみ
しこう
「女性とのスキンシップは俺の趣味だぜ。 上官の嗜好くらい覚えててくれよ」

「忘れたいですよ、いい加減」
呆れて、アレナと呼ばれた女騎士はため息を吐いた。きりっとした表情が一瞬緩む。意外に可愛らしい顔立ちであった。
「だがいいところに来たな、今日からこのお二方が助っ人として加わる。馬車の手配、その他いろいろ、お前が面倒見てやってくれ」
めんどう
「分かりましたよ、お任せを」
んざんもの
胸を反らしてうなずき、アレナは新参者に目を向けた。ジャスティスは不安な顔のまま、ライオットは不満な顔のままである。 が……
「聖騎士アレナと申します、以後よろしく」
聖騎士式の敬礼を向けると、女聖騎士はジャスティスにウィンクして見せた。
うわさ
「聖戦官ジャスティス様ですね? 噂通り、可愛いんですね」
「え、ええっ……?」
ゆる
背の高いアレナに見下ろされ、ジャスティスは顔を赤くしている。やけに馴れ馴れしい聖騎士に、ライオットは唇をひん曲げた。
くちびる
「なんかロクな聖騎士がいないわねえ……」
「あらっ、妬いてるんですか? これは失礼」
「あんですってえっ!」
のほ
ぺろっと舌を出したアレナに、ライオットも頭に血を昇らせた。ガルシアは、にやにやと笑いつつ、大きなげっぷを吐いた。
どの
「じゃあよろしく頼むぜ。 ちなみにライオット殿が水浴びする時は、必ず俺に知らせるんだ、いいな?」
「承知しました、 スケベ団長殿!」
にっこり笑って、言い放つ。
はな
ただ一人ウォーデンだけは、慣れているのか、一座を無視して木箱に座り直した。
あた
「出発は翌朝、標準時で五時だ。時計を合わせてくれ。 事後の指示は追って与える。 それまでは二人とも、待機していてくれ」
「よろしくお願いします」
「十八号車にセシアがいるはずだ。 生活用品一式、 彼女から受け取ってくれ。 以上だ」
せいきし
にぎ
女聖騎士は、ジャスティスとライオットの手を取ると、力強く握りしめた。
おそ
ばか
「さあどうぞ、こちらです!」
「ア、アレナさん、そんな急に……!」
「ちょっとあんたねえ……!」
急いで一礼し、ジャスティスはその場を慌ただしく辞した。
アレナに引きずられながらも、ライオットはガルシアに舌を突き出してみせる。
聖騎士は無反応だった。
んそう
そしてようやく… 喧噪がおさまった。
「私は…..余計な事をしたのかね?」

恐る恐る尋ねるラエモスに、ガルシアは嫌らしい笑い声を上げて見せた。
「いやあ、今回は危険な任務だ。 頭数は多いに越したことないですぜ。 それに....」
ぎょうし
好色な声が遠のく三人を凝視する。
「女は結構、上玉ですからなあ」
「馬鹿なことを言うな、 警備につけ」
つか
ウォーデンは書類に目を落としたまま、疲れた声を吐き出した。
じゃま
「それから彼らともめ事も起こさんでくれ、任務の邪魔だからな」
「俺は気の強い女が好きでしてねえ」
こうてい
はな
ガルシアは肯定も否定もせずに、その場をふらふらと離れていった。
ふと、ウォーデンは眼鏡の位置を補正した。

Page 57

じゅんれいしゃ
「巡礼者ジャスティスか......」
どこかで聞いた名ではあった。
それがどこか思い出せない。
なっとく
まあいいだろうと納得し、 ウォーデンは再び書類の山に視線を戻した。
よううん うずま
きょうちょう
厚い雨雲の中に、赤黒い妖雲が渦巻いている。 凶兆であった。

もど
「あらためて......聖騎士アレナです。よろしく、ジャスティス様!」
一礼して、 女騎士はジャスティスの手を握りしめた。眩しいほどの健康的な笑顔である。
「ああ、こちらこそよろしくです」
はつらつ
人なつっこいジャスティスですら、気圧されている。と言うより、ここまで溌剌とした
人間を見たことがないのだ。
それはライオットも同様である。続いて握手を交わし、三人は宿営地を歩き始めた。
「あたしらのこと、どこまで聞いてるの?」
クルセイダー せんがいき
「巡礼の聖戦官と戦鎧鬼。 それだけよ」
ライオットには平易な物言いで返答する。 アレナは、後方に遠ざかる司令部を憎々しげ
に指さした。
にくにく
かたぶつ
「だって見たでしょ、 ウォーデン様を!
あの無表情な堅物が、あたしみたいな平の聖騎士に事細かに事情を説明すると思う?」
「言えてる...... じゃあガルシアは?」
「ただのスケベなおっさん!」
鼻で笑って、そう言い切る。
ばっとうじゅつ つか
「ああ見えてサーグ流抜刀術の遣い手なんだけどね・・・・・・ヴァスラン聖騎士団は、あの人のお
かげで評判悪いのよ。いい迷惑!」

めいわく
ライオットは不敵に笑い、しばしこの風変わりな聖騎士を観察した。
せんとう ぎじゅつ しんこうしん
せんぱつ
聖騎士と言えば、多くの騎士の中から戦闘技能と信仰心を基準に選抜された対邪神戦士 である。
邪神退治用の武具の所有が許されてもいる。いわば聖教会のエリートだ。
最近はその地位を金で買う者も多いと言うが、アレナは違うだろう。会ったばかりでそ
う思わせるほど、魅力的な少女だった。
みりょく
えがお
もど
ジャスティスもそう感じているのか、いつもの笑顔を取り戻している。
「出発は明日の朝ですよね?」
「はい。このリオ・ロボ村を過ぎると、もうワルーン村までは未開地が続きます。ここが とちゅう
ほろばしゃ最終補給地ですね。 恐らく途中で幌馬車も通れない道になるでしょう」
下草を踏みつつ、三人は宿営地を進んだ。
じゃしん
あきら
あとち
「その場合、徒歩でワルーン村跡地まで行くことになります。
ジャスティス様にはご面倒でしょうが、どうかよろしくお願いします」
おどろ
「様は、 よしてください」
ジャスティスは、アレナの顔を見上げた。
みじゅくもの
「僕はまだ未熟者です。ましてここの教会にも属していない。呼び捨てで結構です」
クルセイダー
「そんな、聖戦官様を呼び捨てだなんて!」
かた
たた
だが驚くアレナの肩を、ライオットは軽く叩いてやった。
「この子がいいって言うのよ。 そうしてあげて。
あたしも相棒に様をつけられると、なんだか調子が狂っちゃうわ」
「本当にいいんですよ、 アレナさん」
「な、ならいいけど......」
きみよう
アレナも首をかしげ、 この奇妙な二人をしげしげと見つめた。
「あたしも調子が狂いそうだわ」
つぶや
諦めたように呟き、アレナは二人を一台の幌馬車に導いた。
せんたくもの
ログタ馬二頭に牽かれた馬車は、意外に大きい。周囲には洗濯物と調理器具が山積みにされていた。
めんどう
「すみません。お二人は員数外なので、この生活用の馬車で移動していただきます」
やみ
「かまいませんよ、お気になさらずに」
ジャスティスの言葉を受け、アレナは幌馬車の裏手に回り込んだ。
そこには無数の調理皿を次々に洗っていく少女の背中があった。
しの
「いたいた・・・・・・ねえ、 セシア」

だがアレナが呼びかけても、皿を洗う手は止まらない。一心不乱な後ろ姿に、三人は恐る恐る忍び寄った。
かんそ
「ねえ、セシアってばあ!」
「きゃあああっっ!」
ぜつきょう
闇の中で肩を叩かれ、皿洗いの少女は絶叫と共に飛び上がった。
そのまま駆け出すようにして、ジャスティスの胸に飛び込んでいく。
「わあああああっっ!」
せい んじょう ほう
聖戦杖も放り出し、 ジャスティスはその少女を抱きとめる。
かみ
ほうこう
瞬間、髪の芳香が少年の鼻をくすぐった。
むすめ
そうしょくひん
けしょう
かいむ
簡素なエプロンを身につけた細身の娘だ。 装飾品も無く、化粧っ気も皆無に見える。
かたさき
e
あまいろ
なめ
かがや
まつげ
だが肩先で揺れている亜麻色の髪は、滑らかな輝きに満ちている。涼やかな睫は長く、唇はほのかな紅色だった。
くちびる
べにいろ
「ちょっと何やってんのよ、セシア!」
あしもと
くず
いっぱいたた
めいわく
大きく笑い転げ、アレナはライオットの肩を力一杯叩きまくる。 ライオットは迷惑そうに顔をしかめた。
あいさつ
「この子がウォーデンの言ってた子?」
「そうよ、 セシア! 私の親友なの! ほらあ、セシア! お二人にご挨拶してえ!」
まじまじとジャスティスを見つめるや、顔を真っ赤にして少女は飛び退いた。その瞬間、足下の食器を蹴散らかす。 散乱した皿をかき集めつつ、少女は頭を下げた。
「す、すみません! セシアと申します......」
「あ、ああ......ジャスティスです、どうも」
しり
慌てたように、少年も皿拾いを手伝い始める。と、ジャスティスの尻も、別の皿の山を 突き崩した。
つぶや
ライオットは、ため息を吐いて呟いた。
とうとつ
「あんたら、似たものなんとかみたいよ」
唐突でせわしない、出会いの夜であった。

【第二章 ネヴォワ湿地帯/襲撃】

「出発ーっ!」
クルセイダー
しつちたい
ばしゃたい
聖戦官ウォーデンの一声で、幌馬車隊は整然と移動を開始した。
「お世話になりましたあ!」
ぎょしやだい
幌馬車の御者台から身を乗り出し、 ジャスティスはいつまでも手を振っている。
もうリオ・ロボ村は、下に遠く離れていた。だがしい山道を登る幌馬車隊に、パブロたち村人も何度も頭を下げている。
ひ
の
まだ陽も昇らぬ早朝だ。 それでも多くの子供が馬車を追い、別れの時を惜しんでいた。
「ジャスティス様、ありがとう!」
「お姉ちゃん、また来てねえ!」
にだい
呼ばれたのに気付きながらも、
ライオットは荷台にうずくまったままだった。だが気分が悪い訳ではない。むしろ深く安堵しているのだ。 今度の村ではバレずに済んだ・・・・・・
あんど
「ずいぶん感謝されてるのねえ・・・・・・」
きじょう
かんたん
黒いバルモン馬に騎乗して、聖騎士アレナは感嘆した。 幌馬車に愛馬を寄り添わせ、御者に向かって笑いかける。
「よっぽど良いことしたのね、二人とも」
「そ、そうね......」
たづな
小さくうなずき、 セシアは手綱を絞った。
さいこうび
じまん
二十台以上の幌馬車隊。 そのほぼ最後尾にジャスティスたちが乗る馬車があった。
あやつ
わき
セシアは慣れた手つきで馬を操り、ぬかるんだ山道を登っていく。 その脇でジャスティスは、感心したように声を上げた。
うま
きしょう あら
「馬車を使うの、巧いんだね。 ログタ馬は気性が荒いから、 女の子には難しいのに」
「この子、けっこう器用なのよ」
自慢するように、アレナは胸を張った。
「本当はウォーデン様の秘書官なのよ。 まだ見習いだけど・・・・・・何でもできるから、いろんな雑用を頼まれちゃうのよ。ね、セシアー」
「うん......」
かれん
もくもく
口数の少ないセシアは、黙々と馬車を進めている。 その横顔を、ライオットは荷台から改めて眺めてみた。
ほか
おそ

び れい
可憐という他ない。恐らく十二歳ぐらいだろう。
華美でも美麗でもない。不思議なほど、清楚な雰囲気が漂っていた。
せいそ ふんいき ただよ
からだ
はだ
細い身体や白い肌、消え入りそうな声の全てが、脆い美術細工のようだった。
支えてやらねば立てぬのではないか。 そんな心配すら、胸の内に湧き起こってくる。
守ってあげたくなる少女であった。
(こんな妹がいたら......)
もうそう
ライオットは、自分の妄想を自嘲した。
ちょう
そば
だがもしそうであったら・・・・・きっと心配でずっと側に付き添うだろう。 友達に自慢する
のも確かだ。まとわりついてきたら、めちゃくちゃに可愛がるだろう。
そこまで想像して、もう一度自嘲した。
幸せは、想像の世界にしか無いのだった。
こうたいしょう
「あんたとは好対照よね」
かわい
荷台からアレナに言い放ち、ライオットは大きく伸びをした。
「まあ、親友なんてそんなもんだけどさ」
「ええ、そうよ! あなたとジャスティスみたいにね!」
「どういう意味よ?」
「ガサツと上品の好対照ってこと!」
あき
よく言うわよ、と呆れて笑い、ライオットは大樽に背をもたれさせた。
ゆる
じょうだん
昨夜会って以来、このアレナの前では気が緩んでしまう。自然に冗談がこぼれ、笑みが生まれた。
こんなことは滅多にない。
めった
せんがいき
(戦鎧鬼ライオットも明るくなったもんね)
胸の中でそう思う。
一年前の自分が何をしていたか、どんな気持ちでいたかを考えると、今では恐ろしい。
血と硝煙の日々だった。
しょうえん
だがそれも、一人の少年との出会いで大きく変わった。 周囲の人間には分からないかも
しれない。だが確かにライオットの心の傷は、幾つもふさがれ癒されたのだ。
いや
さむけ
だま
早朝の寒気に身を引き締め、ライオットは相棒の背中を黙って見守った。
ひど
「それにしても酷い道だね!」
ぎょしゃだい
がたつく御者台で、ジャスティスが叫んだ。
こうえきろ
「これでも昔は交易路だったんでしょ?」

「はい、二年前までは......」
やっと、セシアは自分の言葉を紡ぎだした。
はいそん
へんいじゅう
「でもワルーン村が廃村になった後は、行き交う人もなくて・・・・・変異獣も多く出るらしく、今では未踏地域に逆戻りだそうです」
みとう ちいき さやくもど
「だろうね、この道じゃあ・・・...」
めぐ
うなずいたジャスティスは、道の左右を見回した。 つられてライオットも視線を巡らせる。細い山道の両側には、昼なお暗い森林が続いていた。 ただの森林ではない。湿地の上にできた森、そして山である。
しつち
そうくつ
りゅうき
「ボルボラス峠の未踏地域を思い出すよ。 あそこも変異獣の巣窟だったからね......」
きんちょう
ジャスティスは、緊張した声で呟いた。
フロンティア
新大陸は、八地方から構成されている。
つぶや
アトラス、ローマナ、ヴォルガ、 ザクセン、 ギアナ、ヤマト、 イスラマ、 アフロス。
かくぜつ
オールド・ハザード
旧八大陸の名を冠した地方は、いずれも険しい地形で隔絶されていた。《古代災厄〉で隆起した山脈、断裂した海峡、干上がった砂漠などが、未踏地域として健在だからだ。
だんれつ
かいきょう ひあ
きぼく
どじょう
てき
おせん
また大気や土壌、水質が生活に適さぬほど汚染された地域も、未踏地域として放置されていた。そういう土地こそ、 変異獣の発生源なのだ。 禁断の地と言ってもよい。
「これは生活用品を運ぶ馬車だけど、他の馬車は武装してるわ」
アレナも視線を左右に配って、説明した。
せいきし
ほうざ
かえん
「各馬車に聖騎士を五人ずつ配置、二〇ミリガトリング砲座と火炎放射器は全部に......対
戦車ミサイルも何台か積んでるわ」
じゃしん
「でも相手は邪神でしょ?」
ライオットは、身を起こして口を挟んだ。
テイターン・クラス
はさ
「下位の邪神ならともかく、 邪神鬼級以上となると、 物理攻撃は歯が立たないわよ」
せんがいき
「あら、戦鎧鬼ライオットでも?」
「だからジャスティスと組んでるのよ」

かた
たた
ライオットは、相棒の肩をぽんと叩いた。
たよ
サウンド
「結局、最後に頼りになるのはこの子の奇跡なんだから。だからラエモスだって協力を依頼したんでしょ」
「相手の力が分からないし...どの程度の位階の邪神なのかもつかめてないからね」
アレナも大きく息を吐く。
こう
すべ
彼女とて、邪神に抗する武具を装備しているはずだ。
それでも全ての邪神に有効とは限らない。その不確実さから来る不安感が、
幌馬車隊一同に蔓延しているようだった。
ほろばしゃたい
まんえん
「まあ、戦ってみるしかないわね」
ライオットは、ふとセシアを見た。
クルセイダー
小さな少女は、少し青ざめているようだった。 無理もない。 聖騎士でもなく、 聖戦官で
もない彼女には、自分を守る力すらないのだ。 この調査隊で一番不安なのは、彼女だろう。
だがその不安を感じたのか、 ジャスティスも少女の横顔を見つめていた。
「心配しないで、セシア」
にっこり笑って、少年はうなずいた。
みじゅくもの
だいじょうぶ
「僕はまだ未熟者だけど・・・・・・がんばって君を守るよ。大丈夫、ちゃんとヴァスランに帰れるさ。だから心配しないでね」
「あ、ありがとうございます... ジャスティス様・・・・・・」
「様はいらないってよ」
ライオットが後ろから言うと、セシアは初めて微笑んだ。柔らかく暖かい、日差しのよ
うな笑顔だった。

夕刻まで、馬車は前進を続けた。
しつちたい がいえんぶ
山を一つ越え、 ネヴォワ湿地帯の外縁部にさしかかっている。
すでに交易路は、どこまでも広がる沼地に埋もれていた。
ぬまち
「馬車で進めるのはここまでだ」
えんじん
ウォーデンの判断で、宿営地が建設された。幌馬車で円陣を組み、その内側にドーム型
のテント群を設営する。全てが完成したのは、もう日没をとっくに過ぎた頃だった。
にちほつ
ころ
「はい、次の方どうぞ! はい、どうぞ・・・・・・」
なべ
焚き火ので、ジャスティスは威勢良く声をあげていた。火には大きな鍋がかけられ、
多種の野菜を煮込んだシチューがぐつぐつと音を立てている。
たまじゃくし
せいきし
その鍋に玉杓子を突っ込み、 ジャスティスは聖騎士たちにシチューを取り分けていた。

せんもん ちょうりかん ずいこう
なにしろ百人以上の食事である。
専門の調理官も随行しているが、手は足りていない。そこに自ら志願し、手伝い始めているのだ。
しがん
「あ、あのジャスティス様、 そんなことは我々が・・・・・・」
「いいんですよ、僕、やりたいんです」
きょうしゅく
中年の調理官が恐縮するのも構わず、 ジャスティスは嬉々として仕事を手伝っていた。
「ウォーデンさんから警備はしなくていいって言われました。 でも他に仕事ないんです よ。
だからこの仕事、 手伝わせてください」
セシアから借りたのか、エプロンまで着けて張り切っている。
その姿に、シチューの列を成す聖騎士たちは唖然とした。
せん
「はい、どうぞ。 たくさん食べてください」
「あ、ああ、すみません......」
とりにく
「はい、鶏肉も入ってますよ、 どうぞ」
わき
かんい
シチューの脇には、好き勝手に選べる料理が大皿に幾つも並んでいた。 簡易テーブルに
並んだ大皿の後ろには、なぜかライオットが調理番として立っている。
「こらあんた! 一人でそんなに肉取らないの! 他の奴の分がなくなるじゃない! そっちのあんたもよ!
じゃがバターは一人一個!」
すわ
きみよう
各自のテントの周囲では、すでに食事が始まっている。
地面に座ったアレナは、奇妙な配膳係の行動にさっきから呆れていた。
はいぜんがかり
あき
んがいき
「あんな戦鎧鬼見たことないわ」
アルセイダー
「あんな聖戦官様も......」
つぶや
じゅんれい
なぜか嬉しそうに、セシアも呟く。
少女の視線は、ずっとジャスティスを追っている。気付いたアレナも、親友の横顔を羨
ましそうに見つめていた。
せいせんじょう
ばせい
だが一方で、どこかの車座から低い罵声も届いていた。
「あれが聖戦官のすることかよ・・・・・・」
ひくつ
「巡礼ってのは、卑屈で嫌だぜ・・・・・・」
ののし
ある意味、当然の罵りだった。
せい
畏敬の念をもって語られるのが、聖戦官というものだ。 聖騎士に敬われてこそ、と思う
者も数多くいる。
だいべん

ひび わた
その声を代弁するように、低いガルシアの笑い声が辺りに響き渡った。
「これはこれは............どこの下働きかと思えば、ジャスティス様じゃありませんか」
ぶしょうひげ
あざけ
白銀の聖騎士は、無精髭をしごいて嘲りの声を上げた。
「聖戦杖より、そのおたまの方が良くお似合いですぜ。なんなら転職なさったらいかがです?
いい奥さんになれそうだ!」
おく
追従する聖騎士の笑いもこだまする。
だがジャスティスも、また笑っていた。
「そうですね、平和になったらそうします」
ぶさた
「平和ねえ、とんとご無沙汰だなあ......」
それだけ言って、ガルシアは立ち去ろうとする。だが付き従う二人の聖騎士は、なおも下卑た笑い声
を響かせ続けた。
どの
「団長殿、こいつ本当に足りねえらしいぜ! 自分がバカにされてるのも分からねぇ!」
なぐ
もど
「ちょっと殴りゃあ、正気に戻りますさ! さあ、こっちへ来てくださいな!」
酔っている声だった。
うで
しゅんかん
一人が、 ジャスティスの腕をつかみ、乱暴に引き寄せる。
その瞬間初めて、少年の顔が苦しげに歪んだ。
おれ
「は、放せ......」
「いいから、ジャスティス様あ!」
「俺たちと遊んでくださいよ!」
クルセイダー
りょうゆう こうい
だれ
さすがに周囲の聖騎士たちが、 そして聖戦官たちが僚友の行為を止めようとする。
だが誰よりも早く、一本の腕が酔った聖騎士を捕まえていた。
「放せって言ってるじゃない」
はら
さえぎ
斬り払うような声で、 ライオットが遮った。
さんがいき
にぎ
いつの間にか、戦鎧鬼は聖騎士の手首を握りしめている。 ライオットは、低い声で聖騎
ひらめ
士たちに眼光を閃かせた。
「聞こえてんでしょ? 放すのよ。 聖戦官ジャスティス様の命令なんだから......
飲んだく聖騎士は黙って命令きいてりゃいいのよ」
だま
さわ
みにく
もく

その殺気のこもった声に、周囲の聖騎士たちが沈黙する。
アレナもセシアも、腰を浮かせたまま凍り付いた。
くちぶえ
かんげい
こお
だが聖騎士たちは口笛を吹いて、その登場を歓迎した。
せんがい
「おおっと......戦鎧鬼ライオット殿のお出ましですか!」
「それじゃしょうがねえ! 引き下がろう!」
やさ
てきび
「ジャスティス様は優しいけど、あんたは手厳しいらしいからなあ!」
それはそうだ、と一人が最後に言った。
さいきん
「あちこちの戦場で何万もの命を奪った戦争野郎だ。
核兵器に毒ガス、細菌兵器・・・・・・そんなものバラまかれちゃ勝てるはずもねえ」
わいきょく
そしてにやりと、唇を歪曲させた。
おせん
「触るだけで、汚染されるかもな......」
「おおっと、そりゃいけねえ!」
せい。
腕を握られた聖騎士がおどけて騒ぐ。
えがお
さわ
醜い笑顔だ。そう思った瞬間、ライオットは手首を素早くひねり上げた。
悲鳴を上げる前に、足払いもかける。
あしばら
「この野郎! やるつもりかっ!」
ちょうけん
もう一人の聖騎士が長剣に手をかける。
「機械人間ごときが、聖騎士様に刃向かいやがって! 身の程を知れ!」
(それはお前らのことだよ)
じゅう
ちゅうちょ
しょうがい
生涯に何度も聞いたセリフに、ライオットは反射的に銃に手を伸ばした。 躊躇はない。
殺すべき人種だと一瞬で判断した。
すばや
さけ
いちげき たた
だが叫んだ聖騎士は、素早く平手で打たれていた。戦鎧鬼より早く、ジャスティスが怒りの一撃を叩きこんだのだ。
「僕は、あなたの上司ではありません......」
きぜん
ジャスティスは、毅然としてそう言った。
「だから命令する権利も資格もない‥‥‥けど、 これだけは言っておきます。 ライオットは
あなたよりずっと立派な人です‥‥‥ あなたに馬鹿にされるような人ではありません!」
「くっ......!」
聖騎士は正論に声も出ない。
だつりょく

ふんど
ライオットも、銃に伸ばした手から脱力した。憤怒が瞬時にかき消える。それだけの力を持った、
ジャスティスの言葉だった。
まえがみ
こうかい
りんか
だが組み敷かれた聖騎士は、まだ無様に地面の上でもがき苦しんでいた。
どの
「だ、団長殿! 助けてくださいよ!」
「あら、そう動くならこうするわ」
にぎ
ライオットは、手首一つ握っただけで、完全に聖騎士の動きを封じていた。
戦鎧鬼は、前髪を掻き上げ、ガルシアに向き直った。
かく
「悪いけど、あんたらごときに核兵器を使うほどバカじゃないわ、 これで十分。
それでもやろうってんなら、抜いてもいいわよ」
たいけん
ライオットは、背中の大剣に手を伸ばした。
「後悔するのは、あんたらになるけどね」
きんちょう
せきばら
ガルシアが、何か言いかけた時・・・・・・緊張を断つように、一つの咳払いが吐き出された。
「腹が減った、料理をくれ」
ウォーデンが、シチュー鍋の前で憮然として立ち尽くしている。一瞬、ガルシアを暁
み、ジャスティスは元の位置に駆け戻った。
「すみません、ただ今......」
もど
せいきし
その一言で、一座が散開する。 ライオットも手首を放し、 聖騎士を解放した。
「ウォーデン様、こいつが!」
「喧嘩を売ったのは貴様だ、リロイ。 そして許可無く飲酒をしたのもそうだ」
なが
せんとう
クルセイダー
なっとく
シチューを眺めながら、 ウォーデンは言い放った。
だんじき
「戦闘行動に入るまでの二日間、断食を命じる。向こうに行っておれ」
ばかやろ
「しょうがねえなあ、馬鹿野郎」
ほろばしゃ
きんぱくかん うんさん
ぼやくガルシアの声も、遠くの幌馬車に去っていった。 緊迫感が雲散する。
「今のはガルシアの部下が悪いが.........」
シチューを受け取りながら、 ウォーデンはこわばった声で告げた。
「君も悪い。警備はするなと言ったが、配膳までしろとも言っておらん。威厳の無い聖戦官に、従う
聖騎士なぞいるまい」
「確かに僕に威厳はありません...」
はんせい
ジャスティスも、反省するような声で頭を下げた。

「無用な争いを招いたのも僕のせいかもしれません。 でも僕はみなさんを従わせるつもり
もないし......それじゃいけないんですか?」
じゅんれい
「それは気楽な巡礼だから言えるのだ。 教会に属する聖戦官は違う」
ウォーデンは、茹でた野菜を大皿から取り、おもむろに呟いた。
つぶや
「時には部下を死地に追いやることもある。
また死地に追いやられることもな。そんな時、納得して死ねる主従関係を築くことが大事なのだ。君には分からぬだろうが......」 「あら、そうかしら」
しゅじゅうかんけい
ライオットは、茹でた野菜を大盛りにしてやると、にっこりと笑ってみせた。
「あたしは大事な人のために死ねるわよ、納得してね。 でも主従関係じゃないわ。あんた
には分からないでしょうけど」
うれ
じゅん
その言葉に、ジャスティスは嬉しそうに相棒を見上げる。だがライオットは、慌てて純朴な視線から
目を逸らした。
ぼく
「あんたのためじゃないわよ、 だいいちあたしは長生き希望だからね!」
「くだらんな」
ウォーデンは、ため息を吐いて背を向けた。
さわ
「死ねると言う奴に限って、 死ねぬものだ。まあいい......とにかくもう騒ぎは起こすな」
「すみません、 ウォーデンさん」
えがお
もど
ぺこりと頭を下げ、笑顔を取り戻す。
クルセイダー
いまさら
やはり威厳は無い。だが最高の聖戦官だと、ライオットは今更ながら確信していた。

翌朝早く、ジャスティスとライオットは指揮所に呼び出された。
ひときわ大きなテントの前にテーブルが並べられている。
アレナに先導されて着いた時、すでに討議は始まっていた。
とうぎ
「ワルーン村はこの先、 十五キロだ」
かみせい
いつせい
ねむけ
古びた紙製の地図を指し、 ウォーデンは一同を眺め回した。
いりよくていさつ
せんけんたい
「今から威力偵察に出る。いわば先遣隊だ。指揮は私が執る」
どの
「ウォーデン殿ご自身が?」
「そいつはどうですかねえ......」
ラエモスとガルシアは、同時に声を上げた。
「ウォーデン殿は、事実上の最高指揮官ですぞ。 万一何かあっては事後の作戦に支障が出
る。先遣隊はガルシア殿にお任せしては?」
せいきし

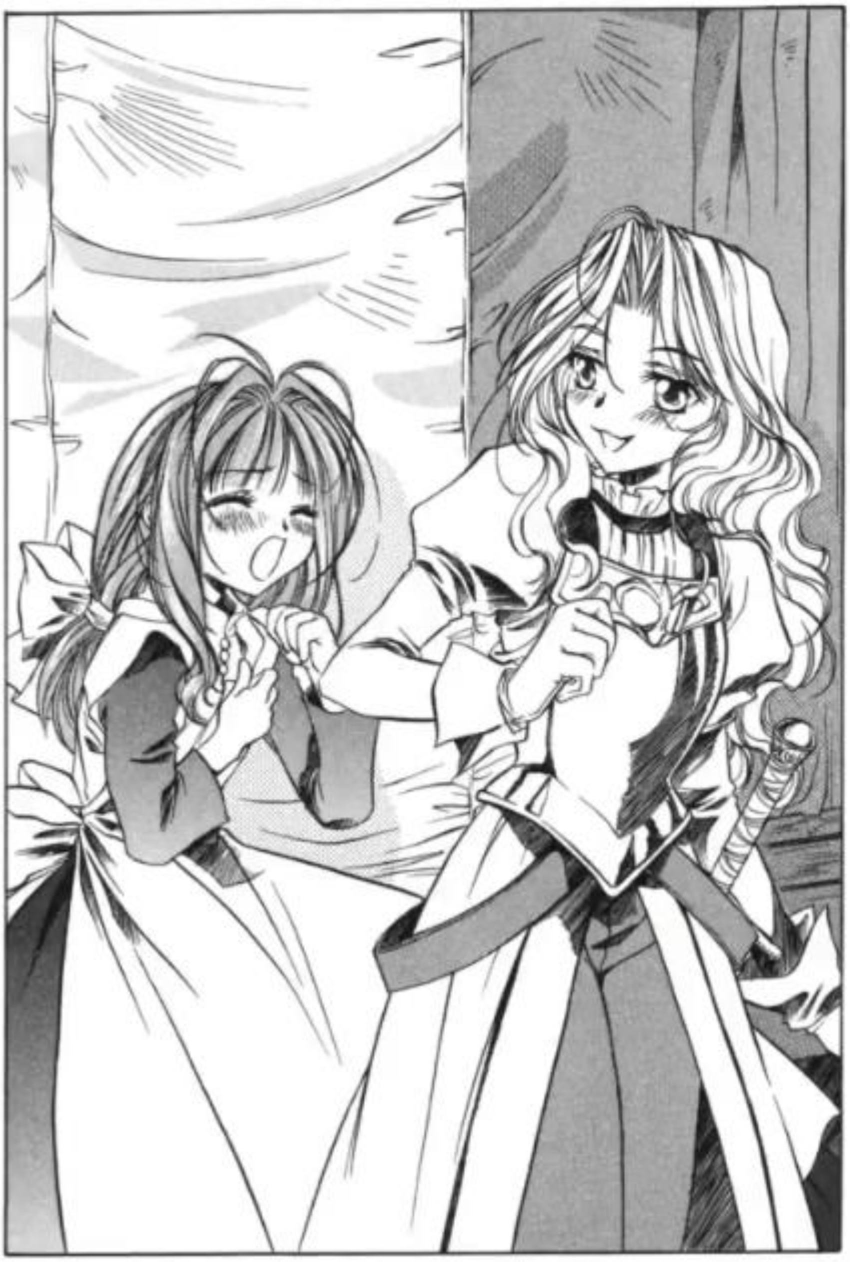
ラエモス評議員の言葉に、先任の聖騎士たちも一様にうなずいた。だがウォーデンは、かぶりを振って視線を転じた。
「万一の場合はガルシアを指揮官とする。
敵情がつかめない現在、指揮官の私が前線に出て実状を把握する必要がある。 それに......」
あく
ちゃくとう
ウォーデンは、着到した二人を指さした。
「先遣隊には、ジャスティスとライオットを加える。それがガルシアを外す理由だ」
とうとつ
一斉に、視線が二人に向けられる。唐突な指名に、ジャスティスは背筋を伸ばした。
「ぼ、僕たちですか......?」
「そりゃいいけど、なんでまた?」
こら
眠気を堪えながら、ライオットも言う。ウォーデンは、二人を見据えて言葉を続けた。
はあく
「君ら二人の戦力を、私は把握していない。 早めに実戦に投入して様子を見たいのだ。
と言ってガルシアの指揮下ではうまくいくまい...それが私の本音だ」
「あんたはいっつも本音じゃない」
笑って、ライオットは相棒を見た。 すでにジャスティスは力強くうなずいている。
「喜んで参加します、 ウォーデンさん。 では僕たちに指示をください」
だんやく しょくりょう
そろ
「一時間後に出発。 弾薬と食糧、整備品その他必要なものを揃えておけ。 遅れるな」
おく
地図を巻き上げ、 ウォーデンは聖印で十字をきった。 聖騎士たちもそれにならう。
きかん
ぶじ
「無事のご帰還を......」
むごん
ラエモスの声に、ライオットは深くうなずいた。ジャスティスも無言で十字をきる。
「いいとこ見せるんだな」
めんどう
ガルシアも面倒そうに席を立つ。
その言葉には、二人とも無言で立ち去った。

慌ただしく、先遣隊が編成された。
クルセイダー
ウォーデンの他に聖戦官が三名。 アレナを含めて聖騎士が九名。 そしてジャスティスとライオットである。
ほきゆうよう
ほろばしゃ
先発する十五人は、各自の装備を整えるべく、補給用の幌馬車に集まっていた。
「ちょっとジャスティス......」
じまえ
呆れた声で、ライオットは相棒を見下ろした。ジャスティスは自前の小さなリュックに、次々と菓子類を詰め込んでいる。
こら
「ピクニックに行くんじゃないのよ! もっと腹持ちのする栄養価の高いものにして!」
とうぶん
「でも人間には糖分も必要だよ」
くちびる とが

ジャスティスは、不満げに唇を尖らせた。
「それに糖分は頭の働きを活性化するんだ。 だからこれも持って行くね」
はちみつ
言って差し出したケーキには、蜂蜜で固められた果実が無数に埋まっている。
吐き気を堪えて、ライオットは顔を歪めた。
「あんた糖分ばっかじゃない......」
ゆが
「だってせっかくセシアが作ってくれたんだからさあ......ねえ、セシア?」
はい、と小さく答え、少女は顔を赤らめた。
あま
「ジャスティス様、甘いものがお好きだと聞いたので、それで・・・・・・」
はにかむ様子が、いかにも女の子らしい。 また自然でもある。
ライオットには、決してできそうにない清らかな笑顔だった。
えがお
「様はいらないって言ってるのに......」
「ああ、すみません、 ジャスティスさ······ん...............」
せいきし
だれ
ほえ
二人のやりとりに、周囲の聖騎士たちも笑顔になった。誰が見ても微笑ましい。
わき
すばや
その脇では、ウォーデンが次々聖騎士たちに指示を出していた。
必要な装具を素早く読み上げていく。幌馬車の脇には、すぐに装具の列が完成していた。
ばしゃ
そろ
「よし......これだけ揃えば十分だろう」
「あ、ウォーデン様、 まだ・・・・・・」
のぼ
たずさ
セシアは荷台に駆け昇り、さらに新たな装具を携えてきた。
「ロープをあと..二十メートルお持ちください。この辺りの水路は意外に幅が広いと聞きました。
それに信号弾をあと二色・ ・重傷者発生と汚染者発生を知らせるものです。あ
と胃薬も......万が一のために....」
だん
おせんしや
さすがに秘書官らしい、手配りだった。
はいりょ
ジャスティスに接する時とはまた違う、細やかな配慮にライオットは目を見張った。
しんぱいしょう
「セシアは心配性だからな」
つ
小さな息を吐き、ウォーデンはうなずいた。
「分かった、そう言うなら持っていこう」
「すみません、荷物を増やしてしまって」
「いや........ご苦労だった、ありがとう」
かた
たた
ウォーデンは、小さなセシアの肩をぽんと叩いてやった。
なにか安心したように、セシアも微笑を返している。
しょう

「ふーん......」
わざと聞こえるように、ライオットは感心してみせた。
「あんたでも、ありがとうって言うのね」
「セシアはよくやってくれている」
めがね
冷たい表情に一瞬で戻り、 ウォーデンは眼鏡の位置を指で直した。
「それにまだ見習いだ。 厳しくするのは、正秘書官に任命されてからでいい」
「セシアは、ウォーデン様のお気に入りだもんねぇ!」
アレナが横から口を出し、 親友の背中を指先で突っついた。
すご
「でもセシアのお気に入りは、ジャスティス様なんでしょ! 凄おいっ、三角関係!」
「もおっ、アレナ!」
クルセイダー
きょうせい
二人の少女は、嬌声を上げて幌馬車の周りを駆け回る。だがウォーデンは、もうセシアを見てはいなかった。
「あらかじめ言っておくが、君らは私の指揮下に入る」
聖戦官は、ジャスティスとライオットに向き直って宣言した。
「事後の行動については、全て私の命令通り動いてもらう。 異存はないな?」
いま
きんちょう
ひろう
ウォーデンの声は、未だに緊張したままだ。 疲労の色も、いっそう濃さを増している。
「承知・・・・・・しています」
かくご
覚悟を決めたように、ジャスティスがうなずく。ライオットも、一度大きな息を吐いて指揮官に視線を向けた。
「分かったわ、お手並み拝見......」
おもしろ
りようしょう
ライオットは、面白そうに了承した。
「ジャスティスの力、ちゃんと見てよね」
いいだろう、とウォーデンも言い放つ。
白い聖衣をひるがえし、指揮官は他の聖戦官たちを呼び集めた。
やつ
少なくとも最悪な奴ではない。ライオットは、そう思い始めていた。恐らく、最悪につきあいにくいだけなのだ。
おお
うすずみいろ

空は、早朝から薄墨色に覆われていた。
おそ



うんかい
さえぎ
しつち
太陽は中天にあるはずだが、
陽光は雲海に遮られている。辺りは果てしない湿地だけで、滅入りそうな風景が続いていた。
せんけんたい ごそう
しんにゅう
その湿地に、十五人の先遣隊は五艘のカヌーで侵入していった。
こうえきろ すいほつ
わんきょく
かつての交易路は水没している。だが湾曲した水路を十キロ以上進むと、前方に隆起した台地が出現
した。黒々とした木々が生い茂る丘陵こそ、ワルーン村跡地であった。
きざ
しげ きゅうりょう
あとち
「カヌーをおりろ、ここからは徒歩で行く」

かた
ウォーデンの命令で、一行は五時間ぶりに堅い土を踏みしめた。
かんかく
「三隊に分かれ散開しろ。 各隊の間隔は五十メートル。二人は私の後についてくれ」
せんどう
りゅうき
ジャスティスとライオットは、ウォーデンと共に中央の隊列に加わった。
先導はアレナを含めて聖騎士三人、聖戦官一人である。さらに左右に同様の四人組が展開していた。
ふく
せいきし
(なるほどねえ......)
おそ
ライオットは、指揮官の背中を見て、ほんの少しだけ感心していた。恐らくウォーデンは、基礎的な軍事訓練を受けているのだろう。 行軍の配置にそつがない。
きそてき
ぐんじくんれん
こうぐん はいち
せんたく
マニュアル通りで面白みの無い選択だが、少なくともバカではないと言うことだ。
しんちょう
「足音を立てるな、慎重に進め」
背を低め、十五人は深林に入っていった。
あしもと
なんとも不快な森である。 湿気が多く、足下はぬかるんでいる。 どこからかガスが湧い
あくしゅう
ているのか、悪臭までただよっていた。
それでいて、木々は逞しく枝を伸ばし、僅かな陽光を完全に遮っている。湿っぽい洞窟に入った気分だった。
じゅじょう
「何が楽しくて、こんなところに村をつくったのよ......」
ライオットは、微かな声で毒づいた。
はいそん
とうちいき
「二年前に廃村になったって言うけど・・・その前から未踏地域だったんじゃないの?」
てんねん
しょう
「このネヴォワ湿地帯には、大規模な天然ガス床があると昔から言われていた・・・・・」
だえき
えんか
周囲に視線を散らしながら、 ウォーデンは唾液を嚥下した。
はつくつ
かたくみん
ざせつ
「それを発掘するための ・開拓民の村だった......もっとも開拓は挫折したがな......」
こし
ず
ライオットは、先導役のアレナに目を転じた。 女騎士は腰を沈め、器用に茂みの間を抜 けていく。
枝一本、揺らさぬ動きだ。
「あいつ、うまいもんねえ......」
「アレナは、局地戦学校にも通わせている」

ウォーデンも満足そうに呟いた。
さんがく
つぶや
せんとう
ゆえ
「専門は山岳、森林地帯での戦闘だ。 それ故の先導役だ」
きかい
ひび
樹上では、先ほどから奇怪な鳥の鳴き声が響き続けている。ふと目線を上げたジャスティスは、あっと小さく声を上げた。
すご
「す、凄いよ、 ライオット......」
せんがいき
こつぜん
きょだい せんとう
だが言われるまでもなく、 戦鎧鬼も察していた。 森林のど真ん中に忽然と、巨大な尖塔が出現している。ざっと全長五十メートル。
なぜか斜めにそびえる、金属製の塔だった。
「これは・・・・・・」
じゅんようかん
めずら
フロンティア
「空中巡洋艦だ、最近は珍しいがな」
ウォーデンは、身を起こして息を吐いた。
つ
ついらく
「古代災厄直後の戦争で、 ここに墜落したんだろう。 まず千年以上昔のものだ」
ライオットも聞いたことはあった。
ころ
新大陸がまだ八大陸であった頃、人々は大陸間を反重力機器で往来していたと言う。当然、戦争にも使用されたはずである。 その遺物が目の前で苔むし、蔦に絡まれ、無惨な屍 を晒していた。
こけ
つた から
むぎん しかばね
さら
「ここまで来れば村は近い。 アレナ、その岩場を右に避けて、二時の方角だ」
「はっ!」
いつせい
地図も見ずに、ウォーデンは断言する。 一斉に、三隊が進行方向を修正した。
ずいぶん
くわ
「ウォーデンさん、随分お詳しいんですね」
ジャスティスは、尊敬の声を上げた。
「まるで来たことがあるみたいですよ」
「実際、来たのだ。 二年前に」
かんが
ウォーデンは、感慨も無く言い放った。
はいそん
「ワルーン村をこの手で廃村にしたのは、私なのだからな」
「どういうことです......?」
えんりょ

ジャスティスが、遠慮がちに尋ねる。だがウォーデンは躊躇もせず、倒木を踏み越え た。
かんせん
「八大陸時代の化学兵器が付近で発見され、村人に感染した。
もたもたしていると他の村に伝染する恐れがあったのでな。私が指揮を執って、村人ごと焼いた」
おそ
「村人ごと?」
思わず、ライオットは歩みを止める。 しかしウォーデンは、構わず前進を続けた。
ほう
「二百人ばかりの村だ。
放っておいて一万人死ぬよりはましだろう...と当時の最高評議会が決断したのだ。私が実行部隊を率いて······その時に来て以来だな」
「ずいぶん事もなげに言うのね」
ぶせん
戦鎧鬼は、憮然とした声を放った。
なっとく
「村人が納得して焼かれたはずないわ」
「死とは............そういうものだろう。納得して死ぬ奴はどこにもおらんはずだ。特にこの・・・・・新大陸ではな」
つるくさ はら
ウォーデンは、頭上の蔓草を払いのけた。
まちが
「ただ、私は二百人殺すことに納得した。 私の信念に従ってだ。今でも間違っているとは思わない。
気の毒だとは思うがな......」
だま
ライオットは、その言葉に黙りこくった。
人を殺した罪を責められるほど、ライオットは聖人ではない。自分こそ誰よりも多く、
戦場で人を殺したのだ。 そして戦争に信念などなかった。自分の正義に従って人を殺めた
ウォーデンの方が、まだましなはずだった。
「嫌な役目だったんですね......」
つぶや
呟いた直後、ジャスティスが息を呑んだ。
せんけんたい
きんちょう
同時にウォーデンが、 そして十五人の先遣隊全員に緊張が走る。
まど
クルセイダー
せいせんじょう
いつせい
きほうせき
五人の聖戦官が持つ五本の聖戦杖。 それが一斉に赤い光を放った。
希宝石メタライト魔導の接近を感知したのだ。
しゃへいぶつ
ウォーデンが口早に叫ぶ。
ふる
「各隊、停止! 現在地で遮蔽物を探せ!」
さけ
木々の真上で、風速が急速に強まった。 森全体がおののき震え、鳥たちがけたたましく逃げ惑う。
大気が瞬間、生ぬるく変じた。
「ライオット.........!」
こずえ

たいけん
駆け寄るジャスティスを引き寄せ、 戦鎧鬼は背中の大剣に手を伸ばした。
「背筋がちくちくするわね...来るわ......」
のど ひど かわ
梢のざわめきが一層激しさを増し、全員の喉が酷く渇いた。
「何か‥‥‥いるぞ......」
「ぎあああああっっ!」
ぜつきょう
ウォーデンの囁きに、絶叫が重なった。
さくてき きのう
わいきょく かんち
もうまく しょうじゅん きのう
ライオットの索敵機能が、 正面に空間の歪曲を感知する。同時に網膜の照準機能が連
動し、戦鎧鬼は大剣を引き抜こうとした。
おそ
せいき
のどもと
しかし、遅かった。 中央隊の聖騎士が、 叫びと共に立ち上がっている。 その喉元にはす
でに何かが喰らいついていた。
「ガーソン!」
こ
ウォーデンとアレナが同時に名を呼ぶ。だが聖騎士ガーソンに応える術はなかった。
《ゾールー......》
ほうこう
ひとかか
につかい
きょだい
あご
《グゼン・・・・・・グゼンゾールー....》
言語とも咆哮ともつかぬ声が辺りに響く。
彼の首筋には、一抱えもある赤い肉塊がかぶりついていた。短剣ほどもある牙を並べた巨大な顎。
それがねじれた空間から飛び出し、 聖騎士の喉を喰い破っていたのだ。
きば
じゃしん
「邪神だっ......!」
せんとう
せつな
ちしお
ジャスティスが呻いた刹那、ガーソンの血潮が宙にぶちまけられた。
最初の一人を噛み殺し、巨大な顎は空中でげたげたと醜い哄笑を轟かせた。
みにく こうしよう とどろ
アーレス・クラス
イズ
「放出魔導線量三百二十......!」
戦闘機能を全起動させ、ライオットが敵の力量を読みとった。
「邪神騎級だ! 油断しちゃあまずいよ!」
怒鳴るや、戦鎧鬼は火薬拳銃を腰から抜いた。時間稼ぎに六発、邪神の口に叩きこむ。
《ゾールー......》
《グゼン・・・・・・グゼン・・・・・・ゾールー・・・・・・》
しゃくおん
れっか

てつこうだん
まめつぶ
くだ
邪神の口が、 くちゃくちゃと醜い咀嚼音を立てた。劣化ウラン徹甲弾を、豆粒のように
噛み砕いているのだ。分かってはいるが、やはり物理攻撃の効く相手ではない。
こうげき
どせい
さや
「そんなもんじゃ無理よ!」
ちょうけん
怒声を上げ、アレナが長剣を抜き打った。
「邪神退治は聖騎士に任せて!」
あわ
アレナの剣は、淡い聖光に包まれていた。
やいば
なな
靴から走り出た刃が、空中の邪神を斜めに斬り飛ばす。
赤黒い体液を振りまき、邪神は狂ったように悶え苦しんだ。
《グゼン・・・・・・ゾールーゾールー...............!》
こわね みみたぶ
ふる
奇怪な声音が耳朶を震わせる。 だが臆せずに、アレナは素早く二刀目を振り下ろした。
かつちゆう よご
飛び散る体液で甲冑が汚れていく。だが構わずに、とどめの一撃。
その戦いぶりに、ライオットは敬服した。
ノイズ
せいこう
さすがに聖騎士である。 いくら魔導を防ぎ、 邪神を斬る
・聖鋼ゾダニウムの刃を有しているとはいえ、アレナに躊躇や恐怖は微塵もない。
ちゅうちょ きょうふ
みじん
ふところ
そしてアレナは、他の聖騎士に先んじて邪神の懐に飛び込んでいた。ウォーデンに選ば
れた切り込み隊長だけのことはある。
一気に邪神の身体を長剣で貫き、真っ二つに切り裂いた。問答無用の奮迅だった。
ふんじん
「ウ、ウォーデン様あっっ!」
うよく
こうさ
じゃしん
からだ
つらぬ
クルセイダー
だが今度は、右翼隊の悲鳴が交叉した。
別の邪神が、真っ先に聖戦官に襲いかかる。右腕に食いつかれ、白い聖衣が鮮血に染まった。
せんけつ
「ああああっっ!」
「イグシオ様!」
せいきし
はら
きょだい

するど
右翼隊の聖騎士たちが長剣を払う。聖戦官に組み付いた巨大な顎へ、鋭い切っ先を次々
に突き入れた。
「化け物めがっ!」

きょうけん
ほうこう
赤黒い体液が噴水のように飛び出し、狂犬めいた咆哮が辺りを揺るがせる。イグシオと呼ばれた聖戦
官の腕を半ばまで断ち切り、 邪神は刃の群の前に絶命した。
「ジャスティス、どこへ!」
ちようやく
ライオットが気付いた瞬間、もう少年は右翼めざし岩を跳躍していた。骨を砕かれたイグシオは、獣
のような悲鳴を上げている。
けもの
「殺してくれ!私を殺してくれ!」
「第一撃・
すばや
ジャスティスは、素早く聖印を結んだ。
ユア・ライフ
「生命譲渡治癒!」
せいせんじょう
ヒーリング・サウンド しょうかん
少年の聖戦杖が、力強い聖光を吐き出した。
聖印を結んだ指に治癒奇跡が召喚され、その光はイグシオの傷口へ急速に流れ込んだ。
せつごう
またた
砕けた骨が接合し、肉と組織が再生していく。
瞬く間に、食いちぎられた腕は元通りに再生していた。
「おお......!」
かんたん
フォー・ユア・ライフ
右翼隊の聖騎士たちは、感嘆の声を上げる。
四肢の再生まで可能な〈生命譲渡治癒〉は、中位の奇跡の中でも修得が難しいものだ。
しゅんじ
サウンド
ったん
それをジャスティスは瞬時に召喚している。思わず驚嘆しても不思議ではなかった。
どの
「ジャスティス殿、すまぬ......!」
「敵はまだいます!気を付けて!」
ひき
たお
イグシオを助け起こし、ジャスティスは周囲に目をやった。
二匹を倒しても、未だ聖戦杖の警戒色は解けていない。ウォーデンは、背後の戦鎧鬼を振り返
った。
けいかいしょく
せんがいき
「ライオット、つ、次はどこから来る!」
どうよう

くうかんわいきよく
思わぬ、動揺の声だった。だがライオットはそれどころではない。
戦鎧鬼は、空間歪曲の前兆を捕らえようと意識を集中していた。
ぜんちょう
と
「少し待って........」
さくてき きのう
じ
しゅどうりよくろ
高精度の索敵機能は、維持にエネルギーを喰う。しかしライオットは、胸部の主動力炉
の回転も高めていた。
「......正面!」
立ち上がって呼び、ライオットは前方の岩場を指さした。
「アレナ、後退して!」
「なんですって!」
いつかつ
振り向いた女騎士に、ライオットの一喝が飛んだ。
わいきょくりつ
「さっきより歪曲率が高い! 今度は......」
けんざい か
言い終わる前に、変転が顕在化した。
リート・クラス
「邪神伯級・・・・・」
おそ
ふる
ぼくはつ
警告は一瞬、遅かった。 小山のような岩場が震え、爆発と共にその正体を現した。
《ゾールー......》
《ゼリ・・・・テリリゾールー....》
きょうあく
おそ
見上げるほど大きな凶悪な顎。それが土中から飛び出し、 正面隊に襲いかかったのだ。
「アレナ!」
叫ぶライオットの眼前で、瞬時に二人の聖騎士が呑み込まれた。牙と牙の間から、骨格を破砕する音
がこだまする。 人血で唇を漏らし、 家屋ほどもある顎は疾走を開始した。
はさい
じんけつ くちびる
しつそう
「ザイラー! オルロフ!」
りょうゆう
ちょうけん
やいば
消えた僚友を呼び、アレナは長剣を大上段から斬りつける。だがゾダニウムの刃は電光に弾かれ、ア
レナの身体も後方へ吹き飛んだ。
からだ
《ゾールー......》
《ゼリテリリゾールー......》
無理もない。いくらゾダニウム製の剣とは言え、鋼鉄との合金製である。一〇〇パーセントのゾダニ
ウム製でない限り、倒せる邪神にも限度があった。
お
じゃしん

「いかん! バーク、後退しろ!」
「ひああああっっ!」
むな
クルセイダ
つぶ
もど
せたけ
おどろ
ウォーデンの叫びも空しく、正面隊の聖戦官は猛速の顎に引き潰された。
邪神はそのまま、弾き飛ばしたアレナめがけ突進する。
えんご
「助けに出るわ、援護よろしく!」
「無茶はよせ! ライオット!」
ウォーデンの引きつった声が飛ぶ。
とっしん
だが戦鎧鬼は、すでに両手に長大な大剣を抜き払っている。岩場を蹴って茂みを飛び越え、一気に邪神とアレナの間隙に割り込んだ。
「戻ってライオット!」
さけ
女騎士は悲痛に叫んで剣を払った。
「あなたの剣じゃ無理よ! そこどいて!」
「そいつは試してから言ってほしいわ!」
背丈ほどもある大剣を、軽々とライオットは振り回す。 瞬間、その刃がかっと激しく聖光を解き放った。
「まさか……!」
驚くアレナの前で、殴りつけるように横合いから邪神の巨体へ刃を叩き込む。大剣の撃は邪神を斬り裂き、鈍い音を立ててその肉へ喰い込んでいった。
「あなた、どうしてゾダニウムの剣を……!」
邪神の肉体から体液が四散する。
ぎょうし
ぜつきょう
後退するアレナは、信じがたいという顔でライオットを凝視した。
絶叫する邪神から飛び退くや、戦鎧鬼は女騎士に振り返った。
けんしょう
うそ
「あんたの剣より純度は高いはずよ……」
ライオットは、二本の大剣を十字に据える。
ふたごけん
「剣匠ザウエルの双子剣・・聖騎士なら喉から手が出る逸品だと思うけど!」
「う、嘘よ! その剣なら確か……!」
「嘘だと思うなら、もう一度見な!」
とうぼく
もうげき
くちびる
とっ
倒木を蹴り、ライオットは今一度邪神に猛撃を叩きこんだ。分厚い唇が裂け、
邪神の突進が急停止する。
悶絶は茂みを崩し、太い木々を倒壊させた。威力に間違いはなかった。
くず
とうかい
いりよく まちが

しん
テイク
もんぜつ
しげ
《ゼリテリリ:・ゾールー……!》
こわね
「第二撃……」
一方で、少年の声音が響いた。
ライオットの遅滞行動の間に、ジャスティスが新たな奇跡を召喚している。十分な時間を得た聖戦官は、ぶんと聖印をうち振った。
クルセイダー
バイロマニ
「神聖炎熱堕撃!」
じゃしん
しんせいじん
かえん。 ふんしゅつ 邪神の周囲に、帯状の神聖陣が現れる。
と古代神聖文字の羅列から、一気に火炎が噴出した。容赦のない怒濤の業火である。
られつ
ようしゃ
どとう
ごうか
だえき
すご
もんぜつ
あくしゅう
唾液と体液をぶちまけ、巨大な唇は悶絶した。
肉の焦げる悪臭が辺りに満ちた頃、その巨体はぐずぐずとその場に溶解していった。
ようかい
「凄い……人だ・・・・・・」
生き残った聖騎士たちは、呻くしかなかった。 初めて見る、 ジャスティスの力にだ。
とても十三歳が召喚できる奇跡ではない。 その事実に、誰もが気付いていた。
サウンド
だれ
おそ
ウォーデンも、少年の方へ視線をやっている。だが彼は、何か恐れおののくように、を詰まらせていた。強ばった顔がさらに青ざめ、その色は恐慌に近かった。
こわ
きょうこう
喉?
なが
アレナは、ライオットが背中に収めた大剣をいつまでも眺めていた。
せんが
クルセイダー
ほほえ
「あなたたち… いったい誰なの……?」
「ただの戦鎧鬼・・・・・・ただの聖戦官よ・・・・・・」
言って、ライオットは微笑んだ。
ウォーデンは我に返り、未だ警戒色を放つ聖戦杖に注意を戻した。
かいしょく
せいせんじょう
もど

「ぜ、全員、ここへ集まれ! まだどこかに敵がいる可能性がある! 油断するな!」
ライオットは、その指揮官をじっと見た。
こうちよく
さっきの硬直は嘘ではない。確かにウォーデンは何かに脅えていた。だが邪神に脅える聖戦官などいるはずもない。 そんな人間に奇跡を召喚する資格は無いはずだ。
サウンド
しかく
(何に脅えて......?)
疑問を抱いたまま、背中に剣を戻した直後であった。
「ライオット! まだ中に……!」
さけ
相棒の叫びに、ライオットは急反転した。
焼け崩れた邪神の肉を突き破り、先ほどの小邪神が幾つも飛び出してくる。 上下左右に散開した邪神は、唾液を散らしてライオットに躍りかかった。
「さっさと消えな! ぶさいくキスマーク!」
だがライオットの手は、大剣に一瞬の差で届かなかった。
両手首と足首に、邪神たちが高速で喰らいつく。 人工皮膚は牙で破られ、
体組織が破壊されていった。
じんこう ひ ふ きば
「つ......ああああっっ......!」
思わず、苦悶が漏れた。 その声に、素早くジャスティスが反応する。
「待って、ライオット! 今行く......!」
「来ないで!あんたも危ない!」
し
近づこうとする少年を制し、 戦鎧鬼は四肢に満身の力を込めた。
じゅうぶん
「これぐらいあたし一人で充分よ......!」
りよりよく
だが邪神の膂力も強い。身動きできぬまま、ライオットの肉は噛み砕かれていった。
「ライオット、退け!下がるんだ!」
見かねたウォーデンもそう叫ぶ。
くぎ
だがライオットの視線は、走り寄るジャスティスに釘づけだった。少年の聖戦官は、
び岩場を飛び、相棒の元へ一気に走り寄った。
ラストテイク
「動かないで、 ライオット!」
少年は走りながら、聖印を結んでいた。
「今、僕が助ける! そのまま動かないで!」
こんがん
だがその動作に、ライオットは悲痛な懇願を響かせた。
だいじょうぶ
「あんたは来ないで! あたしは大丈夫よ!」
おそ
今度は、ライオットが何か恐れる声を響かせた。慌てたように悲鳴が続く。
「無理しないで! あんたはもう......」
「最終撃!」
せま
せいせんじょう
間近に迫り、少年は聖戦杖を振りかざす。
とうとつ
ライオットは、唐突に指揮官を呼んだ。

「ウォーデン!」
うで
叫んで、食いつかれた腕を強引に伸ばす。
サウンド
サウンド
「あんたが奇跡を使って! ジャスティスじゃ無理よ! あんたの奇跡で助けてよ!」
せつな
こうちょく
だがその刹那、ウォーデンは再び硬直していた。
ライオットの声に固まり、聖戦杖を握ったまま動かない。 唖然としたライオットの前で、
ジャスティスは奇跡を召喚した。
再
あぜん
サウンド しょうかん
ラウンダバウト
「迂回衝撃弾!」
ばくこう
爆光が森全体をざわめかせた。
ひしょう
でんげき
ジャスティスの指から放たれた電光が、ライオットに向けて飛翔する。 と、
その電撃が空中で四つに分離した。高速を維持したまま、四つの光弾は邪神たちの背に炸裂した。
ぶんり
いじ
こうだん じゃしん
さくれつ
「きゃああああっっ!」
からだ
だんまつま
さけ
さんぱつ
断末魔の悲鳴を上げ、 邪神の肉体は爆風と共に吹き飛んだ。
その爆風に、ライオットの身体も大きく弾かれる。
はじ
「ライオット、大丈夫!」
あわ
アレナは、れる戦鎧鬼をしっかと抱きかかえる。しかしライオットは、その手を押しのけて慌ただしく立ち上がった。
「ジャスティス!」
サウンド
叫んで、少年に駆け寄ろうとする。
「ジャスティス!しっかりして!」
こんとう
金髪の少年は、その場に昏倒していた。
クルセイダー
奇跡を召喚する力がなくなれば、聖戦官は意識を失うのが常である。ジャスティスは、三度目の奇跡で自分の限界を超えたのだ。
サウンド
じゅぼく
いつの間に呪縛が解けたのか、ウォーデンも少年に歩み寄っている。 そしてふと・・・・・・

「これは........!」
こわ
何かに気付き、全身を強ばらせた。 聖戦官の首筋に、どっと冷たい汗が流れ落ちる。
「ジャスティス......!」
すばや
ント
駆け寄ったライオットは素早く外套を相棒にかけ...... ウォーデンを見上げた。
どうよう
れいこく がっち
こう
動揺する視線が冷酷に合致する。
二人の視線は、 ジャスティスの手の甲で重なった。
外套からはみ出した少年の右手が、不気味な赤光を放っている。
やがて手の甲に浮かび上がった紋様は、ウォーデンをさらに恐怖させていた。
もんよう
きょう ふ
「邪宗紋............!」
ほうきやく
叫んだ後に、いったん口をつぐむ。
ジャスティスの両手に現れた紋様を知らぬ者は無い。ましてウォーデンは聖戦官である。忘却すること すら許されぬものだった。
じゃしんてい
「それは邪神帝ルシフェルの......!」
かく
らく
戦鎧鬼は、その右手を外套の中に隠した。 そして黙したまま、首を横に振る。
もど
鳥の声が戻っている。
風もいつの間にか止んでいた。
ひとみ
懇願するような瞳でウォーデンを見上げ、ライオットはその言葉の続きを決して言わせ はしなかった。

せいじゃく
深夜の宿営地は、静寂に呑まれていた。
やみよ
ちんもく
今夜は、虫の声すら聞こえない。星無き闇夜の下、調査隊は沈黙の中にあった。
きかん
せんけんたい
ちんうつ
帰還した先遣隊が、 早くも死者を出したとあって、一行は沈鬱な気に支配されている。
ひざまず
そして最も沈鬱な顔をした指揮官は、自分専用のテントで何者かに跪いていた。
〈もう四人、死んだのかい......?〉
おそ
イフリート・クラス
ろうば
どこからか、老婆の声がそう尋ねた。
「まことに申し訳もなく......」
うなだれて、ウォーデンは声を落とした。

「なれど先遣隊を襲ったのは、第八位の邪神伯級でした。 被害は最小限だったかと……」
〈まあ、そうだね〉
不可視の老婆は、ため息を吐いた。
〈とすると……あたしたちの敵はそれ以上の位階の邪神だと考えた方がいいね……〉
「そういうことになります」
おもて
ウォーデンは、軽く面を上げ、声のする方に視線を振り向けた。
おんみずか
じんとう
「この際、是非ジキータ様御自ら、この作戦の陣頭指揮をお執りください・・・・・・
ワルーン村にこのまま踏み込めば、恐らく被害は・・・・・・」
おそ
ぜんめつ
〈全滅だろうねえ…それは困った〉
ばち
」
何か捨て鉢に聞こえる笑いをこぼし、老婆はどこかで身じろぎした。
クルセイダー
しんせいてんそうじん しょうかん
〈分かったよ、ウォーデン。 明日、こちらに残った聖戦官たちで神聖転送陣を召喚しよう。
それを使って……応援に行く〉
おうえん
「ご足労、おかけいたします」
どの いっしょ
(ただし、議長殿も一緒だよ〉
老婆は、念を押すように言い放った。
きゅうだん
〈今度の事件、評議会で糾弾されてるらしいんだよ。 早く解決しろってね。
とりあえず前線を視察して、督戦したいらしい〉
とくせん
「承知しました」
ウォーデンは、密かに大きな息を吐いた。緊張がほんの僅か緩み、緊張した顔が少しず
つほぐれていく。

ろう
あんど
老婆は、その安堵に同情した。
〈お前は二年前の事件でも苦労したねえ……今度のことでも昔を思い出して、そんなに険しい顔してるのかい?〉
「いえ、これは……」
かわ
口ごもる聖戦官に、老婆は乾いた笑い声を浴びせかけた。
<まあいいさ…••••他に変わったことは?>
「はっ、ひとつお尋ねしたいことが・・・・・・」
なんだね、と構えた老婆の声に、ウォーデンは一瞬、問いかけを躊躇した。
〈言ってごらん、何があったんだい?〉
ちゅうちょ
じゃしゅうもん
クルセイダー

「はっ、ジキータ様は.........手に邪宗紋を持った聖戦官というのをご存じでしょうか?」
ちんもく
こちらも、一瞬の沈黙。
あざけ
そして嘲るような笑いが響く。
〈なんだね、そりゃあ・・・・・・そんな奴いたらお目にかかりたいよ。 それがどうしたね?〉
「いえ、別に......」
再び、全身に緊張を張りつめ、ウォーデンはかぶりを振った。
うわさ
「そんな奴がいると辺境の村で噂を聞いたものですから......しかしジキータ様がご存じなければ、噂に過ぎないのでしょう」
おもしろ
〈面白い噂だね、今度ゆっくり聞くよ〉
しだい
笑う老婆の声が次第に遠のいた。
〈では明日そちらで会おう。 楽しみにな〉
たんそく
平伏したウォーデンは、静かに嘆息した。 噂に過ぎない・・・・・・誰もがそう思うだろう。
おそ
だがどんな噂より恐ろしいものを、聖戦官は目にしていた。
決して他言できぬほど、恐ろしいものを・・・
胃と頭が同時に痛む。聖戦官はいつものように、薬瓶に手を伸ばしていた。

幌馬車の荷台で、ジャスティスは深い眠りに落ちていた。すでに十二時間以上、少年は安らかな寝息を立てている。
ねいき
毛布の下から体温計を取り出し、聖騎士アレナは小さな息を吐いた。
ずいぶんさ
「良かった・・・・・・もう随分下がってる・・・・・・」
つぶや
きし
呟いた時、馬車の荷台が微かに軋んだ。
「どう、様子は......?」
だいじょうぶ
「大丈夫よ、熱は下がったみたい」
その声を聞いて、 荷台に戻ったライオットは、胸をなで下ろした。
サウンド しようかんりょく
「まだ子供だから......奇跡の召喚力を失うと目覚めるまで長いのよね。 ま、いつものことなんだけどさ」
かんびょう
「あたしが看病してて良かったの?」
アレナは、元気づけるように笑いかけた。
じゃしん けいかい
「さっきから邪神を警戒して辺りを見回ってるけど......
三十分おきに戻ってきてるわよ。やっぱり心配なんでしょ、 この子が」
ばか
「ふんっ、馬鹿なこと言わないでよ」
やみよ
みわた
ライオットは、闇夜を見渡し嘆息した。
おそ

「今日、邪神はあたしらの存在を認めたはずよ…… だったら、この宿営地を襲われても不
思議じゃないわ。 それが怖いだけよ」
やつ
こわ
えもの
「まあね…
・なぜか奴らの獲物はヴァスランの評議員と聖戦官だから……そういう意味では、ここはご馳走
だらけよね」
ちそう
「目的……まだ分からないの?」
「ウォーデン様は、行けば分かると思ってるわ。ワルーン村にね・・・・・・」
いたずら
ほほえ
そこまで言って、アレナは今一度、悪戯っぽい微笑みを浮かべてみせた。
しば
「ま、それはそうと••••••くさい芝居はもうやめてよ。二人っきりにしてあげるわ。行ったり来たり
するの、面倒でしょ?」
めんどう
ライオットは、口をすぼめて舌を出した。
「あんたの看病が心配だから帰ってるの!」
「セシアも見に来てくれてるもの、大丈夫」
「そうね……彼女なら安心だわ」
かすみ
たた
ライオットは、荷台の片隅に折り畳まれたジャスティスの聖衣に目を移した。 戦闘で汚
れたそれは、すでにセシアの手で洗濯されていた。焚き火に当てられ、乾いてもいる。
ていねい
「ま、あたしなんかがいても、看病の役には立たないわよ。こんな丁寧な洗濯、あたし生
まれてからしたことないもの」
そば
「とは言っても、ジャスティスの側にいるくらいできるわよね?」
立ち上がると、 アレナは荷台から静かに降車した。
せいき
「先任の聖騎士は、ウォーデン様に呼ばれてるのよ。どうやら明日、ヴァスランから応援が来るみた
い。 その……打ち合わせかな」
「……ありがとう、アレナ」
ライオットは、おずおずと礼を口にした。
「ずっとついててくれて… 悪かったわね」
「気にしないでよ、礼を言うのはあたし」
背中を向け、アレナは右手を打ち振った。
せんとう
おうえ
よご
だま
すご
クルセイダー
「ジャスティスが起きたら伝えて……思った以上に凄い聖戦官だったって……みんな感謝してるって伝
えてあげて……」
黙って、ライオットはうなずいた。
かくにん
ばしや

そしてアレナが立ち去るのを確認し、幌馬車の幕を静かに締め切る。
ぎょうし
じゃしゅうもん
毛布をめくり、ライオットは少年の手を凝視した。もう邪宗紋は消えている。
すいみん
ねむ
聖戦官の睡眠は、ただの眠りではない。
いきそう
サウンド しょうかんりょく ちくせき
瞑祈想と呼ばれ、奇跡の召喚力を蓄積する休養期間なのだ。 通常、
一晩の睡眠で召喚力を回復できるよう、訓練されていると言う。
(とにかく良かった……)
(みんなには気付かれなくて・・・・・・)
せんとう
からだ
戦闘の直後、ライオットはジャスティスの身体を自分の外套でくるみ、宿営地まで運び込んだ。
そして最初の数時間だけは・・・・・・邪宗紋が消えるまでは付きっきりで看病した。
看病と言うより、他者を寄せ付けなかったのが事実だ。
アレナは戦闘の時も、そして看病の時もその事実に気付いてはいない。 セシアとてそのはずだ。
ただ疲労しただけだと思っている。
ひろう
だが問題は……
(ウォーデン……)
みけん
こんとう
冷たく、くたびれた顔の指揮官を思いだし、ライオットは眉間にしわを寄せた。
ウォーデンだけが、邪宗紋を見ている。
いつさい
だが彼は、一切何も問わなかった。
もど
昏倒したジャスティスをライオットに任せ、宿営地に戻ってからも二人を隔離するよう
に取りはからってくれた。 しかし……
(何を考えてるのか……?)
それがライオットには分からなかった。
みのが
じゃしん
邪宗紋とは、聖戦官ならば決して見逃してはならぬものだった。それは邪神と人間が交わした契約の
証・・・・・血盟者の証明だからだ。
いやく あかし
けつめいしや
オールド・ハザード
たましい
わた
だいしょう はら
〈古代災厄〉以前から、邪神に魂を売り渡した人間は数知れない。何らかの代償を払うことで、強大
な邪神の力を借りる悪しき堕落者、それが血盟者である。
あ
だらくしゃ
ぼくめつ
聖教会にとっては、邪神の次に撲滅すべき対象である。 見逃すはずはない。
(けどどうして……?)

ねがお
ライオットは、天使のような相棒の寝顔を見下ろした。
決して血盟者には見えない。
事実......ジャスティスは血盟者ではないのだ。正真正銘の聖戦官である。
(......と、 あたしが言っても、みんな信じないからな)
この一年、嫌というほど思い知らされた現実に、ライオットは再び思考を詰まらせた。
(ウォーデンは混乱しているのかも......)
じゅつこう
しばしの熟考の後、そう思い至った。
サウンド
聖戦官が邪宗紋を持つなど常識では考えられないはずだ。 血盟者に奇跡は使えない。だ
ジャスティスは、創世神の力を行使している。神に認められた人物なのだ。
それでは邪宗紋はなぜ......
おちい なぞ
あば
おのれ
秘密を知った誰もが陥る謎に、ウォーデンの思考も停止しているのかもしれない。
きょだい
暴くにはあまりに巨大な謎だからだ。
だとすればウォーデンはこの後・・・・・・
「......直接、訊くか......」
16
己を鼓舞するかのように、ライオットは決意を口にした。
せんさく
それ以上、ウォーデンの真意を詮索するのは無理だった。であれば彼一人にだけ、
真実うち明けるしかない。 そしてウォーデンの真意を引き出す.なんとしても。
(やってみるわ)
ライオットは、 るように拳を握った。
むだあし
たとえ無駄足でもかまわない。ウォーデンに責められても仕方ない。
せいきし
ただ、ウォーデンが全てを明るみに出し、そのために百人の聖騎士と聖戦官がジャスティスを糾弾することだけは避けたかった。
きゅうだん
(あたしがジャスティスを守るんだ)
ライオットは、幌馬車から静かに飛び降り、ウォーデンの馬車へと歩みを進めていった。
しょう き
星もない夜空は冷たく冴え、沼気に満ちた大気が肌に絡みつく。
んざん
こた
警備の聖騎士たちの慇懃な敬礼にも応え、ライオットは宿営地の外れにたどりついた。
えんじん
きみつあつか
先任の聖騎士との会議は機密扱いなのか、 ウォーデンの幌馬車は円陣の外に引き出されていた。警備の者も数多い。
「今は無理か......」
二の足を踏んだ、その時である。
不意に、ウォーデンの幌馬車から小さな光が夜空に迷い出た。
迷い出た・・・・・・かに見える、ふらふらとした頼りない光だった。
たよ
(あれは......なに?)

はっこうちゅう
はな
ただよ
発光虫を思わせる光は、警備の者にも気付かれず、少し離れた森の方へ漂っていく。
自然現象ではない。 明らかに意志を持った動きだ。
じゃしん
(まさか邪神......!)
イズ
ライオットは光球の後を追って、森に踏み込んだ。
邪神が放つ魔導線を測定するには、距離がありすぎる。
きより
しつそう
もど
もっと接近しなければ・・・そう思って、 疾走を速めた直後のことだった。
「あれは......!」
咄嗟に叫びを呑み下す。大木の陰に身を隠し、ライオットは光の行き先に驚愕した。
「戻ったのね......」
ほっとした声で、セシアが微笑んだ。
え
だいじょうぶ
「見つかるかと思ったけど、大丈夫だったのね。 良かったわ・・・・・・」
てのひら
少女は、森の中で掌を宙に差し出している。
あま
その掌の上で、光は甘えるように転がり、時折飛び跳ねて見せた。
(セシア......いったい何を......)
かす
ささや
光球と戯れる少女は、ふと微かな囁きに耳をそばだてた。
「そう......やはり、明日いらっしゃるのね......なら......仕方ないわ‥....」
ふる
そう言うと、掌を左右に震わせる。
たんけん
瞬間、光球はぐんと伸び、一本の短剣へと姿を変じていた。
(まさか・・・・・・まさか......)
いつさい
ライオットの測定機能は、魔導を一切検知していない。だが眼前のセシアの行動は、てを物語っていた。

やみ よ
「あなたが頼りよ‥‥‥お願い、明日は力を貸して・・・・・・」
いの
セシアは祈るように、短剣にすがる。その姿勢はまさに、敬虔な聖教徒にしか見えない。
だい
だがライオットの疑念は、次第に確信に変わっていった。
剣にすがる者は、いずれ必ず血を欲することになる。
セシアとて例外ではないと、戦鎧鬼は闇夜の中で戦慄した。
せんりつ

【第三章 ワルーン村/錯綜】

深い闇が、視界の全てだった。
はだ
もがけば闇は肌にまとわり、暗黒が呼吸を塞いだ。こうとしても声が出ない。死力を振り絞って、ライオットは瞼を開いた。
まぶた
(あれは......)
前方に白い光が林立している。
のぞ
が、光に見えたのは白衣の男たちだった。一様に顔を隠し、輪になって、何かを覗き込 んでいる。
(医者......?)
そまつ
とし
すると、輪の中心に横たわる小さな影が目に入った。粗末な服を着せられた、まだ年端
もいかぬ赤毛の女の子......
しゅんかん
(ああ、私だ......)
(ずいぶん昔の私だ・・・・・・)
気づいた瞬間、悪寒が走った。
おかん
もくもく
幼いライオットは、顔を真っ赤にして泣き喚いている。だが周囲の医者たちは、黙々とた
手術道具を手にしていた。
〈耐えられますかな......〉
ひんみん
〈気にするな、失敗しても貧民の子だ〉
せんがいき
〈一人でも多く戦鎧鬼が欲しいと・・・・・・〉
ひょうざちよう
〈そう評議長が言われている。やるんだ〉
ふる
歯ががちがちと鳴り震えた。
だれ
よみがえ
きおく
逃げられない。誰も助けてはくれない。まざまざと蘇った記憶に、ライオットは必死に抗おうとした。
あらが
だがあれはなんだ......?
うで
ちまみ
医者が切り取ったのは、自分の右腕だ。小さくて幼い血塗れの腕。眼球がくり抜かれ、傍らに捨てられる。 腹を切り開き、医者たちの腕が胸をかき回した。
かたわ
ぞう ふ
(やめて......やめて‥‥‥ やめて・・・・・・)
(あたしが何をしたのよ、腕を返して・・・・・・)
もど
(あたしの体を返して! 元に戻して!)
まぶた
こみ上げる吐き気をこらえ、ライオットは瞼をつぶった。だが今度は、誰か別の声が聞 こえてきた。
せんがいき

〈ライオット............ああ、あの戦鎧鬼ね?〉
聞き覚えのある子供の声。 それが重なる。
〈友達じゃないよ、だって気持ち悪いもん〉
〈うん、気持ち悪い。 それに怖いし〉
こわ
〈逆らったら、何されるかわかんないよね〉
必死に耳も塞ぐ。だが声は直接、ライオットの心にささやき続けていた。
[むすめ
〈うちの娘に近づかないでちょうだい!〉
〈さっさと戦え、お前戦鎧鬼だろ!〉
感謝はしてるよ、でもそれだけだな〉
とだ
おく
しんにゅう
頭を打ち振るが、声は途絶えない。さらに、幼い自分の声までが心の奥に侵入した。
(お母さん......お母さん、どこ......?)
いじ
(なんで私だけ苛められるの?)
(なんで私の体、機械でできてるの?)
さけ
同じ言葉を叫びたかった。
自分の腕をもぎ取り、叩き潰したくなった。 義眼もいらない。
人工筋肉もいらない。自分の肉体全てを灰にしてしまいたかった。
うで
たた
じんこうきんにく
もど
(戦鎧鬼なんてなりたくなかった!)
(戻りたい......!)
(初めからやり直したい!)
髪を掻きむしり、そう叫ぶ。
あざわら
やみ
だが幼い自分の声が、戦鎧鬼を嘲笑った。
(もう戻れないよ、絶対に......)
怒りに目を見開く。
闇を背に、幼い自分がライオットを見つめていた。眼球を失い、腕を切られ、腹を裂かれた血塗れの女の子。
ちまみ
笑っていた。
きょう ふ
げきど
ぼく
恐怖と激怒が爆発した。
たいけん
くう
ライオットは背中から大剣を引き抜こうとした。だが手は空をつかむ。
はっと自分の手を見た。
ひじ
ライオットの右腕も切断されていた。肘で断ち斬られ、血を振りまいている。
ちょうしょう

幼い自分が、また嘲笑した。
ぜつきょう
あんこく
ひび
わた
ライオットの絶叫が、闇黒に響き渡った。

「があっ.........！ 」
さけ
叫んで、跳ね起きる。
にぎ
かくせい
手に毛布を握りしめ、ライオットは現実に覚醒した。
　　動悸が止まらない。汗を拭いを何度も呑みこんだ。
だいじょうぶ
「大丈夫、 ライオット?」
まくらもと
ちんざ
だしぬけに、ジャスティスの声がした。 振り向けば、枕元に少年が鎮座している。
　　心配そうに、相棒はライオットを見つめていた。
ずいぶん
「随分うなされてたよ。 悪い夢でも見た?」
「う、ううん...... 別に......」
えがお
気力を絞り、ライオットは笑顔をつくった。
はちみつ
「チョコと生クリームと... それから蜂蜜の海で溺れる夢よ。いつものね......」
「またその夢か僕にとっては良い夢だけどなあ......」
安心したように、ジャスティスは息をつく。
ほろばしや
かわ
すいとう
もう明け方らしい。幌馬車にも朝の寒気が流れ込んでいた。
　　傍らの水筒から冷水を飲み干すと、ライオットは袖口で汗を拭った。
そでぐち
「それよりあんたはどうなの······もう起きられるの?」
「うん、随分眠ったからね......けど・・・・・・」
かた
少年は、今一度視線を落とす。 今度はライオットが、その肩に手をやる番だった。
かく
じゅしゅうもん
「心配しないで。戦いの後......あんたの手は、隠しておいたわ。邪宗紋は見られてない」
唾
「本当......?」
うそ
せいきし
じゃしんたい
「嘘じゃないわ。アレナも他の聖騎士たちも見てない。ただね......」
さんぱつ もてあそ
ちゆうちょ
ライオットは、少年の金髪を弄んだ。微かな躊躇の後、思い切ってうち明ける。

「ウォーデンには見られたわ・・・・・・」
「そう......じゃあ、仕方ないね......」
あきら
肩を落としてから、ジャスティスは諦めの笑顔をつくってみせた。
あいさつ
「邪神退治には参加したかったけど、もうここにもいられないね。
挨拶だけして・・・・・また南へ行こうか」
「それがそうでもないのよ」
からだ
つか
ライオットは、身体の疲れを自分でほぐしながら、少年の手に視線を向けた。
「ウォーデン............そのことをみんなに言ってないのよ。
どうしてだか、自分だけの胸にしまってるわ」
「な、なんでかな......?」
「あたしも聞こうとして......まだ聞いてないのよ。 聞くのも結構・・・・・・難しいからね」
ジャスティスも、自分の手の甲を撫でさすった。羽根を広げた白い水鳥を思わせる、
にぎ
な指先だ。 美術品めいたその手を握りしめ、少年は決心を口にした。
「僕・・・・・・ウォーデンさんに会うよ」
繊芝
「会って、どうするの?」
クルセイダー
「僕に説明できることを説明する。 そして.....何が説明できないかも説明する。
そうすれば、少しは分かってくれるんじゃないかな」
「余計、混乱するかもよ」
たんそく
ライオットは、心配げに嘆息した。
けつめいしや
「聖戦官が胸を張って、僕には邪宗紋があるって認めるのよ。その上で血盟者じゃないと
信じてくれと言われてもさ・・・・・・」
たび
ジャスティスの努力は、もう何度も実を結ばなかった。
そしてその度に、二人は行き場を失い、住処を追われた。 宿命である。
しゅくめい
あきら
「けど、諦めるわけにはいかないんだ」
せいせんじよう
少年は、聖戦杖をつかみ、荷台に力強く立ち上がった。
「諦めるってことは.. 他の人たちを信用しないってことさ。それは僕には できない よ......
したくないんだ」
くちびる
ライオットは、唇を結んでうなずいた。
諦めはしない・・・だからこそジャスティスなのだ。誰もが絶望するはずの身の上なのに、希望を持
ち続ける。だからこそ、一緒にいて何とかしてやりたかった。
いつしょ
「分かったわ、あたしも行く」
ライオットは、今一度力強く承知した。
「なんとか......分かってもらうのよ。 分かってもらえるまでがんばろう」
ほほえ
せんがいき
嬉しそうに微笑むジャスティスを見て、戦鎧鬼も立ち上がった。 その時である。

「あ......お目覚めでしたか......?」
ほろばしゃ
のぞ
幌馬車の幕が少し開き、 小さな少女が顔を覗かせた。
「ああ...... セシア、おはよう」
あいさつ
きんちょう みなさ
ひそ
かたむ
へいおん
じゃ
少年の挨拶と共に、ライオットの全身に緊張が張った。視線を密かに傾ける。 ジャス
ティスの聖戦杖は、無反応であった。
「これ、朝食です。良かったら召し上がってください」
「わあ、ありがとう。すまないね」
「いいえ......それよりジャスティス様、もうお体の具合の方は?」
だいじょうぶ
「たくさん寝たから大丈夫、心配かけたね」
「聖衣、洗っておきましたので......」
「君がしてくれたの? 悪いなあ」
平穏で、微笑ましい会話だった。
みじん
邪意など微塵も感じられない。
たんけん
だがライオットの脳裏には、短剣にすがるセシアの姿がこびりついたままだった。
「ライオット、どうしたの? ほおっとしてさあ......」
のぞ
あわ
せんがいき
ジャスティスに顔を覗かれ、慌てて戦鎧鬼は我に返った。
ふうふ
あき
J
「ううん、別に......あんたらの夫婦ごっこに呆れてるだけよ。 朝からお熱いわね」
「な、何言ってんだよ、もおっ!」
じゃれる少年を、 セシアも笑っている。
平和な朝に似合いの、涼やかな笑みだった。
(昨日、あたしが見たセシアも......)
悪夢だったのかしら......)
むだ
そうではないと知りつつも、ライオットは無駄な夢想を試みる。だが戦鎧鬼の防衛本能は、少女への
警戒を解くことはできなかった。
いか

宿営地に、人の輪ができていた。
ウォーデンやガルシアはもちろん、ほとんどの聖戦官と聖騎士が輪に加わっている。
ひざまず
らは一様に、輪の中心に跪いていた。
彼
「いらっしゃいましたぜ・・・・・・」
つぶや

気配を感じたのか、ガルシアが呟く。
どうし
「〈永遠の導師〉のお出ましだ・・・・・・」
ムービング・サウンド
しんどう
とつぜんこだいしんせいじん
大地と大気が震動した。 輪の中に、突然古代神聖陣が現れる。
白い光を放ち、転送奇跡が一同の前に召喚された。
しょうかん
へいふく
調査隊は、みな等しく平伏する。
ひとかけ
神聖陣の上には、十数人の人影がヴァスランから転送されてきた。
まず一歩を踏みだしたのは、鼻の尖った老人だった。
とが
「みな、ご苦労だな」
きむずか
大げさに、老人は鼻を鳴らした。髭をたくわえた無骨そうな男だ。尖ったワシ鼻が、彼気難しく、短
気な男に見せていた。
ふちど
ほどこ
青い長衣は、ラエモスと同じ評議員のものだ。だが服には黄金の縁取りが施され、胸に
は略章もずらりと並んでいる。
とうかつ
ヴァスラン最高評議会議長。 この地域を統轄する最高責任者こそ彼、フェブレスだった。
かつか
へいふく
あいさつ
たび
「これはフェブレス閣下......」
平伏したまま、ウォーデンが挨拶した。
ごくせん
「この度は直々の御督戦、痛み入ります」
「なあに、ようはヒマなのだ」
わざとらしい、気さくな笑みで、フェブレスは宿営地に踏み出していった。
ついきゅう
きぬ
「ヴァスランの評議会では、わしの責任追及ばかりよ。 正直、息抜きがしたくてな。
それで参ったというわけだ、よろしく頼む」
きんちょうかん
かた たた
ウォーデンの肩を叩き、あくびを放つ。
えんりょ
たの
はな
あんのん
緊張感も無く、遠慮も無い ・安穏な政治屋らしい態度であった。
「ここは戦場だよ、 聖戦のね......」
ろうぼ
続いて、白い聖衣の老婆が歩を進めてきた。
どの

のんき
「四人も殺された場所で、息抜きかい? 評議長殿は、相変わらず呑気だねえ......」
かわ
かっかっと、乾いた笑いを引きつらせる。
笑ったのは、人とも思えぬ老婆であった。
こめかみや首筋から、だらりと幾つものチューブがぶら下がっている。
軟質なそれは、呼吸の度に膨張と収縮を繰り返した。前時代に流行った、外付けの生命維持装置である。
なんしつ
ぼうちょう
はや
せいめいいい じそうち
やわ
たたず
それでも柔らかい笑顔だけは、日なたに佇む老婆のものだ。目を細めて笑い、ジキータは労るような声を上げた。
いたわ
「ご苦労さんだねえ、ウォーデン」
老婆は、ほんと聖戦官の肩を叩いた。
「あたしらが来たからには、もう安心だよ。何も心配することはない」
ジキータは、一同に聞こえるように労った。
いつしょ じゃしん
つうば
「一緒に邪神退治といこうじゃないか。ヴァスランに平和を取り戻すんだ、いいね?」
きょうしゅく
「早速のお越し............恐縮です」
あんど
呼びかけて、安堵の息を吐く。
ごちゃくとう
「ジキータ様の御着到、我ら一同、心よりお待ち申しておりました」
ぞうえん
おもて
老婆は、共に転送してきた増援の聖戦官を手招き、 一同に面を上げさせた。
「けどねえ、こんなに集まらなくてもいいだろう。お前さんの馬車に案内しておくれ。 まずはそこで・・・・・・話そうじゃないか」
えがお
緊張をよそに、気さくな笑顔を浮かべる。
老婆の言に、ウォーデンはただうなずくだけであった。

ヴァスラン聖教会長ジキータ。
この地域の聖教徒を束ねる者である。 すでに百八十余年を生き、教会長職に就いて七十 年......ギアナ地方においてもつとに知られた〈長命者〉である。
くんこう
そんしょう
あた
せいきし
その長年の勲功を表して、 〈永遠の導師〉 と言う尊称すら与えられている。
聖騎士と聖戦官にとって、畏怖と尊敬の対象であった。
クルセイダー
いふ
「とにかく、行ってみるんだねぇ......」

薄く入れたゼロン茶をすすり、馬車の荷台でジキータは言い放った。
しんちょう
あとち
しゅうげき
「ワルーン村の跡地には、何かある......それはお前さんが襲撃されたことで、分かったじゃないか?
後はどうやって攻めるか、だよ」
たんのう
ひざもと
老婆は、茶の渋みを堪能し、ほおっと息を吐いてみせた。その膝元には、ウォーデンとガルシアが並
んで跪いていた。
ひざまず
いりよくていきつ
「ならば............今度は威力偵察を行います」
ウォーデンは決断し、 地図を指し示した。
けいかいせん とつば
「今度は森の中の警戒線を突破して・・・・・・村の跡地に入ります。 そして異常を確かめる。ま
ずはそこまで・・・・・・」
きんちょうかん
せんぱつ
「慎重だねえ、まあいいさ」
せきばら
ジキータが言うと、聖騎士が咳払いをした。
「今度は、俺の出番でしょうなあ」
緊張感も無く、ガルシアは胸を張る。
「聖騎士も半分は連れて行きますぜ。それだけいれば、村までたどり着けるでしょう」
じゃしん
「油断するな、邪神は手強い」
てごわ
おそ
ウォーデンは、ジキータを恐れるように聖騎士の軽口をたしなめた。
せんけんたい
「選抜した先遣隊は苦戦した。 それを決して・・・・・・忘れるな」
「そうですかねえ 選抜たって、
ジャスティスの餓鬼もいたじゃありませんか。たいして役に立ちそうもないくせに」
ねむけ こら
その名前に、眠気を堪えていたフェブレス議長が身を起こした。
「聞かぬ名だな・・・・・・何者だ?」
じゅんれい クルセイダー
きょうしゅく
「巡礼の聖戦官です。 私が調査隊への同道を依頼しました」
ひか
後ろに控えていたラエモスが告げる。
イフリート・クラス ほうむ
だ
「先遣隊に参加し、邪神伯級を葬ったそうです。 なかなかの手練れだと思いますが...・・・・・」
ジキータの手が、一瞬止まった。
ろうば
少年の名に、老婆は確かに反応している。
だが表情も変えずに、教会長はウォーデンを見下ろした。
たよ
「よそ者に頼るのは、よくないねえ。だいいち、ヴァスラン聖教会の名折れじゃないか」

「はっ、申し訳も......」
恐縮するウォーデンが、冷や汗を流す。
その緊張を、ジキータは軽く笑い飛ばした。
「いいんだよ、責めてるわけじゃない。 使えるのなら使えばいいさ」
「はっ、すみませぬ・・・・・・」
あやま
「そんなに謝らなくてもいいさ。それにしてもお前さん
いつになく顔色が悪いね?また胃痛なのかい?」
ウォーデンは、微かに笑みを取り戻した。
「いつもの持病です」
「心労のせいだね、 苦労かけて悪いね」
いたわ
もど
やさ
こわね
ひび
ジキータは、まるで孫でも労るように、優しい声音を響かせた。そしてゆっくり、聖騎上の方にしなびた指を突きつけた。
「まあとにかく... 次の出番はガルシアに譲るんだね。 その子は外しておこう」
かわ
ゆうぜん
そまつ
ジキータは湯飲みを傍らに置き、悠然と粗末な椅子に身を沈めた。
「この作戦は、ヴァスラン聖教会が成功させるんだよ。
よそ者の手は借りても、決着は私らがつける。明日はそうしようじゃないか」
「ははっ......」
たいくつ
ウォーデンとガルシアが合唱する。退屈そうな顔つきで、 フェブレスもうなずいてい た。
「そうとなれば、準備に入ろう」
老婆は、今度はウォーデンを指さした。
「お前さんは聖戦官を三人選んで、ここへ連れておいで。
明日、村へ行く者だよ。あたし防御奇跡を付帯させてあげるから」
デイフエンス・サウンド ふたい
おぼ
「それは・・・・・・ありがたい思し召しです......」
さっそく
ウォーデンは、老婆の実力を知っている。礼の言葉に強い実感が込められていた。
サウンド
じゃしん
「では早速に... ジキータ様の防御奇跡をいただければ、いかな邪神とて恐れる必要、
ありませぬからな」
「だといいけどねえ......それから、ガルシアは残っておくれ」
ほほえ
立ち上がったウォーデンを無視し、ジキータは聖騎士に微笑んだ。
さず
「お前さんには今、防御奇跡を授けてやるよ。その後で、聖騎士を選抜しな、いいね?」
「こりゃあ、ありがてえ」
ガルシアは、にやついて手を叩いた。
たた
しゅう こわ

「今いただければ、 今夜は安心して眠れますぜ。 夜襲は怖いですからなあ......ありがたい、ありがたい」
いたわ
出来の悪い子を労るように、ジキータは目を細めてみせた。
ほろばしゃ
せいじゃく
ウォーデンは、そのまま退出する。幌馬車の中を、いったん静寂が横切った。
「さて、ラエモス...・・・・・」
せいせんじょう
聖戦杖を引き寄せ、ジキータはよろよろと椅子から立ち上がった。
「はっ、教会長様、 何か......?」
あご
ひざまず
改めて跪き、評議員は視線を上げる。
その顎めがけ、 ジキータは聖戦杖を力任せに叩き込んだ。

「が......はあっっ!」
ちしお
てんとう
わく からだ
舌を噛まされたラエモスは、血潮を撒いて転倒する。 荷台の枠に身体をぶつけ、評議員
は激痛に悲鳴を上げた。
「ジ、ジキータ様私が...何を......?..」
「考えるんだね、自分の無能さを......」
どせい しぼ
いたわ
腹の底から怒声を絞り、 ジキータは聖戦杖を震わせた。 そこに、先ほどまでの労り深い
老婆はいない。
つき
ぎょうそう あら
聖戦杖でラエモスを突き、老婆は悪鬼めいた形相を露わにしていた。
りょうけん
「いくら手が足りないからとて、よそ者を入れるとはどういう了見だい?
あたしは許可した覚えはないよ、巡礼だなんてね!」
じゅんれい。
「も、申し訳も......」
そこまで言うのがやっとだった。 ラエモスの口から折れた歯がこぼれ落ちる。
そむ
フェブレスは、思わず目を背けていた。
ぎんざやく せいさい
ほんしょう
残虐な制裁に、眠気はとっくに覚めていた。彼とて、老婆の本性を目の当たりにしたのは、久しぶり
のことである。
「ですが、 ジキータ様・・・・・・」
とうとつ
ひび
唐突に冷静な声が響いた。
「まさかジャスティスに、例の事を知られるとも思いませぬ」
それはガルシアの声であった。
せいき
聖騎士の顔にも、いつものにやつきは無い。それどころか鋭敏で怜悧な、別人の顔が言
葉を続けていた。
うで
しょせん
「見た者は......若いくせに腕が立つ、と申しております。しかし所詮、それだけでしょ
う。さして案じる必要もございますまい」
だが背筋を伸ばした聖騎士に、ジキータは小さな笑いを投げかけた。
やつ
おこ
「あたしもね... 他の奴ならこんなに怒りゃあしないんだよ。 けど...
ジャスティスって子はいけないねえ。 最悪だよ」
その言葉に、ラエモスが身を起こした。
こんわく
から
フェブレスとガルシアも、困惑した視線を絡ませる。
「最悪・・・・・・とはどういうことで?」
「いったい 奴は何者なのです?」

問いかけられた老婆は、ともかく席に落ち着いた。弾んだ息を鎮め、ジキータは首を傾げて告白する
。
こわ
「分からないんだよ、だから怖い......」
「と、言いますと......?」
「誰にも奴の正体が分からないのさ」
かたわ
しなびた指を傍らに伸ばし、ジキータは再びゼロン茶をすすり上げる。それでもガルシアには、会話
が見えて来なかった。
「誰にも......とおっしゃいますと?」
「二年ほど前かねえ......」
おもむろに、ジキータは口を開いた。
どうもん
クルセイダー
うわさ
「邪宗紋を持った聖戦官が現れたと……噂が出たのさ。ごく一部の聖戦官の間でね」
ばか
「そんな馬鹿なことが......」
しつそう
むすこ
「まあお聞き。一人の聖戦官が失踪したと言うんだ。
それ以来、息子の聖戦官の手には邪宗紋が出るようになったと聞く・・・・・・」
めいもく
おく
ジキータは、 瞑目して記憶をたぐり寄せる。
語り部のように、老婆はゆっくりと言葉を紡ぎだしていった。
けつめいしゃ
だいしょう ゆめ、
「父親が血盟者に墜ちたと言う者・・・・・・息子は血盟の代償に捧げられたと言う者が大半だった.
....けどね、奇跡が使える以上、 聖戦官だと断言する者もいたのさ・・・・・・」
サウンド
とう ぎ
「その討議はいったいどこで......」
ガルシアを見据え、老婆は重い口を開いた。
「......十二教皇委員会さ」
こうちよく
聖騎士は無論、フェブレスとラエモスもその名に硬直した。
最高位の聖戦官、聖騎士で構成された十二教皇委員会こそ、新大陸十字軍の最高指導部である
。 創世神に一番近い人々だと言っても過言ではない。
フロンティア・クルセイダーズ
かごん
「十二教皇の間でも、その処遇を巡って紛したらしい。あくまで噂だが・・・・・にしては
話がでかすぎるんだよ」
「..........」
ガルシアたちは、一様に押し黙った。
おんけい
きず
しこう
十二教皇は、いわば救世主である。 神の恩恵を最も授かった至高の存在なのだ。
なや
その彼らをしても悩ませた存在・・・・・・

ジャスティスであるとは思えなかったし、思いたくもなかった。
「で、噂の者はその後どこへ?」
ひたい
聖騎士の問いに、ジキータは額をつまんだ。
じゅんれい
えいたつ
あた
「結局、処分保留のまま、 その聖戦官は巡礼に出されたと聞く。
栄達を与えず、死するまで辺境を巡っているそうだよ......」
めぐ
「それが十二教皇の答えですか......」
「だろうね、他に手だては無かったんだよ」
フェブレスは、音を立てて息を呑んだ。
「そ、それが ・手勢に加えたジャスティスと言う者なのか....?」
うわさ
こうてい
「まだ分からないよ。
十二教皇は、この噂を否定も肯定もしてない。情報も開示してないんだから......」
あきら
けつめいしや
ろうば
ひび
ジキータは、諦めの笑いを響かせる。だが当然のことに、一同は押し黙った。
クルセイダー
血盟者かもしれぬ聖戦官を野放しにしている······
新大陸十字軍を統べる十二教皇委員会が認めるはずもない事件であった。
老婆は、生命維持チューブをいじりながら、絶望した空気に口を開いた。
みよう
やしゆう
「ただね......ウォーデンが妙なことをあたしに訊いたのさ。邪宗紋を持った聖戦官を知ってるか......ってね。 それでピンと来たのさ」
ガルシアは、眉毛を跳ね上げた。
「では... ウォーデンは気付いている?」
「馬鹿な! なぜ奴は報告せんのだ!」
フェブレスが激すると、老婆は乾いた笑いを引きつらせた。
「そう、きっと気付いて......奴は何もできないでいるのさ」
ちょうしょう
かたぶつ
あご
老婆は嘲笑を浮かべ、しきりと顎を撫でた。
いつぱい
「あの堅物の小心者は、作戦のことだけで頭が一杯さ。
だから自分の中で無かったことにしてる............それが一番楽だからね」
「そういう男なのか......?」
なや
「そういう男さ。だから前から仲間にはしていない。いつも悩んで、胃を痛めては......薬に頼ってる......その程度の男さ」
せいきし
そうだろう、とジキータは聖騎士に尋ねた。
かた
たず

しょせん
ガルシアも、肩をすくめる。 聖騎士にとってもウォーデンは、所詮その動作だけで済む
程度の人物だったのだ。
「見て見ぬふりか......」
きんちょう
フェブレスも一瞬だけ笑い、すぐに緊張した顔を取り戻した。
もど
「だがジャスティスの件は、無視できまい。奴が血盟者なら、危険なのは我らだ」
せきばら
評議長は、大きな咳払いをした。
どの
「ジキータ殿、なんとかその正体を調べられまいか?」
「危険だねえ......でも手は打つよ」
ジキータは、周囲を落ち着かせるように、柔らかい笑みを放った。
みもと
うわさ
「ジャスティスの身元と、その噂は、ヴァスランに残して来た連中に調べさせるよ。
そのうち、こちらへ報告が来るはずさ」
「早くしてほしいものだな」
「分かってるよ。 けどとにかく......」
せいきし
焦るフェブレスを制して、 ジキータは聖騎士を指さした。
しょう わ
せま
「今はワルーン村を何とかするんだよ、ガルシア。
あそこには必ず............邪神がいる。さっさと片づけないと、また犠牲が出ることになる
よ......」
ぎせい
「分かりました。 必ずや、明日・・・・・・」
ねら
じゃし
「狙われてるのは、あたしたち聖教会と評議会の者ばかりだ。
何が目的か知らないが......まずは目前の敵を片づけないとねえ・・・・・・」
その言にうなずき、ジキータはラエモスを振り返った。
はな
「お前さんは、ジャスティスから目を離すんじゃないよ。それくらいできるはずだろ?」
「はっ、お任せを ......」
ぬぐ
きょうしゅく
からだ きょうふ
ふる
口元の血を拭い、ラエモスはひたすらに恐縮した。 身体は恐怖に震えたままだ。
だが満足そうに目を細め、ジキータは胸の前で十字をきった。
「ではみな、為すべき事を......我らの目的はただひとつ我ら神の軍勢に刃向かう、邪神どもをこの
地から追い払うのだ・・・・・・」
はら
ほろ
唱和して、 一同も十字をきる。
いの
狭い幌馬車の中での、悪辣な祈りの姿であった。
夜は、意外に早く訪れた。

この時期のネヴォワ湿地帯は、昼間が極端に短くなっている。 それでなくても、厚い雨
雲にいつも覆われ、日照量はごく僅かだ。
とも
宿営地にも焚き火が灯り、いつの間にか夕食の時間になっていた。
「昨日はご苦労様です、 ジャスティス様」
通り過ぎる聖騎士たちは、みな一様に声をかけてくれた。
からだ ぐあい
「お身体の具合はいかがですか?」
えんりょ
「たっぷり食べてください、遠慮せずに」
「あ、ありがとうございます・・・」
いそが
優しい言葉に慌ててうなずく。 ジャスティスは忙しそうに返礼しながら、煮込んだ野菜
をロに運んでいた。
となり
ほほえ
ゆうげ
隣ではアレナとセシアが微笑んでいる。 いつになくのどかな、夕餉の時間であった。
「昨日はジャスティス様、ずっと眠ってらっしゃったから......」
のぞ
セシアはチーズの切り身を差し出して、少年の顔を覗き込んだ。
あいさつ
「みんなご挨拶できなかったんです‥‥‥ でもみんな心配していましたよ」
「うん......心配かけたね」
チーズを受け取り、すぐ口にほおばる。 その横顔に、 アレナの顔もほころんでいた。
「それにみんな、尊敬もしてるわ」
もど
地面に座ったアレナは、 木箱のテーブルにスープ皿を置き戻した。
なんかい サウンド
しょうかん
「若いのに難解な奇跡も行使できたって...
召喚も早いし・・・・・・何より度胸があって頼りになるって言ってるわ」
アレナは言って、 ウィンクを投げた。
「ま、あたしもそう思ったけどね」
おこ
「でも、いつもライオットに怒られるんだ」
少年は、少し照れたようにうつむいた。
「もっと冷静になれって... 周りを見て、考えて戦えって......僕もそうできたら、もっと
強くなれるんだけど」
ジャスティスはチーズを呑み込み、スープをすする。 ほおっと息をつき、夕餉の風景を
眺め回した。
調査隊の人数は、昨夜より多い。
ざせいしゃ
ぞうえん
四人の犠牲者を出したが、増援部隊の数はそれを上回っている。
そのせいか、仲間を失った沈痛な雰囲気はどこにも無かった。
ちんつう ふん
とつにゅう
せいきし
それどころか、明日のワルーン村突入を前に、聖騎士たちは大いに意気を上げている。
「みんな‥‥‥元気なんだなあ」

「あら、あなたのせいよ」
他人事のように言うジャスティスを、 女騎士は笑って見つめた。
じゃしん
たお
クルセイダー
「あなたが邪神を倒したから...みんな勝てると信じてるのよ。強い聖戦官が一番頼りになるもの。だから、あなたのせい」
「そうかな......」
笑って、ジャスティスは首を傾げた。
「ヴァスランから教会長さんが来たから、きっとみんな安心してるんだよ」
「それもそうですけど......」
あまいろ かみ
セシアは食後のゼロン茶を一口飲むと、自分の亜麻色の髪を撫でつけた。
しんらい
「ジャスティス様は信頼されてます、みんなから......それに私たちも......」
となり
た
ゆうげ
少年はセシアを見つめ、隣の焚き火へ視線を移した。
そこにも夕餉を楽しむ聖騎士たちジャスティスもいつもの微笑を返す。
うれ
あかし
恥ずかしいほど嬉しい、親愛の証だった。
かか
がいる。視線に気付いた彼らは、笑って料理皿を掲げてみせた。
びしょう
きゅうだん
(だけど......)
こわ
少年は、この幸福感が怖かった。
ひょうへん
手のことを知れば、みな豹変したように自分を糾弾し、責め立てるだろう。そしてきっと、いつものように追われるのだ。
それが許されている今を、ジャスティスは感謝して噛みしめていた。
れんあい
「ま、セシアは信頼っていうより、恋愛って感じよねえ」
かた
ひじ
にやつくアレナは、親友の肩をわざとらしく肘でこづいた。
「昨日だってさ、ジャスティスのこと、泣きそうな顔で看病してたしい!」
「そ、そんな顔してないわよ!」
ていこう
親友にだけは、セシアも強い言葉で抵抗する。だがアレナの責めは止まらない。
「そうだっけ?あたしに 「ジャスティス様、死んだらどうしよう』って言ったのあんたじゃない?」
「言ってません!」
せんたく
「言ったわよお!あんた泣きながら、 ジャスティスの聖衣、洗濯してたじゃない!」
ばか
「もおっ、アレナの馬鹿っ!」
こぶし
だがジャスティスは嬉しそうに、拳を振り上げるセシアに微笑んだ。

「本当に......僕、心配かけちゃったんだね。ごめんね、 セシア......」
「そ、そんな......」
すそ
セシアは服の裾を握りしめて、口ごもる。
その仕草を横目に、アレナは大きなため息を吐いた。
ほほえ
「でも昨日はさ・・・・・・
ライオットが最初のうち看病してたのよねえ。ガサツに見えて、案外優しいとこあんのねぇ」
やさ
「うん...... ライオットは優しいよ」
かく
その真意を隠して、少年はうなずいた。
「僕は何度もライオットに助けてもらってるんだ。 最高の相棒だよ」
「なら、セシアに看病任せればいいのよ」
かた たた
アレナは、自分の相棒の肩を叩いた。
「そうすりゃあ、この純愛ももっと深まったはずなのにさ! まったく・ 気の利かない 女ねぇ!」
げんこつ
瞬間、アレナの脳天に拳骨が落ちた。
「だ、誰よ! 痛いわね!」
「どうせあたしはガサツに見えて、気が利かないわよ!」
せんがいき
けんおかん
闇の中から現れ、ライオットは一声吼えた。 戦鎧鬼は、嫌悪感を剥き出してアレナを見下ろしている。
「あ、あらライオット ・警備ご苦労様! 夕食、食べる?」
うで
ねこな ごえ
「猫撫で声であんたねえっ......!」
ライオットの腕が、 アレナの首に迫った。
きょうせい
とうそう
女騎士は、嬌声を上げて逃走する。
せま
ジャスティスとセシアは、二人の一騎打ちにしばし笑い転げていた。
それが四人の最後の、幸せな時間であった。

枕元のランプに手を伸ばしかけ......
ライオットは明かりを消すのを中止した。
「どうしたの、まだ寝ないの?」
荷馬車の荷台では、もうジャスティスが毛布をかぶっている。 その横でライオットは、疲れた声を吐き出した。
「ひとつ...............聞いていいかな?」
「なに......?」
とつぜん
「あんた......セシアのこと、 どう思う?」
しば
突然の質問に、少年は目を瞬いた。
「な、なんだよ、いきなり...」
きら
「好きか嫌いかじゃなくてさその... どういう女の子だと思ってるか、よ」

言葉を選び、作り笑いまで浮かべてライオットは問いかけた。ジャスティスは、真剣に
考え込んでいる。
やさ
「そうだなあ、優しいよね......秘書官だけあって気が利くし・・・・・でもおとなしくて、控え
しんけんめで......かよわい風にも見えるなあ」
予想された答えだ。ライオットも、本当ならそう答えたい。 しかし.....
けつめいしや
「うん、そうよね......けどさ、もし彼女が...... 血盟者だとしたらどうする?」
「な、なに言うんだよ、ライオット......」
「だから、もしもの話よ」
じょうだん
ライオットは、冗談でも言うように話題を続けた。
じゃしん
いや
「ほら、よく言うでしょ。 邪神は人間の油断につけ込むってあたしたちが一番油断す
る人間って言ったら......ここではセシアじゃない? もしそうだったら嫌だなって、
ちょっと思っただけよ」
「そんなこと思わないでよ!」
するど
たた
ライオットのはぐらかしに、少年は鋭い声を叩きつけた。
「そんなこと...... 冗談でも思わないでよ!
セシアが血盟者だなんて・・・・・・そんなこと想像するの、セシアに失礼だよ!」
「あ、ああ‥‥‥ごめんなさい......」
こそく
ライオットは、姑息な言い回しで話を切り出したのを後悔した。
こうかい
ジャスティスこそ、今まで何度も血盟者だと疑われて来たのだ。 疑念を抱かれる辛さ
を、誰よりも知っている。 だからこそ、怒りの強さも半端ではないのだ。
はんぱ
「変な想像して、悪かったわね。本当にごめんなさい・・・・・・」
おこ
「ライオットじゃなかったら、 もっと怒ってるよ......」
ひざ
言って、少年は毛布ごと膝を抱えた。
かか
「僕、人に疑われるのは嫌なんだ・・・・・・だから人を疑うのも嫌だ・・・・・・」
「そうね、あたしも分かってたはずなのに」
「ううん、もういいよ」
かわ
つえ
言って、 ジャスティスは傍らの杖を見た。
「それに......そんなこと絶対ないからね。もしセシアが血盟者だったら、みんなの聖戦杖
が光るはずだもん」
ライオットは、次の問いを呑み込んだ。
(じゃあ、聖戦杖に反応しない血盟者がいたらどうする......?)
だが、その問いは言えなかった。
きつもん。
その質問こそ、かつてジャスティスが何度も浴びた詰問だったからだ。
「お前、いったいどうやって聖戦杖をごまかしてるんだ?』
のうり

面と向かって、言われたことを思い出す。 その時のジャスティスの顔まで、脳裏に蘇ってきた。
二度と見たくはない表情だった。
（この子には言えない......）
せいせんじょう
（ジャスティスには、セシアのこと・・・・・・）
ライオットは、ランプを消して毛布を頭からかぶった。
「ごめん、今日はもう寝よう」
戦鎧鬼は、少女の声で言った。
とつにゆう
からだ
「明日はワルーン村突入だからね。たっぷり寝て、身体を休めておこう......」
「うん......おやすみ、ライオット」
ねむ
だが、眠れはしないだろう。
くちびる
ライオットはそう確信して、 毛布の中で唇を噛みしめていた。

「眠ったか............」
つぶや
しつそう
せいき
ほろばしや
馬車の外で呟き、黒い影は疾走を開始した。
夜警の聖騎士の目をかすめ、影は幌馬車の間を駆け抜けていく。
そして一台の幌馬車に音もなく滑り込んだ。
「ガルシアだね、お入り......」
すわ
荷台に座るジキータは、影を呼び寄せた。
マント
ろう
ひざまず
黒い外套をまとったガルシアは、静かに歩を進め、老婆の前に跪いた。
「夜分遅くに申し訳も............」
「なあに、あたしが頼んだことさ。 それで例の子はどうだね...?」
教会長はランプに手をかざし、僅かな温もりを楽しんでいた。
「何か尻尾をつかんだかい?」
「いえ、別段。他愛のない話ばかりです」
ライオットの胸中を知らぬ聖騎士には、そう聞こえても仕方がない。
うなずいてジキーも、深夜のゼロン茶をすすり上げた。
「まあそうだろうね......しかしこっちの方は進展があったよ」
「と、申されますと...?」
「ヴァスランから転送してもらったばかりの調査記録だよ。 もちろんジャスティスのね」

しへん
サウンド
無造作に束ねられた紙片を、ジキータは聖騎士に突き出した。
移送用奇跡で送られた相当量を、ガルシアは丹念にめくっていった。
たんねん
ろうおう
むすこ
「〈ベルゲンの狼王〉.....あのアイゼンの息子だったのですか...... ジャスティスは?」

いつざい
「だとすれば逸材かもしれないねぇ」
白髪を掻き、ジキータは低く叩いた。
しょさい
あさ
「アイゼンなら何度も会ったよ。書斎に閉じこもって、古い書物ばかり漁ってる割には......実戦向きのいい現場指揮官だったね・・・・・・」
アスモデ
ごかく
「極北動乱では、邪神王ラヴァイエルと互角に戦ったと聞いております......となれば家柄は申し分ない・・・・・・」
いえがら
ガルシアの言葉に、老婆はくっくっと笑いを喉に詰まらせた。
せんれき
せんとう
「申し分ないのは、むしろジャスティスの戦歴さ...
公式戦闘記録だけでこれだけある。ほらここから・・・・・」
プリントアウトされた書式は、びっしり文字で埋め尽くされている。日付、場所、討伐した邪神の種類と数・・・・
じゃしん
うな
ガルシアも思わず唸った。
せいきしだん
さい
「これが十三歳のガキの戦歴ですか......　ヴァスラン聖騎士団三年分の仕事量だ......」
「とすればさ・・・・」
じゅんれい
何かおかしくないかい、とジキータは静かに問いかけた。
こぞう
「家柄も素質も良い......エリートを絵に描いたような小僧だよ。そんな子が栄達の道を断たれた巡礼に出されてる・・・・・・何かあるよ」
じゅしゅうもん
「ですから、邪宗紋を......」
こうみょう　うそ
「いや、言い出したのはあたしだけど……巧妙な嘘かもしれないと思ってね」
すいそく
ジキータは、自分の推測をうち消す言葉を口にした。
「この子はどう考えても...　巡礼をするべき子じゃないんだよ。
将来は十二教皇になるべき子さ............だとしたら噂が本当で追放されたか、または......」
うわさ
「............」
ガルシアは、唾液を呑み込んだ。
老婆は顔を近づけて、小さく囁いた。
せんぷくささつかん
「...............潜伏査察官に任命されたか・・・・・・」
こどう
ささや
聖騎士の鼓動が高鳴った。
せんこう

そんな任務の者がいると噂では聞いたことがある。 十二教皇の命令で、各地に潜行し、
聖教会内部の犯罪を告発する者・・・・・・
「ま、それも噂でしかないがね......」
きんちょう
かた
ジキータは聖騎士の肩に手をやり、緊張をほぐしてやった。
「いずれにせよ、要注意だよ。 その子には明日、あたしも会おう。
とにかく会って......話をしてみたいもんだよ」
「そうでないことを祈ります......」
けつめいしや
「まったくだよ。 査察官にしろ、 血盟者にしろ、ろくなもんじゃないさ」
老婆は、目を細めて会話をしめくくった。
やがて明ける一日は、やけに長い一日となるはずであった・・・・・・
とうばつ
「討伐第一分隊、乗船!」
「討伐第二分隊、乗船!」
しつちたい
うむ
あさもや
せいきし
早朝のネヴォワ湿地帯は、乳白色の濃霧に包まれていた。 その朝靄の中で、機敏な声が
飛び交っている。調査隊は早くも、ワルーン村ヘカヌーを漕ぎ出していた。
「なによ、もう出発するの?」
うで
り
思わぬ朝の寒さに腕をさすり、ライオットは水路の岸に駆け寄った。
すでに五十人以上の聖騎士が小舟に移っている。
こぶね
ぶしょうひげ
ばか
その指揮にはガルシアが当たっていた。
「おっと、わざわざ俺の見送りかい?」
無精髭をしごいて、聖騎士はにやついた。
「別れが惜しくなって、飛び起きたんだろう? 分かるぜえ、女なんてみんな同じだ・・・・・・」
「馬鹿じゃないの! それより......」
ライオットは、後ろを振り返った。ようやくジャスティスも追いついてくる。
二人揃ったところで、戦鎧鬼は真剣な目に戻った。
せんがいき
「あたしたちは、どの船に乗るの?」
「そうですよ!」
もど
ジャスティスも息を弾ませて、問いかけた。
「僕たちもワルーン村へ行きます...いや、行かせてください!
僕たち、みなさんの力を被り、二人の背後を指さした。
「お前さんがたは居残りだよ! 詳しいことはアレナに聞きな!」
言われて、二人は背後を振り返った。
になりたいんです!」
かぶと
だがガルシアは、首を横に振った。静かにカヌーも水路へ滑り出していく。
聖騎士は兜そこには、複雑な表情の女聖騎士がいる。
かぶ

じゃしんたいじ
たい
てから
「ごめんなさい、そういうことなの......」
「そういうってどういう......」
てがら
「今日は......ガルシア団長に手柄を譲ってくれってことよ......」
いぶかるライオットに、アレナも不満そうに口をすぼめた。
「今日はさ......いわば邪神退治の晴れ舞台でしょ? それは直接......誰かの手柄になるの」
「なによ、それをあたしらが横取りすると思ってるの...?」
ライオットは、赤い髪を掻きむしった。
「けちくさい女に見られたもんねえ、あたしも... 別にそんなことしないわよ」
なっとく
かた
だがジャスティスは納得したように、小さな肩を落とした。
しょうしん えいきょう
「そうですか... 確かに邪神退治の戦功は将来、
協会内での昇進に影響しますよね...............僕らが退治したら、確かに横取りに見えるかもしれないな......」
たた
悪いわね、とライオットの肩を叩き、アレナも舌を出してみせた。
せんけんたい
「あたしも外されたのよ、もう先遣隊の功だけで十分だろうって...............」
「あんたも苦労が多いわね」
「別に...... ウォーデン様ほどじゃないわ」
言って、アレナは前方を指さした。
きんちょう
「今日は格別・・・・・・緊張してるみたい」
その言葉で、ライオットは視線を動かした。
ジャスティスも気付いて、思わず息を呑む。
「ウ、ウォーデンさん・・・・・・」
立っている。
にじ
おどろ
しぼ
少年は、驚きの声を絞り出した。
聖騎士の群を押し分け、数人の聖戦官がカヌーへ進み出た。その先頭に、ウォーデンがだがその横顔はどうだろう。
ほお
どろ
げっそりと頬はこけ、顔色は泥のように黒ずんでいた。
病的な顔どころではない。死相が滲んでいた。
たの
「後を頼むぞ...」
そう
れんらく
かすれた声で、周囲に命ずる。
「連絡はジキータ様に送る。心配するな」
ごか
しょうわ
神の御加護があらんことを。 残留する聖騎士たちは、無事を祈る言葉を唱和した。

「ウォーデンさん!」
カヌーに乗り移った聖戦官に、ジャスティスも最後の声をかけた。ウォーデンは、驚いたように少年を凝視する。しばし、両者の間に言葉はなかった。
ぎょうし
つか
ライオットも、その疲れた顔に視線をやった。二人の協力者を見比べ、ウォーデンはほんのわずか、微笑を見せてくれた。
びしょう
「行ってくる......帰ったら......また話そう」
ライオットは、心苦しいものを感じた。
だま
ぼうきつ
ジャスティスの秘密を黙っている彼に、感謝の言葉すら言えなかった。
作戦に忙殺されているウォーデンには、この二日近寄ることもできなかったのだ。
それはジャスティスも同様だった。
少年は聖印を結び、祈りの言葉を口にした。
「神の御加護があらんことを・・・・・・」
ちんもく
うむ
沈黙したまま、ウォーデンを載せたカヌーは濃霧の中に消えていく。
岸辺にはまだ、道中を心配するざわめきが残っていた。
「行っちゃったね......」
かなた
いつまでも、ジャスティスは濃霧の彼方を見つめていた。
しゃべ
「僕............もっと喋りたかった............」
つや
「馬鹿ねえ、帰ってくれば喋れるわよ」
さんぱつ
な
艶やかな金髪を撫で、ライオットは勇気づけるように笑いかけた。

「それに今日一日で終わる... って決まったわけじゃないわ。
あたしらは気長にいきましょうよね?」
うなずいて、ジャスティスも微笑する。
こがら
と、その二人に、小柄な青服がゆっくりと近づいてきた。
「よろしいかな.........?」
ほろ
評議員ラエモスは、にこやかな顔で一礼する。 その手がすいっと、一台の幌馬車を指さ した。
「我がヴァスランの指導者、フェブレス様が是非にもお会いしたいと申されている。来ていただけますな?」
「えっ、あたしらに......?」
とつき
ライオットの顔が咄嗟に歪む。
ゆが
だがそれを察していたかのように、ラエモスは少年に顔を振り向けた。
「それに教会長様もいらっしゃる」
えがお
評議員は、笑顔のままで言葉を続けた。
「お断りするのは、失礼かと思うのだが......」

張り付いたような笑顔に、ライオットの背筋がちくちくとざわめいた。
それは戦場だけで感じる、凶兆の印であった。

きょうちょう
二台の幌馬車の間に天幕が張られ、指揮所は格段に広くなっていた。
ひっきりなしに聖騎士たちの声が交している。
野戦司令部には、増援部隊が持ってきたのか、貴重なはずの無線連絡機までが設置されていた。
れんらく き
「まだ連絡はないのか・・・・・・ラエモス ・・・・・・」
うたた寝から目を醒まし、フェブレスは大きなあくびを撒き散らした。
「もう着いた頃だと思うがな......?」
「確かにそろそろです」
かいちゅうどけい
懐中時計を手にしたラエモスは、評議長に頭を垂れた。
いた
「連絡がありましたら、すぐにお知らせ致します。 それまではどうぞお休みください」
そうか、と言ってフェブレスは寝返りを打つ。 老人は長椅子に寝そべり、またいびきをかき始めた。
かわ
びん
さけくさ
その傍らには、もう何本ものワインの瓶が空にされて転がっていた。 酒臭い寝息に鼻をつまみ、ライオットは舌打ちした。
「なんなのよ、あのジジイは‥‥ やる気全然無いじゃない?」
「そう......かもね......」
ジャスティスは困ったように、返答した。
じょうきょう
だが言った後で、深いため息を吐く。 少年も今の状況には、もう飽き飽きだったのだ。
すみ
とうばつたい
二人は、もう何時間も司令部の隅に座ったままだった。刻々と討伐隊から報告が入るのをただ眺めているだけである。
なが
呼ばれたはずなのに、教会長には会えてはいない。 評議長のフェブレスに至っては、目の前で寝そべっているだけだ。
あつか
(なんなのよ、この扱いは?)
ライオットは、何度も司令所から出ていこうと試みた。だがその度に、護衛の聖騎士に引き留められた。 誰もが、しばし待てと言うだけだ。
(なにか......ある......)
たび
ライオットは、さっきからラエモスの視線にも気付いていた。司令所の中を往来しているが、よく観察すればたいした用はしていない。時折こちらを見ては、また動く。
しろうと かんし
素人の監視だった。
監視される側に気付かれてはならないその鉄則をラエモスは知らないようだ。
ライオットはその無知さを内心あざ笑い、 しばし様子を見ることに決めていた。
(好きにしたらいいわ......)
(気にくわないけどね......)
たいくつ
せの

いつまでも続く退屈に、ライオットが三十六回目の背伸びをした時だった。
「教会長ジキータ様がおいでです」
こし
聖騎士に告げられ、ジャスティスとライオットは椅子から腰を上げた。
ほろばしや
ろうば はしご
そばづか
せいせん
幌馬車の中からゆっくりと、白い聖衣の老婆が梯子を降りてくる。仕えの者から聖戦杖を受け取ると
、長命者は穏和な笑みを二人に振りまいた。
じよう
おんわ
うやうやしく頭を下げる。
じゅんれい
「ご苦労さんだねえ......二人とも............」
「ヴァスラン教会の長、ジキータだよ。 巡礼の身で参加とは、徳のある子だねえ」
「いえ、そんな......」
すわ
ジャスティスは老婆の手を取り、手近な椅子に座らせた。
あいさつ
クルセイダー
「僕の方こそご挨拶が遅れてすみません。 聖戦官ジャスティスと申します」
せんがいき
「あたしはライオット・ ・戦鎧鬼よ......」
こしか
俯いて、ジキータは椅子に深く腰掛けた。
その背後には、いつの間にかラエモスが寄り添っている。
ひざまず
一応、二人も教会長の前に跪いた。
せんけんたい
かつやく
「聞いてるよ、先遣隊での活躍は............」
「ありがとうございます」
うで
「まだ若いのに腕が立つそうじゃないか?」
しゅぎょうちゅう
「いえ......まだ修行中です......」
「ほお、そうかね...故郷はどこだい?」
「ザクセン地方の都市国家ベルゲンです」
ほほえ
すなお
ジャスティスは、微笑みを絶やさず素直に答えている。ジキータの問いも、ごくありふ れたものだ。
だがライオットは、その小さな老婆にじっと視線を据えていた。
はしばし
みのが
何か見えるわけではない。ただその一挙手一投足、言葉の端々に至るまで見逃すまいと
していのだ。
待たされたのには訳がある。
かんし
監視されていたのも同様だ。

評議員であるラエモス自身が監視役である以上、命令を下したのはフェプレスか、もしくはこの老婆のはずだ。 そしてフェブレスは・・・・・あまりに無様な老人だった。
ぶざま
「ところで.....師は誰だい?」
ライオットの視線を無視したまま、ジキータは問いかけを続けていた。
ユア・ライフ
しょうかん
「聞けば〈生命譲渡治癒〉を瞬時に召喚したらしいじゃないか......その若さでそこまでの腕になるには・・・・・・よほど良い教師がいたんだろうねえ?」
ジキータの目が不意に細まった。
かくしん
きんちょう
びしょう
いじ
核心を突く質問に、ライオットとラエモスが緊張する。だが少年の微笑は維持されたままだった。
クルセイダー
「父に教えてもらったんです...父も聖戦官でしたので......」
「名を······聞いてもいいかねえ?」
ろうおう
「〈ベルゲンの狼王〉アイゼン」
じまん
こともなげに、少年はその名を口にした。
「僕の自慢の父............でした。 もうずいぶん会っていませんが......」
そうかい、とジキータも微笑する。
だがその後方で、ラエモスは恐怖を露わにしていた。顔から血の気が引き、唇は紫色に変じている。
きょう ふ
くちびる
ライオットも、ようやく得心した。
(こいつら、気付いてる......)
(ジャスティスのこと、きっと......)
(それで······監視を......)
だが気付いたからとて、何をするでもない。
そばづか
ろうば
側仕えからゼロン茶の湯飲みを受け取り、老婆はおっとりとそれをすすり上げた。
おやじ
「もう少し詳しく聞きたいねえ......お前さんのこと、親父さんのこと.........」
すご
だま
たいせん
ジキータの声に、凄みが混じった。
思わずライオットが身構える。だが老婆は泰然と、戦鎧鬼の殺気を無視して言った。
せんがい
「お前さん、いったい何者だい......?」
こし けんじゅう
しゅんかん
とうばつたい
「討伐隊から入電!」
するど さけ
あとち
とうちゃく

ていこう
ライオットの手が腰の拳銃に伸びた...............同じ瞬間であった。
通信官が、無線機の前で鋭く叫んだ。
「ただ今、ワルーン村跡地に到着したそうです!ただ今のところ、抵抗は皆無!」
がぜん さわ
ジキータがつまらなそうに身を退いた。
うで
だつりょく
ライオットも伸ばした腕から脱力する。
俄然、騒がしくなった指揮所に、老婆はおもむろに立ち上がった。
「行こうかい、ウォーデンたちの様子が気になるしねぇ......」
ざわ
黙って、ライオットとジャスティスもその後に付き従った。戦鎧鬼は、去り際にラエモスを一瞥する
。だが無言で、評議員もフェブレスの長椅子に立ち去っていった。
いちべつ
むごん
れんらく
「フェブレス様、討伐隊より連絡が......」
「......うるさくなって来たのお・・・・」
せいきし
クルセイダー
周囲は、聖騎士や聖戦官のざわめきで騒がしいほどだ。
フェブレスは長椅子から滑り降りると、自分の幌馬車に歩き始めた。
ほろばしゃ
「結果が分かったら起こすのだ。それまでは······ふぁああ······呼ばんでもいいぞ・・・・・・」
はな
うなじを掻き、評議長は指揮所を離れていった。
じゃしんたいじ

元々、邪神退治など興味のない老人である。
いや、政治すら興味が無いかもしれない。
フェブレスにとって大事なのは、評議長という職であった。その職名は、多くの貢ぎ物
を引き寄せた。 金、 特権、 女・・・・・・
すべ
みつ
る。
それを手に入れるべく、議長職も金で買ったのだ。おかげで贅沢な生活を楽しんでいだがこの湿地に
は何もない。
ぜいたく
しつち
金も女も手に入らぬ土地で、できる楽しみは酒を飲んで眠るだけであった。
ぶれい
「あっ、ご無礼しました・・・・・・」
しんだい
幌馬車の幕を開くと、そこには小さな少女がいた。 セシアが、
荷台にあるフェブレスの寝台を整えていたのだ。
「ウォーデンの秘書官か......」
無様なげっぷを吐き、フェブレスは荷台に乗り込んだ。
ねどこ
「わしの寝床を直しに来たのか......それはありがたい......」
「はい......ただ今、終わりました」

しゃく
「ちょうど良い、酌をせい」
すみ
私物の蒸留酒を荷台の隅から取り出し、フェブレスは少女ににじり寄った。
「わしが飲む......お前も飲め......」
「そんな......」
おどろ
ぴん
のどもと
驚くセシアの目の前で、 老人は蒸留酒の瓶に口づけた。喉元にこぼれるのもかまわず、
一気に流し込む。
「・・・・・・さあ、お前も飲め......」
自分が吸った瓶口を、フェブレスは強引に差し出した。
ごういん
うで
セシアは身をかわし、
荷台から飛び降りようとする。だがそのか細い腕を、老人が乱暴にたぐり寄せた。
「フ、フェブレス様!」
「評議長の言うことが聞けぬのか!」
えりもと
ほう
言うなり、セシアの襟元を力ずくに引き裂いた。 瓶を放り出し、両手で服をちぎる。
セシアの喉から悲鳴が漏れかけた。
「助け......!」
「......騒ぐな......!」
からだ
こし
小さな身体にのしかかり、 フェブレスはセシアの口元を右手で塞いだ。
左手には、腰から抜いた短剣が閃いている。
たんけん」 ひらめ
だま
「騒げば刺す... 死にたくはないだろう......しばし黙っておれ......」
よご
くちびる
少女の首に、汚れた唇が近づいた。
あらが
セシアは目をつぶって、抗っている。
とうばつたいとつにゅう
だが誰も助けには来ない。 討伐隊突入の報に、警護の兵もどこかへ消えていた。
むならと ぎょうし
フェブレスは、セシアの胸元を凝視した。
はだ
ぜいたく
よだれ
日光を知らぬ白い肌は、老人には何よりの贅沢だ。 思わず、 震える唇から涎が垂れる。
かんき
フェブレスは、歓喜にわななないた。
「......あ......ああ......」
フェブレスはその瞬間、何事が起こったか理解できなかった。
しお

涎と共に、自分の口から血潮が流れている。 どす黒い血液が、
セシアの胸元にしたたり落ちていった。
「......あ......あああっっ......!」
フェブレスは、右手で自分の口を塞いだ。 セシアは老人を突き飛ばし、後ろへ退く。
ゆか
すべ
そしてようやく、老人は全てを理解した。
みぞおち
つばもと
フェブレスの鳩尾に、短剣が鍔元まで突き立っていた。刺し口からは、もう大量の血液が床に流れている。
まちが
それは間違いなく、 セシアの短剣であった。

【第四章 ワルーン村/憤怨】

茂みを抜け、ウォーデンは歩みを止めた。
ガルシアも、五十人近い騎士たちも、茶に姿勢を低めて周囲を窺っている。
いちぐう
静まり返った森の一隅に見えた。
蔓草が群がり生え、木々の枝は伸び放題である。地面はおろか、雨雲すら見えなかっ た。
「ワルーン村ですな......」
あせ
額の汗を拭って、ガルシアが断言した。
「間違いないです、 焼け跡が.....残ってる」
やいや
その言を、ウォーデンは嫌々認めた。
こんせき
どろ
みちしるべ
確かに樹木の間には、いまだに家屋の痕跡が生きながらえている。 泥の中には、道標らしい看板が突き刺さっていた。
さいげつ
二年と言う歳月で、かつての村は森に呑み込まれていた。
二百人が生きながら焼かれた村へ、彼らは帰ってきたのだ。
れんらく
「通信官、指揮所へ連絡......」
土色の顔で、ウォーデンは一人を手招いた。
じょうきょう
「すでにワルーン村跡地へ前進、事後は三分おきに状況を報告するゆえ、
回線を開いて待機せよ......以上だ」
「はっ、直ちに......」
けいたい
クルセイダー
せいきし
携帯連絡機に向き合い、一人の聖騎士が指揮所を呼び出し始める。
でウォーデンは、冷汗を全身から流していた。胃が揺れるように痛み、身体は薬をしていた。だが今、飲むわけにはいかない......
「先に進むぞ、ガルシア......」
きじょう
聖戦官は、気丈な声で命令した。

じゃしん
「油断するな、邪神はここに・・・・・・いるはずだ」
前進、とガルシアが叫ぶ。
さけ
でむか
二年ぶりの訪問客を、頭上の鳥たちがけたたましく出迎えてくれていた。
「ウォーデン様っ!」
いつせい さけ
先導する聖騎士たちが一斉に叫んだ。
いきよ
った。 から
かべ おく
彼らが踏み込んだのは、ひときわ大きな廃墟である。びっしり蔦が絡まる壁の奥から、緊迫した気配が伝わってきた。
きんぱく
「何事かっ!」
せいせんじょう にぎ
いきよ
とたん
つるくさ
ウォーデンは聖戦杖を握り、その廃墟へと足を踏み入れた。途端に絶句する。
「ここ・・・・・・なのか........」
廃墟はかつて、二十メートル四方もの大きさだったのだろう。広々とした空間は倉庫にも見えた。だがあちこちに何かの作業台が散乱している。 工場を思わせる、廃墟であった。
まどわく
しんにゅう
蔓草は、窓枠をぶち抜いて侵入し、床にまで達している。だがその床の中央部分だけは、くっきり地面が露わになっていた。
いたん
地面には、異端の文字が刻まれていたのだ。
「なんてこった・・・・・・」
うめ
背後で、ガルシアがそう呻いた。
けつめいしや
ざしき
聖教徒が神聖文字を使うように、血盟者は禁秘文字を用いて様々な儀式を執り行う。
目の前の地面には、その禁秘文字が書き込まれた星形陣が描かれていた。人間が魔導の力を借りるべく、 邪神を呼び出す門······いわゆる血盟陣である。
じゃしん
「誰かがここにいたのだ......」
つぶや
ウォーデンは、地を見つめたまま呟いた。
ひそ
けつめいじん
「いや、今もどこかに潜んでいるかもしれん...... 二年もの間、放置されたこの湿地の奥で······邪神は呼び出されたのだ・・・・・・」
しつち
こし
クルセイダー
腰を落とした聖戦官は、血盟陣の中央に指先をつけた。湿った土は黒ずんでいる。手で潰せば、黒い汁が手首に垂れた。

しる
とうばつたい
「血だな・・・・・・古いものではない......」
嫌悪を剥き出し ウォーデンは舌打ちした。
のうずい
にえ
だとう
「奪われた脳髄は、ここで生け贄に捧げられた......そう見るのが妥当だろう」
「通信官、指揮所に連絡だ」
れんらく
ガルシアが振り返って命令した。
「討伐隊は血盟陣を発見、 至急映像を送信すると」
だがその声は誰かの悲鳴でかき消された。
「け、血盟陣がっ...!」
まどうじん
とつじょ
まばた
言われずとも、 ウォーデンも後方へ飛びすさった。星形の魔導陣が、突如赤い光を瞬き始める。
その光は驚く間もなく、一気に光量を高めていった。
おどろ
「後退しろ! 危険だ!」
せいせんじょう
聖戦の先でメタライトも警告色を発する。ウォーデンは赤く染まった深林で、あらん限りの声を絞った。
じゃしん
せんとう
せいき
「邪神が近いぞ! 戦闘準備! 戦闘準備!」
クルセイダー サウンド しょうかん
聖騎士が前方に並び、 聖戦官が奇跡の召喚を準備する。 一方で、
通信官は必死に指揮所を呼び出していた。
せつばくかん
「こちらウォーデン隊! 指揮所、応答せよ! 指揮所、 応答せよ!」
だが何度呼び出しても、返事はなかった。
まんえん
けん
はら
切迫感が一同に蔓延する。 ガルシアが剣を払い、ウォーデンが聖戦杖を振り上げた。
ゆうぜん
そしてそれは魔界の門をくぐり、悠然と血盟陣の上に実体化を開始していた。

〈指揮所、応答せよ!〉
〈指揮所、 応答せよ!〉
〈こちらウォーデン隊、 応答せよ!〉
通信機が何度も呼びかける。
だが応答は無かった。
もんぜつ
ほうせん
かなた
指揮所に居た全ての者が、自分の職責を忘れ、呆然と彼方を見つめている。
聖騎士も聖戦官も・・・・・・

ジキータもラエモスも......
ほろば
きょうふ
ライオットも...... ジャスティスも......一台の幌馬車を見つめ、恐怖に声を失っていた。
「が......がが があああああっっ...!」
たんけん
悶絶と共に、フェブレスが荷台から転がり落ちた。
右手で口元を押さえ、左手に短剣を握りしめている。胴体の中央には、深々と短剣が突き刺さっていた。
どうたい
からだ
「フェブレス様!」
かつか
「評議長閣下!」
さけ
どせい
叫んで、聖騎士たちが駆け寄っていく。
のど おく
とけつ
だが、喉の奥からの吐血は止まらない。
手で押さえようとも、フェブレスの指からごぼごぼと血の泡が吹きこぼれてきた。
「......ぎ・・・・・・ぎざまっ......!」
いりょうかん
ちまみ
怒声も、言葉にはならない。
それでも幌馬車に指先を突きつけ、フェブレスは泥の中に突っ失していった。
「医療官、 どこだ!」
たの
「手当を頼む!早く! 呼吸が......!」
せいきし
かた
血塗れの元首を、聖騎士たちが慌てて取り囲む。 ラエモスも駆け寄り、その肩を自ら抱き起こした。
「フェブレス様、お気を確かに!」
しかし老人の目に、もう生気は無かった。 左手から短剣が滑り落ちる。
冷え切っていく身体に、ラエモスの両手も震え始めた。
ふる
「し... 死んだ・・・・・・!」
ジキータは椅子から立ち上がったまま、険しい表情でその声を聞いた。
「なんなのよ、いったい?」
とつぜん
ぼうかん
ライオットも、突然の事態をただ傍観するだけである。
しかしジャスティスは違った。
ほろばしゃ
何かに気付いたように、少年は幌馬車がけ、 一直線に走り出した。 聖騎士の間をすり抜け、素早く荷台の中に飛び込んでいく。
「セシア......!」
むなもと
うずくまる少女は、裂かれた胸元を押さえていた。声もなくただ震え、 ジャスティスの声に顔を上げる。

「ジャス......ティス・・・・・・」
つぶや
消え入りそうな声で、ようやく呟く。
おどろ
そのまま胸に飛び込んできたセシアを、少年は驚きの顔で抱き留めていた。
「セシア、君が……君が刺したのか......?」
その言葉に、ライオットはぎょっとした。後を追って荷台に乗り込んだ戦鎧鬼も、ざっと現場を見渡
してみる。
荒らされた寝台・・・・・・転がる酒瓶・・・・・・明らかに争った跡・・・・・・
かいき
みわた
しんだい
さかびん
あと
むぎん
こぶし
セシアの無惨な姿に、ライオットは拳を握りしめた。
「くそジジイが......!」
するど
「お前がフェブレス様を......!」
とたん
どせい
ラエモスや聖騎士たちも、ようやく幌馬車の中を覗き込んだ。途端に怒声があがる。
「セシア、お前か!」
ばせい
たいこう
「違います!」
そうぼう ひらめ
その罵声に、決然と少年が対抗した。
ジャスティスはセシアを抱いたまま、 聖騎士たちに双眸を閃かせた。
ていこう
「セシアのせいじゃありません! セシアは身を守ろうと抵抗しただけです!」
こわね
鋭い切っ先めいた声音だった。
こうい あと
べき行為の跡だった。
「よく見なさいよ、この短剣・ ・・・」
どうよう
だれ
聖騎士たちも動揺から醒め、幌馬車の中を検分する。
それは誰が見ても明らかな、ライオットは、つま先で遺体を指し示した。
たんけん
しだい
ライオットも荷台から飛び降り、評議長の遺体に歩み寄った。
おど
「これ、自分の短剣でしょ……これでセシアを脅したんだわ......」
その行為に、聖騎士たちも抗議はしない。 彼らの評議長を見る目も、次第に侮蔑に変わっていった。
だが目の前で都市国家の指導者が死んだのだ。 動揺はしばし、一同を沈黙させた。
あた
「とにかく着るものを与えておやり......」
あきら

ようやく進み出たジキータが、諦めたように指示を下した。
「それから遺体の処置を早く... ヴァスランに送り届ける準備をするんだよ」
لــذ ه
仕方ないと諦めたのか、ジキータはもう平静を取り戻している。
　　　その言葉に、聖騎士たちも行動を開始した。
「ジャスティス ジャスティス.........」
かみ
少年は、泣きじゃくるセシアの髪をずっと撫で続けていた。
「心配しないで、 君は悪くない‥‥‥ 君のせいじゃないんだ・・・・・・」
「ジャスティス、私......」
「いいんだ、いいんだよ......」
ジャスティスは、言葉をかけ続ける。
なみだ
ふる
それでもセシアの涙は止まらない。それどころか、震えは強まる一方だった。
くもん
いがい
まえがみ
苦悶した遺骸を見下ろし、ライオットはうっとうしげに前髪を掻き上げた。
「ねえ、 ラエモス・・・・・・」
せんがいき
さわ
そば
戦鎧鬼は、騒がしさを増す遺体の側で評議員に問いかけた。
「セシアはこの後どうなるの?」
かつか
「もちろん裁判です......殺されたのは評議長閣下ですし......」
ラエモスは、まだ混乱する頭を打ち振った。
「正当防衛とはいえ殺人ですからな.........」
「正当防衛で済ませてあげてよ」
念を押すように、ライオットは言い放った。
「いくら評議長を殺したからって、罪が重くなるのだけは許さないわよ」
しょせん
しだい
裁判とはいっても、所詮都市国家規模のものだ。
　　　裏金や事情次第で、好きなように判決が覆ることも多い。
くつがえ
ふくしゅう
評議長が死んだならば、その周囲の人間が裁判で復讐することも大いに考えられた。
「いや、そんなことには......」
ラエモスが視線を遺体に移した。
「いずれにしろ、確かな検分を......」
「そうよね、ちゃんと遺体を調べてさ・・・・・・」
ライオットも今一度、老人を一瞥する。
いちべつ
老人の尾にはセシアの短剣が突き立っている。そして今頃......背筋を凍らせた。
(あの時の短剣だ・・・・・・)
(あの夜に見た‥‥‥光の短剣...)
なぜ今まで気付かなかったのか。
ののし
そう自分を罵りかけた時、 異変が起きた。

ぼくこう
おど
短剣が突如爆光を放ち、周囲に青白い光の帯を躍らせたのだ。
「何事だ!」
はな
「いかん、離れろ!」
どごう
聖騎士たちの怒号が飛び交う。
ふる
と、短剣は自ら震え、フェブレスの遺体から抜け出ていく。 そのまま空中へ飛び上がり、光量を一気に倍増した。
「あ・・・・・・あれは......」
あつけ
やいば
ジャスティスは、空に舞う短剣に呆気に取られた。するとその刃は急速に向きを変え、セシアめがけて宙を横切った。
「ジャスティス、避けて!」
すばや じゅう
けいげき
あしもと
ライオットが素早く銃を抜く。だが迎撃する間もなく、短剣はセシアの足下に突き立った。瞬間、光が変色する。 短剣は呼吸するように、毒々しい赤光を明滅させた。
しゅんかん
たんけん
めいめつ
「これはいったい.........」
うめ
こわ
せんりつ
ジャスティスが呻くと、セシアの表情が強ばった。 少年は少女を見つめ・戦慄した。
「お前さん......」
うす
ジキータも、さすがに血色を薄めた。
クルセイダー
にぎ
せいせんじょう いつせい
いかいしょく
どせい
老婆と少年の······そして周囲の聖戦官たちの握る聖戦杖が一斉に警戒色を点灯したのだ。短剣に魔導が付与されている証だった。
ふ よ
あかし
「セシア、 まさか君は......」
「その娘を捕えるんだ、ジャスティス!」
むすめ とら
たた
少年の言葉をかき消すように、ジキータはけたたましい命令を叩きつけた。
けつめいしや
「セシアは血盟者だよ! かまわないから、引っ立てるんだ!」
せいきし
問答無用の命令だった。一斉に聖騎士たちが動き出す。 しかし少年だけは違った。

「ま、待ってください!」
さけ
聖騎士たちを制し、ジャスティスも叫ぶ。
「これには何か訳があるはずです! 少しだけ待ってください!」
えりくび
だが飛びかかった聖騎士は、二十人を超えている。あっという間に襟首をつかまれた。
やつ
「セシア、お前という奴は」
「貴様、まさかわざとフェブレス様を......」
ごういん
怒声と共に、強引に引き寄せられる。 今度は背中まで服が裂けていった。
「乱暴はやめろ、セシアは!」
「ジャスティス、落ち着いて......!」
せんがいき
こうき
少年と戦鎧鬼の声も交叉する。
どろ
た
だがセシアは聖騎士に包囲され、泥の中に引き倒された。
ラエモスも必死な声で叫び続ける。
「その娘、血盟者だ! 逃がしてはならんぞ!」
むなもと
かく
セシアは、裂けた服で胸元を隠し、聖騎士たちから逃げようと試みた。
だが足が言うことをきかない。 もつれ、転倒した。
てんとう
「セシア! 逃げるんだ! セシア!」
なぜかジャスティスはそう叫ぶ。
こぶし
こて
かみ
なぐ
一人の聖騎士がセシアに拳を振り下ろした。金属製の籠手が亜麻色の髪を殴りつける。
肌が裂け、血がしぶく。 それでも聖騎士たちは、手を緩めなかった。
ゆる
「逃がすな! 斬り殺せ!」
かたき
「フェブレス様の仇だ!討て、討てい!」
にぎ
さと
めいもく
セシアは短剣を握りしめ、悟ったように瞑目した。 観念した表情である。だが......
「待ってください、お願いです!」
もう一度叫び、ジャスティスは少女を抱きしめた。果敢に聖騎士たちを抑え、身を挺して立ちはだかる。
「セシアはそんな娘じゃない! 何か訳があるはずです! それを聞いてあげてください!」
ぜん
クルセイダー
聖騎士たちは唖然とした。
じゃん
見敵必戦。 邪神や血盟者と対すれば、臆せず戦うことを彼らは義務づけられている。

聖戦官ならばなおさらだ。
むざん
「お退きください、 ジャスティス様!」
聖騎士たちは一様に叫ぶ。
だま
しんけん
どうよう
だがジャスティスの目は、真剣にセシアを守っている。思わず全員が動揺した。
こわ
「我らは騙されたのですぞ!」
「なにゆえ、 セシアに味方されるのです!」
「危険です、 早くこちらへ!」
背後で見守るラエモスは、少年が乱心したかと顔を強ばらせた。 そして......
(ジャスティス・・・・・)
ライオットも相棒をじっと見つめていた。
どう考えても、聖騎士たちの言葉が正しい。 それでもジャスティスは退こうとはしない。
何が少年をそうさせるのか考え... ライオットはセシアに視線を移した。
少女は、ジャスティスの後ろで申し訳なさそうに身を固くしている。服は切り裂かれ、無惨なものだ
。
ひとみ
じゃ
みじん
しかし潤んだ瞳に、邪意は微塵もない。
その瞳を斬ろうと言うのだ。 なぜか引っかかるものがあった。
「お願いします........」
せいきし
セシアをかばうように、 ジャスティスは聖騎士たちの前に立ちはだかった。

ふよ
「血盟者なら殺すのは当然ですけど、 こんな小さな女の子なんですよ?
　　それが魔導を付与された武器を使うなんて‥‥‥何か特別な理由があると思いませんか?」
聖騎士たちは、絶句する。 少年は一人一人を正面から見据え、再び問いかけた。
おそ
「理由を聞いてからでも遅くはありません。 少しだけ、時間をもらえませんか?」
こわごわ
ろうば
だが聖騎士たちは、怖々と背後を振り返った。そこには白い老婆が歩み寄っている。
「だからって茶でも飲みながら、話を聞く必要はないよ・・・・・・」
少年の前で初めて、ジキータは殺気のこもった声を絞り出した。
　　ライオットが身構え、ジャスティスも唇を結ぶ。
くちびる
「あたしがヴァスランまで連行して吐かせてやるさ、ちょいと痛い目を見るけどねえ」
「な......なんだって......!」
ほんしょう
えがお

ジャスティスは初めて、この老婆の本性に気が付いていた。目を細めた笑顔のまま、ジキータは聖戦杖を振り上げる。
むすめ けつめいしゃ
クルセイダー
せいせんじょう
「なにがいけないんだい、その娘は血盟者だよ ・煮ようが焼こうが、 あたしら聖戦官の好きにしていいじゃないか・・・」
「教会長、 あなたは......」
ジャスティスが驚愕すると同時に、聖騎士たちも息を呑んで後退していった。教会長の本性を初めて知る者も多いのか...恐怖は瞬く間に伝染していった。
きょうふ またた
でんせん
「そこをどくんだよ、 ジャスティス ......」
「い、嫌です.........!」
こうい
「それは聖戦官の資質に反する行為だよ・・・・・・それでもいいんだね・・・・・・」
ぬす
せんがいき
こし じゅう
ジキータの視線が、ちらりとライオットを盗み見た。戦鎧鬼は、腰の銃を握ったまま老婆を睨み付けている。 ライオットは、抜き撃ちの態勢に入っていた。
にら
ちょうしょう
だがあからさまに嘲笑する。
しなびた手が、 聖印を結んだ。
さけ
察して、ジャスティスがセシアに叫ぶ。
かく
「僕の後ろに隠れて!」
テイク
「第一撃......」
サウンド しょうかん
セシアが少年の背にしがみつく。 ジキータは、セシアめがけて奇跡を召喚した。
ラウンダバ
「迂回衝撃弾...!」
とうとつ
唐突に、青白い電光が空を走る。
タック・サウンド
とうたつ
ジキータの指から放たれた攻撃用奇跡は、瞬時にジャスティスの眼前に到達した。
「速いっ...............!」
きょうふ
サウンド
けたちが
ライオットは思わず恐怖した。
ジャスティスが召喚する同じ奇跡とは、桁違いの速度である。それが急転方向を転じ、セシアの身体を吹き飛ばした。
からだ
「ああああっっ!」
「セシアっ!」
ぜつきょう ともな

きゃしゃ
どろ
とつき
絶叫を伴って、華奢な少女は泥に突っ込んだ。ライオットが咄嗟に名を呼ぶ。
それが教会長のする事なのか。
理由も聞かず、敵はみな殺せばいいのか。
あつとう
ほこ
神に仕え、この世界で圧倒的な力を誇り、人々の希望となるべき人物なのか・・・・・・
よゆう
ライオットに考える余裕はない。
じゅう
考える前に、その手が銃を抜いていた。
「なんてことするんだよ!」
せんがいき きょうき
ばくはつ
戦鎧鬼に狂気が走った。 見境の無い殺意が、 全身にみなぎり爆発する。
同時にジキータの声が響く。
こし
ライオットはためらいもせず、腰から抜いた火薬銃をジキータに突きつけた。
「蒼空撃墜!」
クルセイダー
こうだん
おそ
エイシズ・ハイ
聖戦官が放った光弾が、我先にライオットに襲いかかる。避ける間は無い。次々炸裂し、衝撃が戦鎧鬼を吹き飛ばした。
しょうげき
「があぁっ......!」
ほうこう
かなた
咆哮と共に、ライオットは彼方まで吹き飛ばされた。
くれ
たて
せいせんじょう
直後に、ジャスティスが激発した。
「ライオットに何をするんだ!」
ろうば
そぼう
聖戦杖を捨て、ジキータに飛びかかる。
すばや
くつきょう せいきし
だが老婆は、素早く後方へ飛び退いている。代わりに屈強な聖騎士たちが、群を成して盾となった。
「ジャスティス様、お気を確かに!」
いた
「ご無礼致します!」
けつめいしや
聖騎士は、少年の四肢をつかむ。ジャスティスは歯を剥きだして、苦しげにもがいた。
「セシアの話を聞いてあげてください! あなたは......あなたは...........!」
「手向かうようなら斬るんだよ!」
粗暴な声で、ジキータは聖騎士に命令した。

「どうせよそ者の聖戦官だ! かまやしないよ! さっさとセシアも連れて来るんだ!
なにをぼやぼやしてるんだい!」
ごういん
近づいたジキータは、聖戦杖でジャスティスの頭を強引に突き押した。
やつ
お
「血盟者に味方する奴は、 血盟者と同じだよ! お前さんは聖戦官なんかじゃない! 血盟者だよ!
正真正銘の血盟者だよ!」
しょうめい
どろ
たた
顔が泥にめり込む。杖が後頭部に叩きこまれ、意識が薄れた。
それでもジャスティスは相棒に手を伸ばし、血の味を噛みしめた。
「死んじゃだめだ...死んじゃだめだよ...... ライオット ......」
あせ ぬぐ
ラエモスは、冷や汗を拭った。
ふと周囲を見れば、聖騎士たちがジャスティスに視線を集めている。
聖教徒を守り導く聖戦官が、泥の中で殴打されている。
しかも聖戦官である教会長に・・・・・・
おうだ
こうい
信じがたい行為に、みな畏怖を感じていた。
「なんて......奴よ......!」
サウンド
ジキータの奇跡は、ライオットの電子機能を麻痺させている。それでも、ぼやけた視界に相棒を捉え
、戦鎧鬼は呻き声を上げげた。
とら
せんがいき うめ
「ジャスティス、ごめん...............守れなくて......」
だいじょうぶ
「ほ、僕は......大丈夫......」
ちへど
言いかけて、血反吐にむせる。
なぐ
泥と血にまみれた顔は、殴られて腫れあがっていた。 なんのために自分がいるのか。
くや
くちびる
イオットは悔しさに唇を噛んだ。
さんじょう
なみだ
そしてセシアも、 ジャスティスの惨状を見て涙をこぼしていた。
「ジャスティス 私 私..........!」
「いいんだ............何か理由が・・・・・・あるんだよね......そうでなきゃ君が・・・・・・
君みたいな子が血盟者なんかになるはずない......そんなこと絶対にないんだから.........」
こんきょ
根拠の無い信念に、ジャスティスは笑ったつもりだった。
えがお
みにく
だが天使の笑顔はどこにもない。 ただ赤黒く腫れた顔が醜く引きつるだけだった。
「ジャスティス!」
め

「勝手に動くな! この娘!」
セシアの手を、聖騎士がつかみかけた。
すばや
だが少女は素早く身をかわし、がむしゃらに駆けていく。
「何をしている、捕まえろ!」
ラエモスもそう命じて、走り出した。
のが
「フェブレス議長暗殺犯だぞ! 逃すな!」
せいき
応じて、数人の聖騎士がセシアの後を追う。
とちゅう
かつちゆう
とつぜん
だが逃げる途中で、セシアは白銀の甲冑に正面からぶつかった。
突然目の前に現れた聖騎士に、思わず抱き留められる。
だ
ほか
セシアは、聖騎士の顔を見上げた。 それは他でもない、 セシア自身の親友であった。
あんど
うで
「おお、アレナではないか‥‥‥!」
駆け寄って、ラエモスが安堵した。
アレナはしっかりとセシアを両腕に抱きしめている。
女騎士は金髪をなびかせ、走り寄った評議員に笑いかけた。
けもの
「あら、ラエモス様、どうなさったんです? そんなに走られてえ......?」
ばかもの
「呑気な事を言うな、馬鹿者!」
ひょうひょう たず
どせい
飄々と尋ねるアレナに、 評議員は怒声を飛ばす。
ラエモスは、震える指で胸の中のセシアを指し示した。
「セシアを捕まえるのだ・・・・・・その娘はな・・・・・・た、たった今な・・・・」
「ええ、知ってます」
にこりと、アレナは笑って見せた。
「フェブレス様を殺したんでしょう?」
「そうだ、だから早く・・・・・・」
そして右腕を素早く振り抜いた。
「だってあたしが頼んだんですから......!」
「げえええええっっ!」
だんまつま
とどろ
獣のような断末魔が轟いた。
のどもと
か
ちょうけん
ラエモスは両手で、自分の喉元を掻きむしる。
評議員の首は、アレナの長剣で真一文字に斬り裂かれていた。
「ララエモス・・・・・・」
まいちもんじ
さすがのジキータも声が詰まる。

むなもと
ラエモスは、ごぼごぼと血を吐きながら、その場に崩れ落ちていった。 胸元はどす黒い
血で染まっている。
さいご
いさん
その最期のあがきを見ながら、満足そうにアレナは凄惨な笑みを浮かべてみせた。
「アレナ、 これはいったい!」
むすめ けつめいしや
「その娘は血盟者だぞ!」
さけ
もと
ようしゃ
しつぷう
叫んだ聖騎士も、アレナは一刀の下に斬り捨てた。容赦のない、 疾風の如き撃剣である。
と げきけん
ジキータが奥歯を軋ませ、 聖騎士たちを散開させた。
「どういうことだい、アレナ! まさか......」
「そのまさかよ......」
ろうば
アレナは長剣の切っ先を老婆に突きつけると、なにか晴れ晴れとした声で言い放った。
「全ては、あたしたち二人が仕組んだこと・・・・・・ヴァスランの評議員、それに聖教会の要職
にある者みんな... 殺してやるわ······そのために二年も前から······
聖騎士団に潜り込んだんだかね......」
せいきしだん
もぐ
ぼうぜん
聖騎士はおろか、ジキータまでが言葉を失っている。 その呆然とした顔に、
アレナは高かな哄笑を叩きつけた。
こうしょう たた
ちょうけん
「長かったわ、ここに来るまで...... でもうまくいった......もうあたしたちの勝ちよ!
んたらみんな地獄に叩き落としてやるわ!」
じごく
ちょうかく
ライオットは自分の聴覚を疑った。
そんなはずはない。 アレナがそんな言葉を言うはずがない。何度も自分を疑い、 これは
悪夢だと言い聞かせた。
しかしアレナの声は、もう一度言う。
「今頃、ウォーデンたちもおしまいだわ」
せいが・
とどろ
長剣を正眼に構え、アレナは勝利の言葉を轟かせた。
かたき
「ワルーン村の仇、取らせてもらう!」
げき
げきとつ
アレナが宙に跳び、 聖騎士が群をなして迎撃する。
長剣同士が激突する金属音が宿営地にこだました。
あ
ライオットもジャスティスも加われぬまま、血しぶく戦いが始まっていたのだ。

サウンド しょうかん
げきしん
じゃしん
「奇跡の召喚準備、 邪神が来るぞ!」
さけ
お
ウォーデンが呼ぶと同時に、不可視の波動が地上を呑んだ。木々が倒れ、ワルーン村全体が激震する。悲鳴を上げ、 聖騎士たちが地表に叩きつけられた。
「何かにつかまれっ!」
イズ
ぼくふう
あらが
けつめいじん
魔導の爆風に必死に抗い、ガルシアは血盟陣に視線を定めた。
きょだいか
禁秘文字から飛び出した黒い渦が、調査隊の頭上で巨大化していく。
あしもと
ウォーデンも、足下の地面を踏みしめた。
さら
から
だいじゃ
黒い波動は堂々と、その正体を晒け出す。
絡み合った黒い大蛇の群。
じゅじょう
最初はそう見えた。全長五十メートルにも達する無数の蛇が、のたうちながら樹上に現れたかに思える。
さくらん
すべ
だが大蛇の頭に当たる部分には、錯乱した人間の女の顔がついていた。
もん
その全てが苦悶し、 女声を唱和している。
《イオオオ‥‥‥イオオオ・・・ オオ......)
わななく人頭身は、眼下の聖騎士たちに首を伸ばした。口からはみだしそうな牙の列を見せつけ、一息に噛み殺し、咀嚼する。
か
そしゃく
きょうたん
じゃしん えじき
悲鳴は無い。驚嘆すらできずに、聖騎士たちは次々邪神の餌食となった。
がしゅ・・・・・・ぶじゅるっ......ごがっ.....
くちびる
肉が潰れ、骨が砕ける音が鳴り響く。幾つもの巨大な長首は、唇から血液を垂れ流し、喜悦の声を上げた。
きえつ
サウンド
「後退しろ! 奇跡を召喚!召喚!」
ていこう
どな
サウンド
クルセイダー

だが怒鳴るウォーデンにも奇跡を呼び出す余裕は無い。
三人いたはずの聖戦官も、いつの間にか肉塊と化している。
にっかい
とつき
どな
てった
「逃げるんだ、ウォーデン!」
咄嗟に呼び捨て、ガルシアは怒鳴った。
「こいつは俺たちがかなう邪神じゃない! 無理だ! 撤退するんだ!」
ウォーデンにもそれは分かっていた。
ぜんめつ
抵抗できた者など一人もいない。全滅は時間の問題である。
「私の周りに集まれ、後退する!」
あお
さけ
聖戦官は、間近の邪神を仰いで叫んだ。
ちから あた たま
テイクワン
「御力、与え給え・・ ・第一撃!」
ぎゃくさつ
一方的な虐殺であった。

「ごがああああっっ!」
だんまつま
ひび
わた
宿営地にも、断末魔が響き渡っていた。
けん
つらぬ
がんじょう
かっちゅう すきま
アレナの剣がまた一人、聖騎士の頸部を貫く。
頑丈な甲冑の隙間を衝いて、切っ先は聖騎士の命脈を切断した。
「おのれっ、裏切り者があっ!」
さけ
叫んで、左右から聖騎士が躍りかかった。
せつな
ちょうやく
が、アレナは一瞬早く、身を沈める。 と思った刹那、垂直に跳躍した。
こうげき
とうとつ
左右からの攻撃を眼前で交わす。 聖騎士たちは唐突に目標を失った。 その頭上に急降下
する。身体の両脇で長剣を振り回し、一気に飛び退く。斬り飛ばされた聖騎士の首は、
あっけなく下草に転がった。
「調子に乗りおってえ......!」
くや
まぎ
は、
誰かが悔し紛れに吐き捨てる。

だがその言葉は、負け惜しみでしかない。

お
すでに宿営地には、二十人以上の聖騎士が倒れていた。 正直、 アレナがそこまでの腕前
だとは誰も知らない。聖騎士たちは、もはやじりじりと後退するだけである。
うでまえ
じゃしん
「それも邪神から授かった力かい......?」
クルセイダー ひか
ろうば
代わって、 ジキータが前に出た。
その背後には、数人の聖戦官が控えている。老婆は、女騎士に聖戦 杖を突きつけた。
けつめい
せいせんじょう
「だとすればかなり高位の邪神と血盟を結んだものとみえる・・・・・・」
「あたしは血盟者じゃないわ......」
アレナは、きっぱりと言い切った。
「この剣技は、あたし本来の力 二年間ずっと隠し続けて来たけど・・・・・・あんたらに復讐
ふくしゅうするために腕を磨き続けたのよ......!」
「それで聖戦杖も反応しないはずだよ」
ジキータは、不満そうに口をひん曲げた。
だま
「おかげでみんな騙されたわけだ............」
その声にライオットが立ち上がった。

せんがいき
もうまく
戦鎧鬼の網膜は、未だ機能回復がなされていない。だが倒れている場合でもなかった。幾つものエラーメッセージの向こうに、ライオットはアレナの姿を捕らえた。
「あたしも騙されたわ......」
全身に走る痛みに、顔を歪めた。
「セシアはジャスティスを騙し......あんたはあたしを騙した・・・・・・」
アレナの目から一瞬、 殺気が途絶える。
とだ
「ごめん、あなたには..
らなかったのよ......」
「聞かせてもらうわよ、 その理由・・・・・・」
ちょう
ライオットは、自嘲してそう言った。
いしやりようが
けねん みじん

「せめて慰謝料代わりに、そのくらいお願いしたいわ.........」
これが笑わずにいられようか。
『セシアに気をつけろ」
『セシアこそ一番油断する人物だ」
そう考えていたライオットこそ、アレナに油断していたのだ。
その懸念は微塵も無かった。それゆえの自嘲である。
「僕も......まだ聞いてない......」
不意に、ジャスティスも立ち上がった。
かたん
「僕にも・・・・・・説明してよ、 セシア......どうしてこんなこと...
・こんな恐ろしいことに君は......荷担してるんだ......」
どろ
はな
きみょう ゆが
泥だらけの少年は、遠く離れたセシアに問いかけた。腫れあがった顔が奇妙に歪む。
笑っているつもりなのだ。
せいせんじょう
まなじり
なみだ
聖戦にすがるジャスティスに、思わずセシアの眦から涙がこぼれた。
おそ
「私だってこんなことしたくない! こんな恐ろしいことしたくなかった! ど......!」
「セシアっ!」
さけ
とうし
背後に叫んで、アレナは闘志を取り戻した。
ふくしゅう
もど
「これは正当な復讐なのよ! ワルーン村のこと、忘れたの! あたしたちの村のこと、もう忘れたの!」
せいきし
聖騎士たちは、その名にひるんだ。
きょうめい
二年間ずっと隠してきた・・・・・・アレナの言葉が全員の胸に共鳴する。
得心して、ジキータはすうっと目を細めた。
「お前さんたち ワルーン村の生き残りなのかい......?」
つば
セシアがうなずく。 アレナも視線を戻し、 ジキータに唾を吐き飛ばした。
け
かんせん
みなごろ
「ああ、そうだよ! あんたら聖教会と評議会が束になって皆殺しにした、ワルーン村の
生き残りだよ!」
ライオットは、相棒を見た。
せんがいき
ジャスティスも、戦鎧鬼を見る。
ふんど
二人はその言葉の奥に、底知れぬ憤怒を力強く感じ取っていた。
「そうかい、気の毒にねえ・・・・・・」
大きく息を吐くと、ジキータは同情するように語りかけた。
かたき

「それであたしらを目の敵にしたんだね・・・・・・でも仕方なかったのさ……
村人みなが生物兵器に感染しちまったら......あの時は焼くしかなかったんだよ・・・・・・
」
そうだ、と一人の聖騎士が進み出る。
「私もあの時、焼き討ちに加わった今でもあれは仕方がなかったと思っている............」
同意する声が、聖騎士たちからさざ波のように湧き起こった。
きんぱつ
きょうかん
だがアレナは、金髪を振り乱して叫喚した。
「よく思い出すのよ、みんな!」
こんがん
ひとみ うる
女騎士は、懇願するように瞳を潤ませた。
「あんたたちが殺した村人は本当に病んでたの? 寝込んでる人なんて本当にいたの?
生物兵器なんて回収されたの?」
聖騎士たちが一斉に硬直する。
きょうがく
さけ
おもしろ
そうはく
ライオットは、驚愕する彼らに視線を走らせた。全員、顔を蒼白に変え、二年前の光景そしてアレナの双眸に殺気が灯った。
とも
を思い起こしている。 アレナの言を否定する者は、誰一人いなかった。
そうぼう
おうよう えがお
くちふう
「あれは......口封じだったのよ............!」
にら
ろうば
叫んで女騎士は、ジキータを睨んだ。老婆は、 鷹揚な笑顔のままだ。
むすめ
「面白いことをいう娘だねえ......」
「ごまかさないで・・・・・・あたしは知ってるわ、あの村で何があったかを......」
切っ先を持ち上げつつ、アレナは老婆に接近していく。間合いを確かめ、女騎士はジキータに狙いを定めた。
「あんたら聖教会と評議会が、 あたしたちの村でどんな悪事をしてたか……その悪事を隠すために村を焼いたと知ったら......それを知ったら、誰だってこうするはずよ!」
「やめるのよ、アレナ!」
おそ
だがライオットの言葉は遅かった。
ふくしゅう やいば
ちようやく
いちじん とつぷう
もうそく
復讐の刃を振り上げ、アレナはジキータめがけて跳躍する。 一陣の突風めいた、猛速の剛剣だった。
ごうけん
「いけない、アレナー」
「アレナー」
ジャスティスとセシアが合唱する。
はら

その悲鳴を振り払うように、ジキータも神速、聖印を結んでいた。
エッジ
「烈風壊刃光撃!」
サウンド
ほとばし
一秒の間もなく、奇跡が指先から迸った。
アタック・サウンド
らんぶ
きせき
えが
三日月型の攻撃用奇跡が、 ジキータの聖印から無数に乱舞する。
軌跡は曲線を描き、四方からアレナに襲いかかった。
おそ
「ちいいいいっっ!」
きば
サウンド げいげき
牙を剥き出し、アレナは奇跡を迎撃した。
さい
空中で剣を振るい、最初の一撃を破砕する。
かぐち
つ
着
だが左の死角から飛び込んだ青白い光は、アレナの肩口に突き刺さった。勢い良く肩当てを砕き、そのまま肉にめり込んでいく。 攻撃用奇跡は体内で爆発し、アレナの左腕を強引にもぎ取っていた。
くだ
アタック・サウンド
ばくはつ
うで ごう
「があああああっっ!」
「アレナあああっっ!」
きし
さけ
女騎士の血しぶきを浴び、 ライオットはもう一度叫んだ。
「もうやめるのよ、アレナっ!」
おお
ひざ
セシアも顔を覆って膝をつく。
ぼうぜん
ジャスティスは、呆然と吹き飛んだアレナの左腕を見つめていた。
だが、それで終わりではなかった。
にぎ
かつちゆう おのれ
右手で長剣を握り、アレナはジキータめがけて落下していった。白銀の甲冑が己の血で真っ赤に染まっている。 それでも突入する。 女騎士は、復讐の咆哮を上げ続けた。
とつにゆう
ふくしゅう ほうこう
かたき
「みんなの仇だ!あんたは許さない! あんただけは許さない! 絶対殺す! 絶対に 殺してやるわっ!」
まみ
きゆうはく

きょうふ
ゆが
アタック・サウンド
そ
血塗れの顔が急迫する。
さすがに、ジキータの顔も恐怖に歪んだ。
だが新たな攻撃用奇跡が、群を成してアレナに襲いかかった。
エイシ
「蒼空撃墜!」
クルセイダー
今度は聖戦官たちの番だった。
ひか
いつせい サウンド しようかん
ジキータの背後に控えていた彼らが、一斉に奇跡を召喚する。
そくしやほう
ごと
ごうう
その速射砲の如き電撃の豪雨は、アレナの全身を打ち抜いた。血しぶき、肉が弾ける。女騎士は、力無く地上に落下した。
ぼろ布のようなアレナには、もう指一本動かす力は残っていなかった。
「ア......アレナ・・・・・・」
ぼうぜん
ライオットは、呆然と友を見つめた。
そう、確かにアレナは友達だったのだ。
たった数日のつきあいでできた、かけがえのない友である。
びどう
そのアレナが微動だにしていない。
おく
こら
ライオットは、喉の奥からこみ上げる何かを必死に堪えていた。
「油断するんじゃないよ、とどめをおさし」
ジキータは、聖騎士たちに命令した。
「手間をかけさせたが...... しょせん、あたしの敵じゃなかったよ」
ろうば
かた
せいせんじよう
あせ
だがそう言う老婆は、大きく肩で息をしている。 聖戦杖は、汗で濡れていた。
きょうふ
何かが、ジキータを恐怖させている。
そば
それを確かめるべく、ライオットは友の側へ歩み寄った。
どの
「ライオット殿、何を......?」
だ
呼びかける聖騎士たちを押しのけ、ライオットは女騎士を抱き起こす。
くちびる
血だらけのアレナは、微かな呼吸と言葉を唇から漏れさせた。
「勝てると・・・・・・思ったのよ... あたし......」
「............」
ライオットは、無言だった。

ぬぐ
じゃしん
呻くアレナの顔から血を拭ってやる。 その背後には、セシアも駆け寄ってきた。
やつ
サウンド
たよ
「だって......あんな悪い奴が・・ ・奇跡を使えるんだもん...............あたしは······
魔導を頼るしかなかった..................神様なんて······奇跡なんて信用できなかった......」
サウンド
「どうしてジキータが悪い奴なのよ?」
にぎ
ライオットは、女騎士の手を握ると力を込めて揺さぶった。
「あんたは何を知ってるの? 教会と評議会が何をしたか、なぜあんたが知ってるの?」
「......そ......それは・・・・・・」
たましい
アレナが必死に声を絞ろうとする。だがその魂は、もはや冥界に旅立とうとしていた。
「アレナ、あんたは・・・・・・」
「ライオット殿、とどめを!」
するど さけ
近づく聖騎士が鋭く叫んだ。
「邪神の手先ですぞ! 早く討ち取られよ!」
ジキータたちも歩を進める。
からだ
たた
しかしライオットは、身体中から噴き出た怒りを言葉に叩きつけた。
じゃま
「邪魔しないでよ!」
有無を言わせぬ響きだった。
ひび
だま
「この子はあたしの友達だったのよ! なのにあたしを騙した!
騙した理由を聞くまでは、絶対誰にも殺させないわ!」
「ライオットさん・・・・・・」
あやま
せんがいき
背中で、セシアが泣き崩れる。 すみませんと謝る少女に、戦鎧鬼は力強い視線を送った。
「いいわ、後であなたも...... ジャスティスに謝るのよ......」
と、アレナの呼吸が急にか細くなった。 息づかいが、かすれた笛のように変わってい
「ライ... オット........」
もうそれ以上、声が出ない。
かくご
ライオットは、覚悟して問いかけた。
「あんたが知ってることはセシアも知ってるわね......?」
無言で、小さくアレナがうなずく。 笑って、ライオットもうなずきを返した。
むごん
.....
「分かったわ、理由は全部・・・・・・・・・セシアに聞く.....だからあんたは安心して・・・・
・・死んでいいのよ......」
ほほえ
めいもく

アレナは微笑んで、瞑目した。
だつりょく
全身が脱力し、急速に体温が低下する。
ライオットは友の遺体を、静かに地面に横たえてやった。
「さよなら......アレナ......」
腕をもがれても、敵に喰らいつく戦士など見たことがなかった。それほどまでの憤怒が、無意味に葬られることなど許せない。
ほうむ
ふくしゅうしん
ライオットは、その復讐心をアレナから受け取り、静かにその場に立ち上がった。
「セシア・・・・・・言えるわよね?」
確かめる言葉を口にした。
「アレナがあたしに言えなかったこと......アレナがあたしに言いたかったこと・・・・・・今ここで教えて......」
「ライオットさん・・・・・・」
背後でセシアも立ち上がる。 と、 その二人に小さな少年も歩み寄ってきた。
「僕も...... 聞きたいな......」
せいせんじよう たよ
ジャスティスは、聖戦杖を頼りに歩を進めた。冷たくなったアレナを見下ろし、聖印を結ぶ。そして悲しげに睫を揺らした。
まつげ
A
「なんでこんなことをしたのか......それだけは聞かせてほしい......
でないと僕は......今すぐ君を討たなきゃいけない......」
「ジャスティス.........」
クルセイダー
「だって僕は聖戦官だから......」
せいいん
ふんど
少年はあふれる涙を拭きもせず、セシアに向かって語りかけた。
じゃしん けつめいしや
しゅぎょう
みのが
「子供の頃からずっと邪神や血盟者と戦うために修行を続けてきた・・・・・・見逃すことはできないよ......」
[...................]
だま
「でも君が僕を騙したことだけは... 許せるかも知れない理由を聞かせてくれるな
うそ
..............アレナさんの嘘も許せるかもしれない・ ・・せめてそのチャンスだけは.. 僕に与えてくれないかな......」
みわた
セシアは周囲を見渡した。
あた
何人もの聖騎士が倒れている。そしてフェブレスが、ラエモスが......アレナまでもが命数を終えていた。
じゅうまん
にお
宿営地に、血の匂いが充満している。
全ては二人の責任だった。
だがあの日のワルーン村にも、この匂いが満ちあふれていたのだ。

「私‥‥‥言います...............」
たんけん
にぎ
セシアは短剣を握りしめ、 そう決心した。
「許してもらおうなんて思わないけどジャスティス・・・・・・あなたとライオットさんには聞いて
ほしい‥‥‥わたしたちがどうして、こんなことをしてしまったのか...」
いく
だま
聖騎士たちも息をつぐみ、耳をそばだてる。
セシアは少年に、告白を始めかけた。
「私たちの村には実は......」
「セシア、危ないっ!」
スト ムブリンガー
「暴風神撃召喚!」
ぜつきょう
幾つもの絶叫が重なった。
せいいん
まずライオットが、ジキータの聖印に気がついた。教会長はいつの間にか、意識を集中サウンド
せいせんじょう しょうかん
奇跡を聖戦杖に召喚していたのだ。
こむすめ
「黙るんだよ、小娘があっ!」
いつせん
まく
サウンド
たつまき
ジキータはセシアめがけ、 聖戦杖を一閃する。 起爆した奇跡は、たちまち一条の竜巻と
化し、少女に急接近していった。
「ああああっっ!」
つちくれ
ちぎれた無数の草が、土塊と共に舞い上がる。 ひるんだセシアに避ける間などない。思
ちぎれた無数の草が、土塊と共に舞い上がる。ひるんだセシアに避ける間などない。思わずジ
ャスティスは、少女に手を伸ばした。
「セシアっ!」
アタック・サウンド
はじ
からだ
だが攻撃用奇跡は、容赦なくセシアのか細い身体を吹き飛ばす。
絶叫するセシアは、方へ弾き飛ばされた。
「ぐっ........」
たた
少女の身体が何度もバウンドする。
地面に叩きつけられたセシアの口から、低い呻きが漏れ聞こえた。 そして微動だにしない。
せんがいき
瞬間、戦鎧鬼は憤怒を爆発させた。
「殺してやるわ!」
「させるものかい!」
けんじゅう
はら
しきんきょ
たが

ライオットが拳銃を抜き払い、ジキータは聖戦杖を突きつける。二人は至近距離で、お互いの武器の狙いを定めた。
ねら
「させるものかい ...言わせるものかい......こんなところで...部下たちの前で言わせるものかい......!」
ジキータは、嘘を飛ばしてえ立てた。
けんまく
せいき
クルセイダー
その剣幕に、聖騎士たちは大きく後退していく。彼らももはや、教会長がただの聖戦官でないことに気がついていた。
やつ
「あんたって奴は......!」
「何とでもお言い......」
かがや
うめ
ごういん
ジキータは聖戦杖を輝かせ、ライオットの呻きを強引に制した。
「世の中にはね、知っちゃならないことがあるんだよ...............聞かない方がいい話があるのさ・・・・・・それをこの娘はべらべらと・・・・・・」
ライオットは引き金に指をかけた。
サウンド しょうかん
みけん
たとえ間近で奇跡を召喚されても、ジキータの眉間に一発ぶち込める。それより何より、この老婆を殺さねば気がすまないのだ。
ろうば
かくご
そん
相打ち覚悟で、 戦鎧鬼は狙点を決定した。
だが一瞬、視線を外す。
彼女の後ろでは、倒れたセシアをジャスティスが抱き起こしていた。
「セシア! しっかりして、 セシア!」
「ジャス......ティス・・・・・・」
しょうげき うめ
ヒーリング・サウンド
ふる
にぎ
衝撃に呻くセシアは、震える手を空に伸ばす。 その指先を握りしめ、ジャスティスは治癒奇跡を召喚した。
イン・ザ・ライト
「神聖光癒陣・・・・・・」
少年の手から暖かい光があふれ出し、たなびく帯となってセシアの傷口に流れ込んだ。
瞬間、 セシアの手がぴくりと動く。
「ジャスティス ...... 私......」
よみがえ
消えかけた命が再び蘇るのを感じ、 セシアは少年に抱きついた。
すると
が、ジャスティスは鋭く視線を転じた。
「そこまでして隠したいんですね......」
せいせんじょう
セシアを背にかばい、少年は聖戦杖を手に立ち上がった。

おか
「それほどまでの悪事を、二年前にあなた方は犯した......そして今、告発せんとした者までもみ消そうとしている......」
[.................]
ろうば
しょせん
「僕は、絶対にセシアに語ってもらいますそしてここにいる聖騎士たちにも知ってもらいます......あなた方の悪事全て・・・・・・」
しぼ
ジキータは、ようやく一言絞り出した。
「......できるものかい......」
いま
ねら
老婆は未だ、セシアに狙いをつけている。
アタック・サウンド
「あたしは攻撃奇跡を······まだ撃てるんだよ。お前さんの治癒には限度があるだろう?所詮、聖戦官としての力の差なんだよ・・・・・・あたしが勝つ......」
クルセイダー
「その前に語ってもらいます···いや、僕が語らせる......」
くちびる
ジャスティスは、整息して唇を結んだ。
・トウ
静かに第二撃を宣言する。
ドリーム・イーヴル
「悪夢撃退方陣・・・・・ J
いんうつ しつち ばくだい
さくれつ
陰鬱な湿地に莫大な聖光が炸裂した。
おそ
聖騎士たちが、 そしてセシアが目を伏せる。
戦鎧鬼も、光量に思わずたじろいだ。
さと
ジキータだけが少年の意図を悟っていた。慌てて一撃を加えようとする。
だが遅い。 告発の時は始まっていた......

とつぜん
あさらや
突然、周囲の景色が激変した。
朝靄の宿営地は、もうどこにもない。それどころか、ジャスティスたちの姿も見えな い。
周囲に忽然と日本が群れ伸び、蔓草が足下に這いずり回る。ひたすら暗いだけの森に、ライオットは一人であった。
「ジャスティス!」
ぶきみ
うごめ
きかん
さと
木々は、強風にあおられ不気味に蠢いている。いつか来たことがある。そんな既視感を感じた時、鼻孔に強い臭気が突き刺さった。
びこう
(焦げ臭い......?)
とたん

悟った途端、景色が動いた。
+さ
周囲の巨木が凄まじい速度で後ろへ流れていく。 ライオットは一歩も動いてはいない。
しつそう
せんがいき
たた
だがあたかも森林を全力で疾走しているかのように、風が戦鎧鬼の頬を打ち叩いた。
(村......?)
ほのお とも
くらやみ
視線の先に、赤々と巨大な炎が灯っている。暗闇に浮かんだその炎は、幾つもの家屋を包み、その集
落を呑み込んでいた。
そして気付いた。
(ワルーン村...!)
じゃしん
(この森は邪神に襲われた......)
(じゃあこの光景はセシアの記憶......)
きおく
ライオットの視線は、一気に村の中に連れ込まれていた。
ごうか
辺り一面の業火は、その村を完全に焼き尽くそうともがいている。
飛び散る火の粉の熱すら、ライオットには感じられた。
だがそんな熱など気にはならなかった。
まど
ライオットの目の前では、逃げ惑う村人たちが一団の襲撃者たちに斬り殺され、次々に炎の中へ投げ
込まれていた。
ろうにやくなんによ
老若男女の別はない。逃げ、助けを求める者にも構わず刃がふるわれ、
ライオットの足下にはどす黒い血だまりができていた。
「やめろ! やめるのよ!」
さけ
にんぶ
ライオットの声は届かない。
それでも叫ばずにはいられない。戦鎧鬼の目の前では妊婦が斬られ、老人が射殺されているの
だ。 咆哮は止められなかった。
ほうこう
「なんでこんなことするのよ! あんたらなんなのよ! 何様のつもりなのよ!」
ぼうえき
襲撃者は、数十人にも達するだろう。いずれも闇にまぎれ、
防疫マスクで顔を隠している。だが身につけた甲冑には覚えがあった。
かつちゆう
とうとつ きょうかん
その一人が、ライオットの方を指さして唐突に叫喚を放った。
ようしゃ
「そこにもいるぞ! 子供でも容赦はするな!」
うぼう
ライオットは、その声の主に眼光をぶつけた。視線が激突する。恰悧な双が、ライ
オットを睨み付けた。
にら
「ガルシア、あんた......!」
ちょうけん

聖騎士団長が、上段から長剣を振り下ろす。
けいどうみゃく にぎ つぶ
ライオットは一刀を避けようとした。 同時に手を伸ばし、頸動脈を握り潰そうと試み る。
すべ
だが全てはそこで終わった。
とぜつ
くらやみ
ほのお
女の悲鳴と共に映像は途絶し、一面の暗闇が辺りを支配した。 村も炎も消えている。
何もかも、この一瞬に終わったのだ。

「これは......」
ふる
ウォーデンは、歯を震わせた。
ガルシアは、言葉を失っている。
ひか
せいきし
その背後に控える何人かの聖騎士たちも、燃えさかるワルーン村の中にいた。
あとち
サウンド
だっしゅつ
たった今、ワルーン村跡地から、転送用奇跡を用いて脱出したばかりである。彼らは宿営地にたどりついたはずだった。
あがきょうかん
うず
だが周囲は阿鼻叫喚の渦である。
きおく
ガルシアにとって、 聖騎士たちにとって、それは自らの手で行った過去の記憶だった。
「呪いなんだ!」
ぜつきょう
一人の聖騎士が耐えきれずに絶叫した。
「これは俺たちへの呪いなんだ! あの時の怨念が俺たちを呼んでるんだ! 俺たちは呪われてるんだ!」
「馬鹿を言うな!」
どな
ガルシアは怒鳴って、その騎士の頬を殴る。
ほお なぐ
ぎやくさつ
しかし彼らの目の前では、いつまでも虐殺が続いていた。
「ウォーデン様、 これはいったいどういうことです!」
ガルシアは、呆然と立ち尽くす聖戦官を強く揺さぶった。
もと
「俺たちは帰って来たんじゃないんですか! ジキータ様の下へ、帰って来たんじゃないんですか!」
しかしウォーデンは応じない。
くちびる
せいき
それどころか、ぶつぶつと唇の間で同じ言葉を繰り返している。
聖騎士は、その文言に背筋を凍らせた。
こお
「呪いだ・・・・・・やはり呪いなんだ・・・・・・」
「ウォーデン......」

ガルシアは、今初めてこの男を理解した。
クルセイダー
あっぱく
ぎやくさつ
じゃ
聖戦官を圧迫していたのは、作戦の重責だけではなかったのだ。
過去に虐殺した村に邪神がいる............そう知ったウォーデンは、自分の行為を罪と認めてしまったのだ。
あれはやはり正義ではない...
殺すべきではなかった......裁かれるべきは自分なのだ......たとえ相手が邪神でも······
くる
その自責の念が、ウォーデンを苦しめたのだ。 そして今ここで、狂わせてもいる。
「ウォーデン、お前......」
名を呼び、ガルシアも我に返った。
きょうこう
ウォーデンの恐慌につきあう気などない。
どせい
たた
むな
ガルシアは聖戦官の胸ぐらをつかみ、剥き出しの怒声を面前に叩きつけた。
「おい! 答えるんだよ、 ウォーデン!」
しょうそう
きょう ふ
ほんしょう あら
焦燥と恐怖が、 聖騎士の本性を露わにする。
「俺が呼んでるんだ! 答えろ!」
おうだ
こぶし にぎ
勢い、打しようかと拳を握る。
りつぜん
だがガルシアは、慄然とした。
土気色の顔をゆっくり振り向け、ウォーデンが口を開いたのだ。
「私こそ訊きたいよ、ガルシア ......」
「な......なにを......」
こうちよく
燃えさかる村を背景に、 ウォーデンの顔は仮面のように硬直している。そしてふと......
ほほえ
聖戦官は微笑んでみせた。
「これはいったいどういうことだ......?」
「それはこっちが......!」
「あの時、私は村の外にいた......」
ウォーデンは、聖騎士の言葉も聞かず、 二年前に思いを馳せていた。
と
「村の外で指揮を執れ......そう、ジキータ様から厳命されていた...・・・だから今初めて知ったのだ......」
クルセイダー
ゆうぜん
なが
聖戦官は、周囲を悠然と眺め始めた。
ほふ
いのちご

ガルシア率いる聖騎士たちが、次々村人を屠っていく。逃げる者も許さず、命乞いする
者すら斬って捨てた。
そして再び、 ウォーデンは問いかける。
かんせん
「どこに病人がいる.........どこに・・・・・・生物兵器に感染した者がいる・・・・ア......私に
教えてくれ・・・・・・」
村人は逃げ、び、抵抗している。
仕方なく殺されるような者は、どこにもいない。 ガルシアは思わず口ごもった。
「そ、それは・・・・・・」
「お前が答えるんだ、ガルシア!」
らいめい ごと ふんげ
雷鳴の如き憤激だった。
せいせんじょう
ウォーデンはガルシアを突き飛ばし、聖戦杖を突きつけた。
えてくれ、ガルシ
かけら
「これのどこが病人の村だ! なぜ殺されねばならぬ! 私が信じてきた正義など、
欠片もないではないか! 答えるのだ、ガルシア! 今ここで答えてみろ!」
くる
狂った者の声ではなかった。
もど
ウォーデンは意識を取り戻し、自責の念に正面から立ち向かっていた。
だま
たみ
「誰が私を騙したのだ······いや.. 誰がヴァスランの民を騙したのだ······答えろ、ガルシア...
答えてみろ!」

ぜつきょう
とつぜん
せいきし
絶叫は、聖騎士たちの胸にも突き刺さる。
むくろ
たきざ
ワルーン村の中央には、人間の骸が、薪のように積み重ねられていった。
ごうか びしょう
二年前のガルシアが、その業火に微笑する。
二年前のラエモスも、任務の成果に満足していた。
ばち
突然、ウォーデンは捨て鉢に笑った。
のろ
「なるほど、確かに呪いだよ・・・...」
おど くる
火の粉が背後で踊り狂う。

その様を見ながら、ウォーデンは断言した。
いんぺい
へいおん
「これほどの悪事を隠蔽して... 平穏に暮らせるわけがない
・・呪いだ・・・・・・我々は呪いを受けて当然の······罪人なのだ・・・・・・」
こうしょう
ひび
高らかに、ウォーデンは哄笑を響かせた。
それは燃えさかるワルーン村の夜空に、いつまでも響き続けていた。

【第五章 ヨブ・ゾラーン/決着】

「私の家族と......アレナの家族です......」
なみだ
こら
炎の向こうに立ちすくみ、セシアは涙を堪えて告白した。
おうねつ
かか
「あの日、私たちはそろってジル黄熱に罹っていました。
それはギアナの子供なら誰でも罹る............本当の流行病です」
はやりやまい
セシアは自分の記憶を見つめ続ける。
かくりごや
ふしん
「森の隔離小屋にいた私たちは、あの晩、
食事が届かないのを不審に思いました・・・・・・そし比較的回復していた私が・・・・・・
村に戻ってみたんです」
もど
「そして今の光景を見た......」
ぎょうし
くちびる
ライオットも炎を凝視し、唇を噛んだ。
「村でガルシアに斬られ、炎の中に投げ込まれた。 生きながらそのまま......」
「丸一日、あのままでした・・・・・・」
きょうふ
ふる
かた
セシアは過去の恐怖に震え、 その場に崩れかけた。その肩をしっかと、 ジャスティスが
抱き留める。
「でもアレナが助けてくれたんだね?」
だれ
しんさん
二年間の辛酸を思い出しているのか。 セシアはジャスティスの腕の中で、わななきながら瞑目した。
けん
めいもく
ふくしゅう
「アレナは言いました・・・・復讐しようって...
私たちの家族を殺した者を許さないって言いました・・・・・・」
おせん
するど

「けど、ワルーン村は生物兵器に汚染されたと聞かされた・・・・・・」
ライオットは、鋭い視線を別方向に向けた。
せいきし
せんがいき
炎の向こうにはジキータがいる。
聖騎士たちがいる。その一団に、戦鎧鬼は真っ直ぐ指先を突きつけた。
じゃしん
あきら
せんぶく
「話の出所がこいつらだと知ったあんたたちは・・・あえて聖教会に潜伏したのね」
「もともとアレナは、 聖騎士志望でした」
うつた
亡き友の遺志を、セシアは強く訴えた。
「剣をお父さんに習い、絶対聖騎士になってやるって言ってました。
でも私たちの村を焼いたのが聖騎士だと知った途端・・・・・・」
とたん
「邪神と手を結んだんだね・・・・・・」
かくにん
諦めた声で、ジキータは確認した。
りん
セシアはうなずき、 凛として教会長に向き直った。
サウンド
「アレナは言ってました...私たちの敵は奇跡を使う.....なら神様にすがっても仕方ない...
邪神にすがろう......それで復讐がかなうならかまわないって・・・・・・」
ほのお
かわいそう
ライオットは、アレナの最期を思い起こした。 勝てると思った・・・・・・あの言葉が今は悔やまれる。もっと早く出会っていれば、止められたかもしれないのに......
ちゅうすう
「アレナは必死でした・・・・・・真相を知るために騎士団の中枢に入ろうとし...本当に聖騎士として努力しました...私も情報を手に入れようとがんばりましたが・・・ アレナほど復讐に気乗りはしなかった......」
風が吹きすぎていった。
やみ
炎が消え、闇が去っていく。
サウンド
セシアの過去を映し出したジャスティスの奇跡は、ようやくその効力を失った。
一同は改めて、宿営地の草原に相乗っていた。
あいつど
「ま、その先はあたしが話そうかね......」
ひび
にゅう
やおら、老婆が声を響かせる。諦めたのか、ジキータは柔和な声量で話し始めた。
「可哀想なことをしたよ......けどあたしらのため、あの村の者には一人残らず死んでもらわなくちゃあ、いけなかったんだよ......」
ふんど
ライオットは憤怒を解き放った。
「村人が一人残らず死ななきゃいけない理由なんて、あるわけないわ!」
「それがあったのさ・・・・・・」
ジキータの声は、深いため息を吐いた。
こかつ

まやくせいせいこうじょう
「あの村には工場があってね...
おおっぴらにできない、秘密の麻薬精製工場がね......いい工場だったよ。
月に二十トンもアッパー系の幻覚剤を生産してくれてね・・・・・・」
げんかくさい
老婆は懐かしむように言葉を続けた。
ぼくだい
おろ
けいえいじん
「どこの地下組織に卸しても、莫大な利益になったよ。おかげで経営陣は、十年間、何不自由ない生活が送れたものさ」
「その経営陣ってのは......」
「あたしとフェブレス・・・・・・いや、聖教会と評議会と言った方が早いねぇ......」
おそ
ライオットの問いに、恐ろしい答えを平然とジキータは語った。
「それも仕方なかったのさ。この辺の資源は天然ガスぐらいでね。それもこの先三十年で枯渇するのが分かってたのさ。だから代替収入源が必要だったんだよ」
だいたい
ジャスティスの顔がはっきり青ざめた。
「だからって幻覚剤を......!」
フロンティア
いんうつ しつちたい
「売っていけないって法は無いんだよ、新大陸じゃね。
それにこの陰鬱な湿地帯だよ、時には何かにすがってハイになりたい時もあるのさ。あたしたちは、密かにその手伝い をしただけさ」
ひそ
せいせんじょう かた
ジャスティスが聖戦杖を堅く握る。
せいき
どうこく
セシアはうつむき、聖騎士たちは慟哭した。
きべん
おほ
ライオットは、詭弁に胸を悪くした。幻覚剤に溺れることは、結局自らの死を早めるだ けなのだ。
そして幻覚剤欲しさに他人を殺害し金品を奪うことも多いはずだ。
せんがいき
戦鎧鬼は、軽蔑の視線で老婆を見た。
「けどあんたら、その工場を.....」
「そうさ、店じまいすることにしたんだよ。ばれそうになったんでね」
「いったい誰に............」
「十二教皇にさ」
悔しげに、ジキータは舌打ちした。
ばば
クルセイダー
やつ
にら
「いくらこの婆が経験豊かな聖戦官でもね、奴らは別だよ。奴らに睨まれてるのに、そのままヤバい商売を続けるほど、あたしも馬鹿じゃあない。だから査察部隊が来る前に、全
を消しちまおうと思ったのさ」
「なんてことを......!」

ジャスティスが絶句する。 もはやジキータに、罪を隠蔽する気はない。
　　その開き直りが、一同を唖然とさせ、憤慨させていた。
あぜん
げきど
ライオットの全身から、激怒が蒸気のように噴き出してきた。
「あんた本当に勝手なババアね! 領民は、あんたらのために生きてるんじゃないのよ!」
まやく
「馬鹿だねえ、お前さんは。 領民を生かしてやってるのは、あたしらなんだよ」
あざけ
こうしょう
ひび
激怒を嘲り、ジキータは哄笑を響かせた。
「麻薬工場の金は、国家収入の四割にも達してたんだよ。
　　このヴァスランは、麻薬でもってたようなもんさ。みんな、麻薬の金で生きてたんだ。
　　感謝してほしいくらいだよ」
ジキータは何度も笑いを引きつらせた。
「そろそろ別の場所に新たな工場を建てようかと計画してたとこだったんだよ。そうしな
　　いと、この国が立ちゆかないからねえ......」
ران
「なんて酷いことを......」
ジャスティスが、顔を歪めていた。
「民衆のためとはいえ......!」
「他の手段を選べるほど、
　　新大陸は恵まれちゃいないんだよ。ジャスティス、お前さんだって、ただの巡礼じゃあないん
　　だ··········· この世界がどんなもんか、分かっているだ ろ?」
じゅんれい
いくた せいさん
こお
その問いにジャスティスは凍り付いた。
ていこう まつさつ
幾多の凄惨な経験が、少年の抵抗を抹殺する。
ほこ
得心したジキータは、勝ち誇った笑みをちらつかせた。
「それとも何十万人も餓死した方が良かったかねえ?」
「..............」
けつめいしやたいじ
じゃま
「何も言えないなら、そこをおどき・・・・・・血盟者退治の邪魔なんだよ・・・・・・」
せいせんじょう にぎ
聖戦杖を握るジキータの手に、新たな力が加わった。
だがライオットが......
ライオット一人だけが、ジキータの言葉に正面から立ちはだかった。
　　不敵な笑みすら浮かべ、戦鎧鬼は老婆をあからさまに侮辱する。
せんがいき
ぶじょく
ざせい
「なにが自己犠牲よ、笑わせるわ......」
「機械女、お前さん・・・・・・」
ひきょう
えら
かげん

こむすめ だま
「あんたら卑怯なお偉いさんの言い訳は、いい加減聞き飽きてんのよ」
あざけ
にら
ジキータの言を制し、ライオットは嘲りの視線で睨み付けた。
「自分が正しいと思うなら、包み隠さず、真実をさらけ出せば?
それができないから、セシアを殺そうとしたんじゃない。結局、あんたは自分の身がかわいいのよ」
「小娘、黙るんだよ......」
たいざ
「民衆のためだとか、大義のためだとか・・・・・・そんなこと言う奴に限って、自分だけは無傷でいるもんよ。自己犠牲? 冗談でしょ? あんたの心にどんな傷があるって言うのよ!
あんたがどんな犠牲を払ったって言うのよ!
ライオットの怒声が、草原を揺るがした。
ふる
せんとう
せいきし
一歩も退かぬ決心が、ジャスティスとセシアを背に奮い立つ。
せいいん
ジキータはわななきながら、 聖印を結んだ。
いつしょ
「邪魔するならお前さんもジャスティスも一緒に死んでもらうよ......」
「させないさ、ジキータ......」
けんじゅう
戦鎧鬼は、拳銃を今一度持ち上げた。
つみ さぼ
「セシアの罪を裁く前に、あんたを裁く。 裁くのがあたしじゃ不満だろうけどね」
戦闘機能は未回復だ。 なお戦えるか、自信も無い。 それでも銃を握る。 意地であった。
「誰かこの機械女をやるんだよ......」
ジキータは、ライオットと睨み合いながら周囲に命令した。
「誰でもいい······
お前たちはもうワルーン村の者を何人も殺したじゃないか・・・・・・今ここでそれが一人増えたって... 創世神様は許してくださるよ......」
どうよう まんえん
聖騎士たちに動揺が蔓延した。
ジキータに悪しき面があったとしても、彼らに逆らえる力はなかった。ならば従う他ない。だがセシアを斬るのは......
誰もがためらった直後のことだった。
とつぷう
突風が、宿営地を駆け抜けた。
うごめ
とも
られつ
草原が蠢き、一同の中心にぼんやりと聖光が灯る。それは古代神聖文字の羅列と化し、瞬く間に円形陣に姿を変えた。
えんけいじん
またた
「ウォーデン!」
誰もが叫び、言葉を失った。
クルセイダー
かつちゆう

現れた聖戦官は、周囲にガルシアと数人の聖騎士を従えている。いずれの甲冑も返り血に染まり、全員の顔が恐怖に引きつっていた。
きょうふ
かなた
「なにがあったんだい、他の者は・・・・・・」
「みな死にましたよ、ジキータ様!」
教会長を遮り、ガルシアが神聖陣から足を踏み出した。聖騎士は苛立った顔で、湿地の彼方を指さした。
まがまが
じゃしん
「ワルーン村には、とんでもねえ邪神がいましたよ! 今こっちに......」
全員の視線が、ガルシアの指先を追った。
たつまき
いく
灰色の空の下に、幾つもの森が重なり合って続いている。その森の一つから......
のぼ
黒い竜巻が空に立ち昇っていた。
どとう
しだい
禍々しい怒濤は大きさを増し、次第に宿営地に接近してくる。
そして湿地を揺るがす、忌まわしい声が辺りに響いた。
ひび
《イオオオ······イオオオ······オオ······》
《イオオオ······イオオオ······オオ······》
《イア・・・ヨブ・ゾラーン・・・・・・》
《イア、イア... ヨブ・ゾラーン・・・・・・》
あお
ライオットは、上空を仰ぎ見た。
おそ
ふく
うず
しつこく
竜巻は恐ろしい勢いで膨れ上がり、渦を巻いて接近している。 と、
漆黒の竜巻は、うなりを上げて四方へ伸びた。 暗黒の奔流が、 その正体を現したのだ。
《イアヨブ・ゾラーン・・・・・・》
《イア、イアヨブ・ゾラーン・・・・・・》
きょうほん
地鳴りのような呻き声に、幌馬車のログタ馬たちが泡を噴いて狂奔した。
きょだい じんとうじゃしん
きせい
絡み合う巨大な人頭蛇身。それが奇声を発しながら、一気に宿営地に降下したのだ。
じょうだん
ブエル・クラス
「放出魔導線量......五百二十I 冗談でしょ、 邪神侯級じゃない!」
めった
ライオットは、背中の大剣を抜き払った。
ブエル
じゃしん
邪神侯とは、邪神全十二階位の中でも第七位に位置するものを言う。
中位の邪神ではあるが、滅多に人界に姿を現す存在ではない。
「ヨブ・ゾラーン・・・・・・」

セシアは、ジャスティスの胸でおののいた。
けつめ
「邪神ヨブ・ゾラーン・・・・・・アレナが血盟を結ぼうとした……邪神です!」
ほうこう
けたたましい咆哮が重なった。
人頭蛇身は地面にめりこみ、幌馬車を砕き、天幕を吹き飛ばした。
もうそく
そして地上に転がる無数の死体めがけ、猛速で喰らい付いていった。
「アレナあっっ!」
セシアは、もういない親友の名を呼んだ。
きょうほん
じゃしん
狂奔した邪神ヨブ・ゾラーンの首が、アレナの死体を地上からむしり取る。
ばきばきと骨格を砕く音を響かせ、 邪神は死体を乱暴に咀嚼した。
ひび
そしゃく
「下がるんだ、セシア!」
ちようやく
ジャスティスは少女を抱えて、跳躍する。
おお
宿営地を覆った邪神は、次々死体を喰らっていく。アレナだけではない。
フェブレスも、ラエモスも、聖騎士たちも……みなその喉の奥に呑み下されていった。
せいき
のど おく
その姿に、ライオットは絶句した。
「こいつは!」
たび
また
からだ
よう みちだ
死体を喰らう度、 邪神の周囲に電光が瞬き、その身体が奇妙に身悶えする。
と、次の瞬間には人頭蛇身が増えているのだ。
じんとうじゃしん
「あれはまだ完全体じゃない!」
どな
クルセイダー
聖騎士に守られて後退し、 ジキータは怒鳴るようにそう告げた。
じんけい
「今のうちに片づけるんだ! さっさと陣形を組むんだよ!」
けんにん ふばつ
その声でヴァスラン聖騎士団は、堅忍不抜の円形陣を組んだ。
前列に聖騎士が並び、方に聖戦官が待機する。
だがウォーデンは、引きつった顔で部下たちに叫んだ。
「だめだ、逃げろ!」
両手を上げて、口から泡を飛ばす。
「我らのかなう相手ではない!各自馬に乗って、ここから逃げるんだ!」
言われるまでもなく、逃げ出す聖騎士もいる。
ウォーデンと共にワルーン村から逃げ帰った者たちだ。
当然である。ようやく逃げおおせたと思ったのに、もう追撃されている。恐慌に陥っても不思議ではなかった。
ついげき

「た、助けてくれえっ!」
聖騎士とも思えぬ悲鳴だった。
いつせい
かいおん
と同時に、一斉に破裂音が鳴り響く。
はれつ
人間の頭蓋が破裂する音だ。
とうちょう
逃げる聖騎士たちの頭頂が真っ二つに裂け、噴水じみた血潮がぶちまかれる。顔面がひび割れ、眼球が吹っ飛んだ。
ひざ
あおむ
た
頭蓋を失った聖騎士たちは、がくりと膝を付き、また仰向けに倒れ絶命していった。
「なんて......」
ライオットも言葉が出ない。
さつりく
いつきとうせん じゃしんたいじ
せいきし
わずか十数秒の殺戮だった。 しかも一騎当千 邪神退治専門の聖騎士たちが、である。
のうずい
ふじょう
のうしょう
そしてその割れた頭蓋から、血をしたたらせて脳髄が浮上した。不気味な脳漿は、赤い魔導の光に包まれている。
くだ
せん
その脳髄に、邪神は急いでかぶりつき、さもうまそうに噛み砕いていった。四散する鮮血に、ジキータすら青ざめている。
・ジェリコ
「隠棲攻性防壁!」
残った聖戦官たちが唱和した。
しきさい
ともな
夕空めいた色彩の防御用奇跡が、瞬時に空中に展開する。火を伴う奇跡の障壁にぶつかり、邪神は悲鳴をがなり立てた。
ディストーション
かか
とっしん
けいぞく
もうぜん
つ
「各自、奇跡増幅をかけるんだよ! 一歩も退くんじゃない!」
聖印を掲げ、ジキータが悲痛に喚く。
しかし邪神は突進を継続した。 猛然と突っ込み、前列の聖騎士の頭を牙に捕らえる。血と脳漿がぶちまけられた。 続けざまにもう一人、大地へ叩きつけられる。
きば
IT
「ふざけおってっ!」
どな
せいせんじょう

とも
はちん
いく
ジキータは怒鳴って、聖戦杖の先に聖光を灯した。
光輪が波紋のように幾つも広がり、周囲の大気を震わせた。
マーチ・オ ・ザ・ブラック・クイーン
「闇黒女王轟進撃!」
えいしょう
きぼく
ほうだい
またた
詠唱の瞬間、ジキータの頭上に暗黒が起爆した。
集積した膨大な奇跡の力が、瞬きする間に膨張し破裂する。爆風と衝撃は、周囲の者たちをも呑み込んでいた。
ほうちょう はれつ
しょうげき
「なんて......!」
きょうがく
た
かか
ライオットは驚愕して、爆風に耐えた。ジャスティスもセシアを抱えて地に伏せる。
サウンド
ひしよう
きょだい
ごうせい
現出した奇跡は、人型となって宿営地の上空に飛翔する。 邪神に負けぬ巨大さ。
かき
《イーヴライイイイー!》
何の言葉なのか。
ぜつきょう
よう
耽美な衣装をまとった女性が、 金切り声と共に両手を振りかざした。
絶叫の瞬間、女王の全身からプラズマの奔流が幾つも噴き出した。疾走する電光は、邪神ヨブ・ゾラーンを打ち、焼き、叩き潰した。
《ゼム! ゼリー》
さ汁
《アエアアアー! アエアアアー!》
しげきしゅう
ジャスティスは、強い刺激臭に口元を覆った。 邪神の肉体が焼け焦げているのだ。
のたうち叫ぶ邪神の姿に、辺りから一斉に歓声が上がった。
いつせい かんせい
ほんりゅう
しつそう
あきら
「諦めるな! ジキータ様が勝つぞ!」
みみざわ
プラズマに食いちぎられた邪神の首が、 何本も地上に落下する。
耳障りな邪神の悲鳴に、聖騎士団が突進していった。
せいきしだん とっしん
だがいったん邪神をくい止めると、ジキータは決死の形相をセシアに振り向けた。
ようしゃ

[むすめ
「ガルシア、 その娘を殺すんだ!」
容赦のない命令であった。
「その娘はワルーン村の生き残りだよ! あたしらを罠に掛けた張本人さ!さっさと切り刻んでおしまい!」
かた
その命令に、ジャスティスは身を堅くした。
とつき
セシアも咄嗟に少年にすがりつく。
「こっちだ、セシアー」
叫んで、少年は草原を走り出た。
たく
かた
背後の森へセシアを託そうと、肩を抱いたまま疾走する。だが背後から、気圧するよう殺気が急迫した。
きゅうはく
「止まるんだ、ガキどもっ!」
ジャスティスは、思わず振り返った。
せま
眼前には、もうガルシアが迫っている。
どとう
とどろ
疾風めいた、怒濤の突進であった。
こし
ちょうけん ひらめ
その顔には、いつものにやつきなど無い。腰から長剣を閃かせ、白銀の聖騎士は雄叫びを轟かせた。
「小娘があっ.........!」
せいこう やいば
ゾダニウム聖鋼の刃が上段から落下する。
かか
ジャスティスはセシアを抱えたまま、真横に飛び退いた。一撃はかわす。だがガルシアは素早く、追撃の刃を突き入れた。
すばや
「ジャスティス!」
セシアが少年にしがみつく。
ばつとうじゅつ
かいひ
ごく
傷ついたジャスティスに、サーグ流抜刀術を二度回避させるのは酷だった。 切っ先が目前に達する。セシアは思わず瞑目した。
めいもく
「ぐっ........!」
れつだん
くもん
だが裂断を目前に、ガルシアは苦悶した。
とつしん
ごういん
長剣の突進を強引にくい止めた刃がある。
せんがいき
ふたごけん
やはりゾダニウムの剣。 戦鎧鬼ライオットの双子剣であった。

たぬき
「あんたも狸よねえ、ガルシア・・・・・」
やいば
もど
きぼ
ぎりぎりと刃を押し戻して、 ライオットは牙を剥き出した。
いったんはな
せいきし
「あと二秒遅かったら、あたしも間に合わなかったわ......
　　　へらへらしてるだけかと思った・・・・・・いい腕してるじゃない......?」
「造りモンの目ん玉じゃあ、見ぬけなかったってか?」
一端離れ、再び剣をぶつけ合う。
鍔迫り合いの姿勢で、二人は怒りのこもった視線を接近させた。
「悪いけどセシアは殺らせてもらうぜ・・・・・・そこをどきな!」
「あんたはセシアの家族を殺した……いいえ、一度はセシア自身を焼き殺したのよ! 二
　　　度も殺されてたまるもんですか!」
背後で、 ジャスティスも非難の声を上げた。
「なぜ今セシアを殺すんですか!」
っていた。
じゃしん
少年は、邪神の動きを気にしながら叫んだ。
えんじん くす
聖騎士たちは円陣を崩さない。
さけ
ヴァスランの戦士たちは、迎撃用奇跡で邪神をくい止め、ゾダニウムの剣を果敢に振邪神もさらなる
　　　魔導を打ち出そうと、 一撃の瞬間を狙って後退していた。
ねら
お
「今は力を合わせて、 邪神を倒す時です! なぜ教会長の言いなりになるんです!」
おん
「そりゃあ、恩があるからな.....」
ガルシアは、不敵な笑みで答えた。
れいてつ
ぎやくげき
「俺は、ジキータ様と共にずっとやって来たおかげで団長にもなれたし......うまい
　　　もずいぶん吸った......だが俺はまだまだうまい汁が吸いたいんだ......」
冷静な声で、聖騎士は剣を押し込んだ。
「セシアを殺して...... ジャスティス、お前も殺す...
　　　そしてライオットも殺してやる.....そうすりゃ俺たちを咎める者はいなくなる...今まで通り
　　　の生活だ・・・・・・甘い汁はもっと吸えるぜ......」
冷徹な顔で言い切り、ガルシアは真正面から斬り込んできた。
ライオットが大剣を振り回し、 ジャスティスが飛びすさる。
　　　ゾダニウムの剣がぶつかり合い、火花を撒き散らす。
　　　戦鎧鬼の膂力が、強引にガルシアを押しのけた。
「ったく、機械女があっ!」
つば
いったん間合いを取り、ガルシアは唾を吐き飛ばした。
ふくしゅう
めいわく
「今頃のこのこ出てきて復讐だと……おかげでいい迷惑だぜ・・・・・・おとなしく口を塞いで、
　　　地道に暮らしてりゃあいいものをよ!」

ちょうやく
再び跳躍し、斬りかかる。だがライオットの剣はガルシアの切っ先を跳ね上げ、瞬間、逆撃に転じた。分厚い刀身が、脳天めがけて落下する。
くちびる
りゆうれい
しかし反撃の直前で、ガルシアは大きく後退し、唇を舐めた。流麗な動きと言っていい。
しる
うで
じちょう
せんがいき
「それだけの腕を持ちながら......!」
にぎ
戦鎧鬼は、さらに両手に大剣を握りしめた。
かげ あんやく
「あんたはジキータの手先となって、陰で暗躍してたって訳ね......」
「結局、俺もセシアと同じさ・・・・・・」
自嘲するように、ガルシアは微笑んだ。
クルセイダー
だま
「何も知らねぇ聖戦官どもを騙すには‥‥‥油断させるのが一番だ......みんなうまいこと騙されてくれたぜ......俺をすっかり女好きのおちぶれ騎士団長だと思いこんでよ・・・・・・」
だが、と言ってガルシアは剣を据えた。
た
「どんな馬鹿に見られようとも... ジキータ様のお引き立てがあったから耐えられたのさ......いつか正体を晒して‥‥‥みんなを驚かせてやる......あっと言わせてやると思い続けてた......それが今だ......今、セシアを殺して......俺は聖戦官より上に行く......もうウォーデンみたいな能なしに、媚びへつらうのは御免なんだよ!」
さら
おどろ
クルセイダー
ほうこう なが
戦鎧鬼はただ、ガルシアの咆哮を眺めている。ジャスティスは、なぜか悲しそうに聖騎士団長を見つめていた。
ののし
だが怒りの視線で見つめていたのは、罵られたウォーデンその人であった。
やつ
「ガルシア、お前という奴は...」
そうはく
おのれ
ウォーデンの土気色の顔に蒼白が加わる。
すがお
初めて知った部下の素顔に、しばらくは声も出ない。
ほうぜん
いつぺん
だがガルシアには、呆然とする聖戦官に一片の同情もなかった。
「ふふっ......
ウォーデンさんよ‥‥‥あんたも仲間外れにされなきゃよかったのにな......そうすりゃジキータ様の下でおいしい思いができたものをよ......」
「貴様は人間のくずだ......!」
ウォーデンは、ようやく声を絞り出す。
「己の欲望のためによくもそこまで・・・・・・ 貴様に聖騎士の資格などないぞ!」

「ならあんたにはあるのかよ!」
じゃしん おたけ
いか
邪神の雄叫びにもかまわず、ガルシアは剥き出しの怒りをぶちまけた。
たよ
「笑わせるな! てめえは何に頼ってる! 金でも権力でもねえ! あんたは薬に頼ってるじゃねえか!」
その言葉に、ウォーデンが硬直した。
こうちよく
ライオットは一瞬いぶかり、直後に理解した。ジャスティスだけが意をくめずに、ガル
シアへ問いかける。
「そ、それはどういう......」
「結局、てめえも俺たちの恩恵を受けてるってことなんだよ!」
少年にはかまわず、ガルシアは罵声をウォーデンに打ち放った。
なや
げんかくさい
「あんただってワルーン村のことで悩み・ ・不安を紛らすのに、幻覚剤を使ってるだろうが!
その薬は、俺らが売りさばいた物なんだよ! あんたは俺たちのおこぼれで生きてる人間なんだ!
偉そうな口、叩くんじゃねえ!」
えら
たた
セシアは、思わず口元を覆った。
おお
すりびん
ライオットも思い出す。 ウォーデンの周囲にいつもあった薬瓶。 あれは胃薬などではないのだ。
顔を土色に変えるほど悪辣な、幻覚剤の一種なのだ。
「私は......」
ののし
だつりよく
罵られ、ウォーデンが一瞬、脱力する。
ちょうやく
その間隙にガルシアは、セシアに向かって跳躍した。
「死ねやあああああっっ!」
じゅうこう
さいご サウンド しょうかん
ライオットが銃口をガルシアに転回した。
ジャスティスも身を挺して、最期の奇跡を召喚しようとする。しかし......
「ぎがががががっっ!」
人間の声とも思えぬ悲鳴が、 ガルシアの口から漏れ出した。
じゃしん
どうたい
背後から急接近した邪神の首が、がっぷりガルシアの胴体に喰らいついたのだ。
「ガルシアっ!」
ライオットは、 邪神の首に斬りつけようと一歩踏み出した。が、その動きをウォーデンが制した。
つらぬ
おのれ
ちしお
せいき
ガルシアの胴体を、邪神の牙が何本も貫いている。
腹から流れ出る己の血潮に、聖騎士は哀れな悲鳴を送らせた。
ほとばし
あわ

「ジ、ジキータ様あっ!」
うで
伸ばした腕を、別の首が喰いちぎる。
さくらん
だえき
錯乱した女の顔は群をなし、唾液を垂らしてガルシアをむさぼり食った。
「ガ、ガルシア......!」
だんまつま
ぼうぜん
のうず
じんとうじゃしん
ジキータは、腹心の断末魔をただ見守っていた。 聖騎士たちは、指揮官の死に呆然としている。邪神ヨブ・ゾラーンはガルシアの脳髄をすすると、さらに二本、人頭蛇身を新たに湧き出させた。
ざんぎやく
ジャスティスは、残虐な光景からセシアの視線を逸らしていた。胸にかばい、少女を決して放そうとはしない。
しかし少年は、聖戦官としてセシアを問いつめなければならなかった。
「セシア、正直に答えてほしい......」
「......はい......」
けつめい
「邪神とは血盟を結んだんじゃないよね?」
少女は、力強く同意した。
じん
「アレナが、血盟陣を村につくりました。
そこで血盟を結ぼうとしたんです・・・・・・でも無理だった......邪神は代償に、百八の脳髄を要求したんです」
「それでアレナは......」
せんにゅう
えが
「評議員たちの家に潜入して、 血盟陣を描いたんです......」
きょう ふ
セシアは、まざまざとその時を思い出し、 恐怖に全身をわななかせた。
ふくしゅう
「異界からの門を開き、 邪神に脳髄を食べさせたんです...... どうせ復讐のため殺すんだからかまわないってそしてワルーン村にみんなをおびき寄せるために、わざと怪現象を引き起こしたりして......」
ふる
少女の震えは止まらない。
きおく よみがえ
だがその恐怖は邪神ではなく、記憶に蘇るアレナに対するものだった。
かいげんしよう

「アレナは・・・・・・・間違ってました.........復讐のためにあんなことまでするなんて......私、止めたけど......聞き入れてはくれなかった」
「ワルーン村に呼び寄せた目的は?」
「血盟陣に近い方が邪神の力が強いし......それにもうヴァスランでは警戒されてしまって......一気に聖教会の中枢を集めて、皆殺しにするって言ったんです......」
ちゅうすう
みなごろ
うつむ
もういいよ、とジャスティスは俯く。
利用されたのは、アレナなのだ。
のうず
しょせん
代償である脳髄の収集を手伝わされ、結局死んでしまった。 所詮、邪神はアレナの手に負えるような存在ではなかったのだ。

「ライオット、セシアを頼む......」
ジャスティスは、相棒の名を呼んだ。
じゃしん
・・・
「僕は邪神を... 倒さなきゃいけない。 彼女を守っててほしいんだ」
「無茶言わないで!」
たいけん
にぎ
せいきしだん ていこう
ライオットは、二本の大剣を握ったまま邪神を見上げた。
聖騎士団の抵抗で前進は阻まれているが、邪神ヨブ・ゾラーンはさらに実体化を進めている。
戦鎧鬼は、傷ついた少年に視線を戻した。
からだ
サウンド
もど
「その身体でもう一発、奇跡を呼ぶつもり? 失敗したら後が無いのよ! それに・・・・・・」
ライオットは言いかけて、口ごもった。
きおく よみがえ
ラスト テイク
ジャスティスはすでにセシアを癒し、セシアの記憶を蘇らせている。
後は最終撃を残すのみだ。奇跡を召喚すれば・・・
サウンド しょうかん
しかし少年は、首を横に振った。
「僕のことは気にしないで!」
ジャスティスは、セシアの身体を相棒に差し出した。
「今は邪神を倒すことが先決なんだ!それに僕は・・・・・・聖戦官なんだよ!」
少年は、自分の手を見下ろした。
「どんなに疑われても、目の前で邪神を倒せば誤解も解けるさ・・・・・・僕はそう信じてる。戦う以外に、僕は自分を証明する方法が無いんだよ・・・・・・」
クルセイダー
何も知らぬセシアには、その言葉が理解できない。
かたが
さけ
だが察したライオットは、もう同意するしかなかった。いくら肩書きを叫んでも、尊敬などされはしない。信頼されるには、行動するしかないのだ。
しんらい
ならば自分がすべきことも一つである。
「分かった。でもあたしも手伝うわよ」
「ライオット......」
「そりゃそうでしょ、あたしはあんたの相棒なのよ?」
たた
笑って、戦鎧鬼は自分のこめかみを叩いた。
もうまくひょう
まだ網膜表示が元に戻らない。 それでもライオットは大剣を握り直した。
ディストーション
「たっぷり奇跡増幅かけてやんな。
聖騎士団もいつまでももたないわ・・・・・・それまではあたしが時間を稼ぐ。 いいわね?」
こちらも、同意するしかない意見だった。
誰がなんと言おうと、ジャスティスを助ける。 それが今の自分を証明する、 ライオットの方法なのだ。
とつぜん

そば
すると突然、二人のすぐ側で聖光が瞬いた。
またた
淡い白光の輪が、 ジャスティスの全身を包み込む。
それは温かいぬくもりを少年に伝え、その傷を次第に癒していった。
しだい いや
あせ
「ウォーデンさん・・・・・・」
イン・ザ・ラノ
「神聖光癒陣......」
クルセイダー
すす
ヒーリング・サウンド しょうかん
もう一人の聖戦官は、煤けた顔から汗を垂らして治癒奇跡を召喚していた。
「私とジャスティス、 それにジキータ様がいれば勝てるはずだ............よろしく頼む...」
ぎこちないが、力のこもった声で言う。
「もはや生き残った部下は、二十人にも満たないだろう。だがせめて彼らだけでも救ってやりたい......聖戦官ジャスティス、どうか協力してくれ!」
初めて会った時もそう言われた。
かんがい わ
さして感慨の湧かぬ出会いであった。
しし
とう
みなさ
だが今はどうだろう。その同じ言葉が、ジャスティスの、そしてライオットの四肢に闘志を張らせている。 確かな信頼が、 ウォーデンの声に満ちあふれていた。
「任せて......ください......!」
じゃしん
そうぼう ひらめ
せいせんじょう
ジャスティスはうなずき、上空の邪神に双眸を閃かせた。 聖戦杖を握り、 聖印を結ぶ。
たいけん
ライオットも背後の森を大剣で指し、 セシアに厳しい視線を振り向けた。
「あなたはあそこに隠れてて。 戦いが終わるまで、絶対に出ないこと。 いいわね?」
「ライオットさん、私も......」
「いいから、隠れてて」
ライオットは、ぴしゃりと言い放った。
「お願い、今ここでは......絶対に死なないで。 あなたはジキータたちの悪事を知ってる一人なのよ。あなたが死んだら、アレナが浮かばれないわ......」
セシアはすまなそうに、頭を垂れる。
ひとみ ほほえ
ライオットは、少女の瞳に微笑んだ。
ざんげ
「自分の罪を懺悔するのはその後でいいわ・・・・・・」
ひなん
少女の背中を押し、ライオットはセシアを避難させた。
後ろ姿をしばし見守り、おもむろに振り返る。
「先に行く!」
さけ
せんがいき
ウォーデンに叫び、戦鎧鬼は駆けだした。

「ジャスティスに力・・・・・・かしてあげて!」
とつにゆう
きょだい
ほうこう
返事をする間もなく、ライオットは邪神めがけて突入する。巨大な邪神の咆哮に、戦鎧鬼の怒声が挑みかかった。
どせい
いど
「あああああああっっ!」

せい
つぶ
また一人、聖騎士が喰い潰された。
わず
もはや前線を維持する人数は、ごく僅かだ。
ジキータの周囲に展開した人数は、 二十人にも満たなかった。
「踏みとどまるんだよ、お前たち!」
ろう。
聖印を結びながら、老婆は意識を集中した。
サウンド
「もう一度、奇跡を放つ! それまでなんとしても支えるんだ!」
あしもと
こた
せま
命令に応えたのは、差し迫る邪神であった。
しだい
しょうげきは
ヨブ・ゾラーンは次第に大きさを増している。全身から放たれる魔導線は衝撃波と化し、足下の草原をざわめかせていた。 ちぎれた草が空に舞い飛び、
土埃が荒れ狂う。暴風の如き、邪悪な圧迫である。
ごと
じゃあく あっぱく
サウンド しょうかん
ブエルタ
ジキータは、ずっと奇跡の召喚を続けていた。 彼女といえど、
邪神侯級を討つには自身が知る最難度の攻撃用奇跡が必要なのだ。
さいなんど
アタック・サウンド
せいせんじょう
だが聖戦杖は、いまだ激発の瞬間を許可していない。 歯がゆいほど、時間の流れが遅かった。
《イアヨブ・ゾラーン......》
《イア、イアヨブ・ゾラーン.....》
絡み合う無数の大蛇は、猛り狂った女の顔を盛んに振りたくる。と、その女たちが突然、聖騎士たちめがけ口腔を開き始めた。
こうくう
サウンド
いじ
「いかん、奇跡の維持を......!」
むな
感づいたジキータの声が空しく響く。
クルセイダー

ールズ・オブ・ジェリコ
聖戦官たちが展開する 〈隠棲攻性防壁〉は、すでに効力の限界に達していた。
しょうへき
じゃしん
イズ
かん
むらさきいろ
もうそく かえん
その赤い障壁めがけ、邪神は魔導の火弾を吐きつけた。紫色に燃える、猛速の火炎である。魔導は奇跡を打ち破り、聖騎士たちの円陣へなだれ込んだ。
サウンド
せいきし
えんじん
「あああああっっ!」
悲鳴があちこちで重なる。
聖騎士はおろか、後方の聖戦官たちまで火だるまになっていた。
炎上する人型が、幾つも草原に絶命した。
ぜつきょう
たいけん
「お逃げください、ジキータ様!」
聖騎士の一人が悲観して喚いた。
「もう我らだけでは防げませぬ! ここはいったん後退してくだされ!」
だがジキータは動かなかった。
にぎ
あせ にじ
聖戦杖を握る手に汗が滲む。
しばらく実戦を忘れていた教会長は、自らの老いを痛感した。 続けざまの召喚に、これほど時間がかかるとは......
杖を握る力を思わず強めた、その時だった。
「ああああああっっ!」
せんぷう
絶叫と共に、赤い旋風が戦場に勇躍した。
とつぜん
大剣を両手に握ったライオットが、 横合いから突然現れ、 邪神めがけて突進する。
思わず聖騎士たちから悲鳴が上がった。
「無茶だ、ライオット殿っ!」
せんがいき おく
だが戦鎧鬼は臆さない。
どの
右の剣を振り下ろし、左の剣を横に薙ぐ。
かかん
たた
左右から襲いかかる女の首へ、果敢に大剣を叩きこんだ。
《アエアアアー! アエアアアー!》
《アエアアアー! アエアアアー!》
みみざわ
「おおっ!」
ふんげき
こし
耳障りな悲鳴が、雲海までこだまする。
せいこう

じゃしん
ゾダニウム聖鋼の剣は、邪神の肉を断ち斬り、青緑の体液を空中に撒き散らした。
かんたん
聖騎士たちが感嘆の声を上げた。
そくざ
だが邪神の傷は、即座に再生されていく。
憤激に燃えたヨブ・ゾラーンは、無数の首をライオットめがけて集中した。
《イアヨブ・ゾラーン・・・・・・》
《イア、イア.. ヨブ・ゾラーン・・・・・・》
かだん ごうう
ごと
火弾が豪雨の如く落下する。
地面が吹き飛び、馬車が爆砕した。
だが集中砲火をかいくぐり、 ライオットは左の大剣を背にしまい込んだ。
「負傷者を収容して後退しな!」
腰のベルトに左手を伸ばし、ライオットは背後に向かって警告した。
「ここはあたしがくい止める!やわな人間さんは足手まといだよ!」
言うと同時に、何かを食いちぎる。
すばや
ひだりうで
ばくえん
ばあ
どな
さけ
続けて素早く、左腕を振り抜いた。
とうてき
しゅりゅうだん
じゅうてん
腰から投擲したのは、大型のナパーム手榴弾である。
ゼリー状のガソリンを充填されたそれは、邪神の身体に激突するや、派手な炎をまきあげた。
じゃしん からだ げきとつ
ほのお
《アエアアアー! アエアアアー!》
《アエアアアー! アエアアアー!》
身体にまとわりついたガソリンは、しばらく燃え続けるだろう。その間にライオットは、二発目、三発目の手榴弾のピンを次々に食いちぎった。
「ちょっとは時間稼ぎになるだろう!」
爆炎はあっという間に、邪神の全身を舐め尽
爆炎はあっという間に、 邪神の全身を舐め尽くす。
全長五十メートルの長大な身体を何本も、ナパームの炎がいたぶり続けた。
サウンド
「婆さん、奇跡はまだなの!」
怒鳴って、ライオットは左手の義手部分を引き抜いた。
お
「これで倒せるなら苦労しないんだからさ!」
てきだんとう
きかんほう ごと
剥き出した四〇ミリ擲弾筒を、機関砲の如く速射する。
照準機能は回復していない。だがこれだけ巨大な敵ならば、狙う必要もない。
ライオットは再び、背後へ怒鳴った。
きょだい

ねら
「みんな伏せてっ!」
しょうげき
叫んだ瞬間、自分も強大な衝撃に備える。
りょく
射出された弾頭は、次々邪神に命中した。突然、目もくらむほど巨大な火球が膨れ上がった。
熱風と衝撃、 爆風と轟音が怒濤となって、一同へ襲いかかる。
だんとう
とつぜん」
ごうおん どとう
おそ
どの
「ライオット殿!」
せいき
すさ
はる
聖騎士たちは、爆発の異常なまでの凄まじさに思わずひるんだ。
手榴弾を遥かに上回る威力に、邪神すら大きく後ろに倒れ込む。
なけなしの高圧燃料気化弾頭は、街一つ吹き飛ばすだけの威力を有している。それを立て続けに連射
したのだ。 邪神とて、圧倒されないはずはなかった。
あつとう
せいせんじょう
その間隙めがけ、ジキータは聖戦杖を大きく振り上げた。
ルドレン
・ザ・ダムド
「滅砕禁忌童子群!」
サウンド
今度の奇跡は、天空から落下した。 雲海を衝き、何百という光線の雨がヨブ・ゾラーン
に降り注ぐ。
ばだか
つばさ
からだ とつげき
うで
光線は、天使であった。 素っ裸の赤子が背の翼をうち振り、 邪神の身体に突撃してい
く。だがただの天使ではない。腕を四つ持ち、牙の生えた口で咆哮する闘争の加護天使 だ。
きば
ほうこう
とうそう
とつこう
うが
はんかい
天使の特攻は、邪神の肉体に穴を穿ち、体内で爆発まで引き起こす。
半壊した邪神は、全身から蒸気を発し、苦しげに身悶えた。
みもだ
《アエアアアー! アエアアアー!》
《アエアアアー! アエアアアー!》
きょたい
邪神の巨体が、音をたてて大地にめりこんだ。幾つもの首が引きちぎれ、宿営地に燃え落ちていく。
しかし同時に、ジキータも膝を落としていた。老婆は、全身から生気が抜け落ちていくのを感じた。
十分に奇跡増幅をかけた一撃は、邪神だけでなく、召喚者であるジキータの
力も奪っていたのだ。

ろうば
ディストーション
しょうかんしゃ
「ジキータ様!」
「お気を確かに!」
とつさ
咄嗟に駆け寄る聖騎士たちは、一瞬邪神から目を逸らした。
だがジキータは、ヨブ・ゾラーンの最期のあがきを察していた。
さいご
「まだ油断するんじゃない! 奴は......」
《イアヨブ・ゾラーン・・・・・・》
《イア、イア‥‥ヨブ・ゾラーン・・・・・・》
土中から、忌まわしい呻きがこだまする。
ぐれん
ばりばりと紅蓮のプラズマを放ちつつ、邪神は残る生命力をたぎらせた。
《ゼリ、ゼリ・・・イア ヨブ、 ゼリ・・・・・・》
かくさん
魔導が、大気を伝わって拡散する。
せいきし
その波に呑まれた聖騎士は、一様に両手で耳を押さえた。
「ひあああああっっ!」
こまく
おく
ふんしゅつ
鼓膜の奥から一気に血流が噴出する。
ばくはつ
のうしょう
邪神の声音に毒された脳が、頭蓋の中で爆発したのだ。吹き飛んだ脳漿は熱を帯び、派
手な蒸気さえ上げていた。
「ぎいいいいっっ!」
とつさ
ジキータも咄嗟に耳を押さえた。
はじ
こら
たお
頭の中から何かが弾け出ようとする。 それを必死に堪え、老婆はその場にうち倒れた。
「助けておくれ! 頼む、助けておくれ!」
てんとう
百八十余年の人生で、初めて口にする言葉だった。だが辺りでは聖騎士たちも転倒し、
転げ回っている。
たいけん
せま
じゃしん
かくとう
ちょうかく
せんがいき
ただ一人、 ライオットだけが大剣を振り回し、迫り来る邪神の首と格闘していた。聴覚
機能を切断しているのか、 戦鎧鬼は振り向きもしない。
きょうふ
ジキータは、自分の眼球がせり出すのを感じて恐怖した。
が、その恐怖をかき消すように、ウォーデンの叫びが戦場を支配した。

さけ
「多重噴火熱波!」
らんぶ
ほうい
宙に浮かんだ古代神聖文字が、乱舞しながらやがて列を成す。
邪神を包囲した長大な文かがや字列は赤く輝き、同時に無数の溶岩流を吐き出した。

ようがんりゅう
からだ
サウンド ほのお
邪神の身体が、奇跡の炎によって溶解していく。
皮を溶かされ、肉を崩されたヨブ・ゾラーンは身悶えつつ、魔導を中断した。
みもだ
「ウ、ウォーデン...............!」
クルセイダー
サウンド
しょうかん
ジキータは、部下である聖戦官に顔を上げた。ウォーデンは、すでに奇跡の結界を召喚
し、魔導の波を堅くんでいる。
おのれ
その結界には、ジャスティスも加わっていた。
少年も一心に意識を集中し、己の召喚す奇跡に強大な増幅を加えている。
ぞうふく
サウンド
「いいぞ、ジャスティス......」
結界を維持しながら、 ウォーデンはうなずいた。
「お前がとどめを刺せ......お前の力ならできるはずだ・・・・・・」
J
せいい!
少年も聖印を結んだ指を持ち上げ、ぐいと邪神に突きつける。だが一瞬、 その視線が自
分の手に吸い寄せられた。
ウォーデンも咄嗟に気付く。
サウンド
ここで奇跡を放った後、ジャスティスの身体には異変が起きるはずだ。
その異変を見た者たちに、ジャスティスは弁解できる余力があるのだろうか・・・・・・
ゆうちょ
が、その躊躇を吹き飛ばすように、ライオットが声を張り上げた。
「後のことは任せな、 ジャスティス!」
ちようやく
接近する邪神の首へ剣を突き入れ、戦鎧鬼は後方へ跳躍した。
きれい
あかし
「なんのためにあたしがいるんだい! 心配しないで! あんたの証を見せてやりな!」
激励の声に、あらん限りの力を込める。
無力になったジャスティスを、誰が非難してもかまわない。だが誰がなんと言おうと、
自分だけはジャスティスを助ける。
それがライオットの証だった。
「わかった...............!」
ジャスティスは、短く叫ぶ。
きぼく
迷いを吹っ切った少年は、聖印から、創世神の力を起爆させる。

もく
ラスト・サイク
「最終撃......!」
ライオットは、黙して見守った。
「神聖炎熱堕撃っ!」
ぜつきょう
えいしょう
邪神の絶叫が、詠唱にかき消えた。
ヨブ・ゾラーンの真正面に、回転する円形陣が浮上した。ジャスティスが宙に描いた神
かえん
どとう ほとばし
聖陣から、まばゆい火炎の怒濤が遡る。
《アエアアアー! アエアアアー!》
サウンド
《アエアアアー! アエアアアー!》
吼える邪神も、生き残った首を総動員した。
かだん
神聖陣めがけ、火弾を続けて吐き散らす。
ノイズ
げきとつ
ばくだい せんこう
かくさん
奇跡と魔導が正面から激突し、莫大な閃光が宿営地に拡散した。
「伏せるんだっ!」
ウォーデンの叫びも、爆発に呑まれる。
絶大な波動が一同を吹き飛ばした。大地がけし飛び、石塊が微塵となる。幌馬車が砕け、水面が沸騰した。 魔導から逃れた聖騎士たちまで、その激震に翻弄されていた。
ふつとう
のが
せいきし
げきしん ほんろう
「ジャスティス!」
くら
背後の森で、セシアは目を眩ませた。
衝撃波と炎熱が辺りに広がり、轟音が一帯を駆け抜ける。
せいじゃく
そして・・・・・・静寂が訪れた。

たいぜん
雲が泰然と流れていく。
へいおん
もど
風も、いつもの平穏さを取り戻していた。
馬車から逃げ出したログタ馬たちがあちこちでいななき、頭上では小鳥たちがさえずりを始めている。
わかげ
ひそ
たんけん
にぎ
げきとう
ょじん

さ
岩陰に潜み、短剣を握ったセシアは、激闘の余塵にしばし耳を塞いでいた。
はへん つちくれ
何かの破片や土塊が、 辺りに四散している。
のぞ
それがおさまったと見て、 セシアは恐る恐る岩陰から顔を覗かせた。
ばくこう
とだ
こくえん
うす
爆光も途絶え、黒煙が薄れてようやく、セシアは少年を求めて森から飛び出してきた。
「ジャスティス!」
駆け出す足がもつれる。
しつそう
それでもセシアは、草原を疾走した。
「ジャスティス、 どこに......!」
言いかけて、急停止した。
につかい
ひざ
じゃしん
目の前に、小山のような黒い肉塊がそびえている。ぶすぶすと焦げた音を立てるそれこそ、邪神ヨブ
・ゾラーンの屍に他ならない。
きょうがく
だがセシアが驚愕したのは、その死に様ではなかったのだ。
「ジャスティス、 あなた......」
それ以上、言葉は出なかった。
たお
草原に、少年は這うように倒れている。
ひい
からだ
ひどう
膝をつき、両手で疲弊した身体を支えている。 微動だにしないが、確かに意識はあっ た。
せいせんじょう
んよう
だが聖戦 杖を投げ出した少年の手には、奇怪な紋様がのたくっていた。
じゃしゅうもん
赤く光るそれを知らぬ少女ではない。 セシアは、邪宗紋に視線を吸い寄せられていた。
「ジャスティス…… あなた…… どうしてそんなものが......」
「どうしてだろうね・・・ 僕にも......わからないんだ......」
目を閉じたまま、ジャスティスは言葉を少しずつ吐き出した。だが遠のく意識と必死に
戦いながら、少年はゆっくりと立ち上がった。
じゅんれい
「それがなぜなのか
・探すために・・・・・・巡礼をしてる・・・・でもなぜかはまだ......わからな
いんだよ......」
セシアに歩み寄ろうとして、脱力する。
だつりょく
だが倒れかけたジャスティスを、今度は少女が抱きとめる番だった。
「ジャスティス、しっかりして!」
かたわ

セシアは少年を抱きかかえ、その場にうずくまった。同時に少女は、短剣を傍らに投げ出している。
もうセシアには必要のない刃は、鈍い光を放って草原に転がっていった。
やいば
に
「あなたは死んじゃだめよ! あなたは死んじゃだめ!」
わめ
泣き喚いて、少女はジャスティスにすがりついた。
まちが
「私が生き残ってあなたが死ぬなんて......そんなの間違ってる! だめよ、そんなの!」
あた
ジャスティスは、少女に命を与えてくれた。
だま
騙したはずのセシアに命をくれたのだ。
あやま
たくさん謝り、たくさん感謝したかった。
おえつ
おく
その気持ちが嗚咽になって、胸の奥からこみ上げる。
らくるい
かた
やさ
その落涙する少女の肩に、ライオットは優しく両手をのせてやった。
「心配しないで、死ぬ訳じゃないわ......」
「ライオットさん・・・・・・」
「ただちょっと疲れただけ、いつものことよ
今日はまだ意識があるだけ、元気がいいくらいよ......」
ほほえ
疲れたように微笑み、 ウィンクする。
......
そしてライオットは、おもむろに背後を振り返った。
せいきし
ほうい
じゃしん
三人の周囲を、生き残った聖騎士たちが包囲している。
すでに邪神は倒れているが、彼らの手には長剣が握られたままだ。
こわ
ふる
そしその表情も、さきほどよりずっと強ばり、小刻みに震える者すら認められた。
「ジャスティス様、どういうことです......」
ひそう
悲壮な声で、一人の聖騎士が歩み出た。
クルセイダー
「我々はあなたを・・・・・・立派な聖戦官だと思っていました・・・・・・」
「なれどその印はなんですか......」

じゃしゅうもん
「それは邪宗紋ではありませんか!」
「なぜそのようなものがあなたに......!」
らくたん ひふん
せいきし
うず
落胆と悲憤が渦となって押し寄せる。
ひび
そして問いかける声が辺りに響いた。
クルセイダー
「あなたは······聖戦官ではないのですか?」
こうげき
言葉が、 ライオットの全身を痛撃する。
せんがいき こぶし かた
反射的に、戦鎧鬼は拳を堅く握りしめた。
「あんたら、何を見てたのよ!」

さけ
やりきれない叫びであった。
「この子は今、邪神と戦ったのよ！ あんたたちを救おうとして戦った！
誰が見たって、この子は聖戦官の責務を全うしたわ!」
じゃしゅうもん
「だがそれは邪宗紋だ!」
聖騎士も、同様の声を上げる。
「我らは聖騎士だ・・・・・・幼い頃より訓練を受け......その印を持つ者を倒すために生きている.
......見逃すわけにはいかない......」
「セシア、僕は............」
言いかけて、ジャスティスは激しくむせる。
めいめつ
つか
せいせんじょう
セシアは、少年の手を見下ろした。まだ奇怪な紋様は光を明滅させている。
それでも少女は、聖騎士たちに叫んだ。
「ジャスティスを信じてあげてください!」
こんがん
セシアは、懇願の声を震わせた。
「私は嘘をつきました！ でもジャスティスは違います！ この人は本当に聖戦官です!」
「どっちだっていいんだよ、もうそんなことはね......」
こお
不意に、しわがれた声がその場を凍らせる。
聖戦杖にしがみついたジキータは、よろめきながら前へと進み出た。
とつき じゅうは にぎ
ライオットが咄嗟に銃
を握る。
けつめいしや
「ジキータ、あんたは......」
「そうジャスティスが聖戦官だろうが、
血盟者だろうがもうあたしにはどうでもいいんだよ......そんなことはね...」
ろうば
疲れ切った老婆は、 それでも笑みを浮かべている。 半ば正気を失った顔であった。
「問題はお前さんがワルーン村のことを知り……
セシアを助けたということさ・・・・・・お前さんはあたしが隠そうとしたものを全て暴き出してしまった......許せないねえ......」
あば
せいいん
老婆は、がたつく指で聖印を結んだ。
その小さなしなびた身体のどこに、それほどの力が残っているのか。
聖戦杖は、次第に聖光を放ち始めた。
「この子たちをやるなら、あんたを撃つ!」
ライオットは、銃口を上げて断言した。
からだ
しだい
じゃまもの
「ジキータ、 それでもやるのかい!」
「ああ、やるさ！ 三人まとめて殺してやる!」
ぜつきょう
ジキータも絶叫を喚き続けた。
「あたしが正義だ！ ヴァスランの正義だ！ あたしは悪くない！ 邪魔者は死ぬがいい!」

しゅうそく
急速に聖光が集束する。
げきふん
しぼ
ライオットも、激憤を引き金に絞り込んだ。
「死ぬのはてめえだっ!」
「迂回衝撃弾!」
どせい
げきとつ
ライオットとジキータの怒声が正面から激突する。
ぼうぜん
だがライオットは、呆然と目を見開いた。
「ウォーデン!」
とつじょ
クルセイダー
地
せんがい
じゅうだん
突如走り出た聖戦官が、 ジキータの前に両手を広げて立ち塞がる。戦鎧鬼の放った銃弾
かたぐち
は、ウォーデンの肩口へ命中した。
「があああっっ!」
残っていた一発は、通常弾頭である。
だが強烈な一撃はウォーデンの肩の肉をもぎとり、真後ろへ吹っ飛ばした。
「ウォーデンさんっ........!」
يـدي
ジャスティスも、意識を取り戻しかける。
サウンド
もうぜん
とっしん
だがジキータの放った奇跡は、猛然とジャスティスたちめがけ突進した。
「消えるんだよ、ジャスティス!」
かいむ
ライオットがかばう時間は皆無だった。
セシアはジャスティスを抱きしめ、毅然と電撃に視線を据える。聖騎士たちは息を呑んだ。その眼前
で......
ラウンダ
ばか
こうせき
〈迂回衝撃弾〉は、突然航跡をねじ曲げた。
ジャスティスに達する直前で、地面めがけ大きく落下する。 その先には、セシアが放棄ノイズ
たんけん
した魔導の短剣があった。
「馬鹿なっ......!」
ジキータの絶望をよそに、電光の一撃は短剣に突き刺さった。小爆発を起こし、その刃
を粉々に破砕する。それで全て終わった。
ほうき
「ウォーデン!」
クルセイダー
叫んで、ライオットは聖戦官に駆け寄った。
ちまみ

かた
きょうがく
ぎょうし
血塗れの肩を抱き起こし、驚愕した目で凝視する。
「あんた、こうなると知ってて・・・・・・」
サウンド
「もうこの場に......魔導の力はあれしかない‥‥ジキータ様が奇跡を使えば‥‥‥その一撃は短剣に向かうしかないのだ・・・・・・」
あえぐように、 ウォーデンは言った。
けつめいしや
サウンド
ノイズ
「もしジャスティスが血盟者なら.. ・討たれただろう...・・・・・だが奇跡は.. ・魔導の力を討つためにある・・・・・もうジキータ様にセシアは討てない・・・・・・ましてジャスティスもだ......」
手当に近づいた聖騎士も動きを止めた。
あかし
今の一撃こそ、ジャスティスが血盟者ではないという証なのだ。
サウンド
「セシアの罪も......奇跡で裁かれるものではない......法で裁かれるべきものだ......ジキータ様と同様にな......」
せいきし
おそ
「あんたはジキータを裁くつもりなの?」
「それが一番良いと思った・・・・・・」
聖騎士たちに肩を止血され、ウォーデンは顔を歪めた。
「恐らくジャスティスもそのために・・・・・・最後に協力してくれたはずだ......ジキータ様を倒すことは考えず‥‥‥命を助けて... その罪を裁くことを‥‥‥だが......」
そして大きく息を吐く。
「もう......神は裁きを下したらしい・・・・・・」
ろうば
ライオットは、老婆を振り返った。
はいご
せいせんじょう
+
背後では、ジキータが必死に聖戦杖を振っている。だが聖印を結んでいるにも拘わらず、希宝石メタライトは輝こうとはしなかった。
き ほうせき
かがや
ぼうぜん
聖騎士たちが呆然とした。
「まさか......ジキータ様......」
薄れゆく意識の中、ジャスティスはしっかと聖印を結んで十字をきった。
「......やはり神は見ておられる......」
かんき
少年は歓喜の涙を頬に伝わらせた。
あら
サウンド らんよう
「悔い改めよ、奇跡を濫用する者............」
聖典の一節を口にして、ジャスティスは穏やかな笑みを浮かべた。
ぎょうそう

ののし
だがジキータは、かつてない形相で創世神を罵った。
「なぜだい! なぜなんだい!」
わくらん
どな
老婆は惑乱して、怒鳴り続けた。
「神よ! 創世神よ! なぜこのジキータに奇跡を授けない! なぜだ! なぜなのだ!」
こっけい
ひさん
滑稽なまでに悲惨な姿を、一同は目に焼き付けた。ジキータはその視線にも気付かず、一心に杖を振り回した。
サウンド
「あたしだって悔い改めたよ! ワルーン村のことを! 薬で国を支えたことを! 奇跡を失わぬよう、毎日祈りを捧げたじゃないか! あの罪は許されたはずだろう! なのに何故今あたしを見捨てるんだい!」
いの
なぜ
いちげき
「今の一撃です............」
いもく
クルセイダー う
サウンド
ウォーデンは、瞑目して語りかけた。
「あなたは聖戦官を討とうとなされた・・・・・・奇跡の行使を許された神の戦士をです......それは神への反逆行為に他ならない ・許されるはずがない......」
声もなく、ジキータは崩れ落ちる。
せいせんじょう むな
ひび
せいき
がらんと、聖戦杖が空しい音を響かせて転がった。 〈永遠の導師〉の最後に、聖騎士たちは一言の言葉もなかった。
「後は・・・・・・私だ・・・・・・」
ぎゃくさつ
ふくしゅう
ウォーデンは、ため息を漏らした。
「知らぬとはいえ私はワルーン村虐殺に荷担した‥‥‥
それがアレナとセシアにろしい復讐をさせてしまった私にも責めはある......」
かたん
巩力
心そ
せんがいき
ふところ
くすりびん
すうじょう
戦鎧鬼の前に、ウォーデンは懐から薬瓶を差し出した。
まだ数錠残ったそれは、小さな音を立ててみせた。
たよ
「それに......こんなものに頼る者に、神の戦士の資格はない‥‥‥分かっていたが...どうしても止められなかった...............」
だが戦鎧鬼は、素っ気なく笑ってみせた。

「あんたは他に頼るものがなかっただけよ。 薬とはこれから戦っていけばいい。それも辛
い戦いだけど・・・神様に裁かれるほどのもんじゃないでしょ?」
にぎ
つぶ
つら
セシアは堅く拳を握り、 ジャスティスの胸に涙をこぼしていた。
ライオットは薬瓶を一息に握り潰す。 そして態勢を変え、
ウォーデンの視線を背後の二人に向けさせた。
かた こぶし
「セシア......」
じゃしん
「ライオットさん、わたし......わたし............」
「大勢の人を殺してしまった罪もない子供たちまで殺す手伝いをして
邪神の復活を助けようとした... 私もアレナと一緒に死ぬべきだったんです」
「なに言ってるの!」
ライオットは、少女の涙を一喝した。
いつかつ
「あなたが死ぬ理由なんてないわ・・・・・・どうしてそんな......!」
のど
ろう
「だって私には何もできない!」
絶望した声で、少女はそう断言した。
「私はウォーデン様みたいな聖戦官様じゃないんです!みんなになにかできるわけじゃない!
生きていたって償うことなんかできない!」
つぐな
かみ
おえつ
せんがいき
セシアは髪を振り乱して嗚咽し、戦鎧鬼を涙目で見上げた。
「殺してください、私を私に生きてる資格なんて······無いんです......」
だま
めいもく
少女は、黙って瞑目した。
び どう
ウォーデンが、 そして聖騎士たちがライオットを見守る。だが微動だにできぬ戦鎧鬼に 代わって、
少年が口を開いた。
「せっかく僕が助けたんだ・・・・・・死んじゃだめだよ......」
朦朧とした意識の中で、ジャスティスは少女の手を握りしめる。少年はうわごとのように、少女の瞳
に語りかけた。
ひとみ
つぐな
「そりゃあ大勢の人が死んだよ・・・ 許してくれないとも思う......でも生きて償おうよ。こ
こにいる人たちはみんな、君の悲しい記憶を見てるんだ······力をかりて許してくれな
くても生きるんだ。辛いだろうけど......分かってくれる人だっているはずさ」
セシアは息を詰まらせる。
喉にこみ上げたのは、すまないと思う強い少女の気持ちだった。
「そんな人......そんな人......」
「探すんだよ、僕も探す........」
にっこりと、少年は微笑んだ。
「君だけに辛い思いはさせないよ......僕も一緒に生きる......それならいいだろ......?」
「ジャスティス・・・・・・」

かみ
セシアは、少年の髪に顔を埋めた。
おさ
泣き声を必死に抑えている。 煤に汚れた髪を、ジャスティスは優しく撫でさすり、そし
てようやく意識を失った。
(ゆっくり休んで‥‥‥)
相棒を見下ろし、戦鎧鬼は睫を伏せた。
せいじゃく
草原は、静寂のただ中にあった。
ひめい ぜつきよう
もう悲鳴も絶叫も聞こえはしない。
あんど
冷たい風だけが吹き抜ける空に、ライオットは小さく、安堵の息を漏らしていた。
たたず
きり
かよ
つんと佇んでいた。
こうえきむら
《交易村リオ・ロボへようこそ》
道標は相変わらず風に吹かれ、ぎしぎしと悲鳴を上げている。
その道標を見上げ、ウォーデンはおもむろに問い直した。
「本当に......寄らないつもりなのか?」
「もうあの村に、僕らは必要ないんですよ」
ほほ
ジャスティスは、微笑んでそう答えた。
かんげい
「行けば歓迎してくれるでしょうけど...僕たちの旅には目的があります。
探さなきゃならない人が・・・・・・僕にはいるので・・・・・・」
ほろばしゃ ぎょしゃだい
ジャスティスは、幌馬車の御者台でそう答える。少年の言葉には、うなずくしかない。
ウォーデンは納得して、自分の右手を差し出した。
あくしゅ
「初めて会った時・ 私は握手をしなかった......なぜかできなかった....」
おのれ を恥じて、聖戦官はそう言った。
たの
「だが今は......私から頼むよ。君には世話になった。 どうか... 握手をしてくれないか」
「喜んで、ウォーデンさん」
クルセイダー
霧の中、二人の聖戦官は互いの手を握りしめる。
別れの時初めて、二人の間に強い何かが通い合った。
ひび
と、朝靄の向こうからセシアの声が響きわたった。
「ジャスティス様!」
あまいろ
亜麻色の髪を振り乱し、少女は靄の中から飛び出してくる。
そして御者台のジャスティスに飛びつく寸前で‥‥‥立ち止まり、拳をぎゅっと握りしめた。
し
「どうしても行かれるんですか?」
もう涙が頬にこぼれている。
とまど
とも

自分と共にヴァスランまで来てくれると信じていた少女は、突然の別れに戸惑いを露わ にしていた。
だがジャスティスは笑ったまま、 セシアの拳に手を伸ばした。
「うん、行かなくちゃ...... 君と別れるのはさびしいけど僕には僕の旅があるんだ......
いつまで続くかわからない旅がね......」
セシアの手に力が込められた。
子供のだだのように、ジャスティスをつかんで放そうとはしない。
それを笑って、ジャスティスは押しのけた。
「一人でも大丈夫だよね、セシア?」
「............」
「ちゃんと返事してよ、 セシア?」
「......はい......」
消え入りそうな声がそう言った。
すまなそうに、少年も目を伏せる。
「ごめんね...............でも、また会おう........」
「ジャス......」
せんがいき
のど
おえつ
言いかけたセシアの喉を嗚咽が塞ぐ。
となり
ジャスティスは、隣の相棒を見つめた。
御者台には、ライオットも座している。
めんどうくさ
戦鎧鬼は面倒臭そうにうなじを掻いた。
「まーったく、ずいぶん待たせるじゃない。まさかこの後、お別れのキスでもするんじゃないんでしょうねぇ」
「な、なに言ってんだよ、 もおっ」
ジャスティスは、顔を真っ赤にする。
悪戯っぽく微笑むライオットに、ウォーデンは、小さな袋を差し出した。
「すまんが、今の手持ちはこれだけだ。十万ドルクはあると思う」
クルセイダー
くも
しかし、と言って聖戦官は顔を曇らせる。
「本当にこれだけでいいのか‥‥ヴァスランまで行かずとも、リオ・ロボ村まで帰れば、相応の礼ができるんだが・・・・」
そうおう
「仕方ないじゃない、面倒も多いんだから」
あっさりと言って、ライオットは礼金の袋を受け取った。
じゃしん たい
おおやすね
たづな
「あんだけの邪神を退治して十万ドルクなんて本当は破格の大安値よ。でもその代わり、ジキータやセシアの裁判・・・・・悪いけど、あんたに任せるわ....」
「それはいいが、やはり......」
しょせん
「いいのよ。そのうちどっかで貸しを返してもらうわ。それにさ・・・・・・」
言いかけたライオットは、すまなそうなウォーデンにため息を吐いた。
ふうらいぼう
「ま、所詮あたしらは風来坊ってことよ」
手綱を握ったまま、 ライオットは肩をすくめてみせる。
ながとうりゅう

「一つの場所に長逗留できるほど、幸せな人種じゃないってわけ。分かる?」
いたわ
だがウォーデンは、笑みを返さない。なぜか労るような視線で、二人を見つめている。
クルセイダー
じゃしゅうもん
たとえ聖戦官として戦い、どんなに感謝されたとしても邪宗紋が知られればジャスティスは迫害される身なのだ。
はい
たなん
その多難な旅路を思う、眼差しであった。
まなざ
だがライオットには、 それで十分であった。
そう思ってくれる人を見つけただけで、本当に救われる思いがしていた。
「とにかく...... セシアのこと、頼むわ」
ジャスティスと替わって、 手を伸ばしウォーデンと握手を交わす。
せきむ
おんざ むく
「セシアを守るのは私の責務だよ。 それに ・君たちの恩義に報いることにもなる」
ウォーデンは、背後を振り返った。
せいきし
こうそく
生き残った聖騎士たちは、馬車に乗ってすでに山道を下っている。その中には、拘束されたジキータもいるのだ。 気概も新たに、ウォーデンはうなずいてみせた。
「後のことは任せてくれ。本当に……世話になった。 また会おう......」
「ええ、本当に……いつかまた」
「ジャスティス様!」
セシアが涙を振り払う。
せいいん
だが黙って、ジャスティスは聖印を結び、 十字を切ってみせた。
ライオットも無言で手綱を打ちふるう。
こうえき ろ
ほろばしゃ
がたごとと交易路を進み出した幌馬車は、やがて朝靄の中にしずかに消えていった。

「少し・・・・・・寝てもいいかな?」
ジャスティスは、御者台で問いかけた。
「昨夜はあんまり寝れなかったんだ。
セシアのこと考えたら、つい......この先、どうなるんだろうって......」
「任せるしかないのよ、 ウォーデンに」
ライオットはログタ馬に鞭を入れ、相棒に笑いかけた。
みとど
「出会った人の人生をみんな見届けるなんて・・・・・・そんなの無理なのよ。気になるのは分かるけど...............あんたにはあんたの旅があるわ・・・・・・今は自分の旅を大事にして・・・・・・」
「うん、そうだね...……ごめん、本当に僕、少し寝るよ...............」
「ええ、そうしなさい・・・・・・」
クルセイダー
もぐ
小さな聖戦官は、ごそごそと荷台に潜り込んだ。 その背中を見届け、ライオットは大きなため息を手元に吐く。
幾つもの顔が浮かんでいた。

セシア.........アレナ・・・・・・
ウォーデンジキータ・・・
......
ガルシア フェブレス ラエモス......
うんめい ほろ
幾つもの運命が滅びていった。
そして幾つもの運命が救われていった。
ジャスティスこそが、人々の運命を変え、新しい運命を授けたのだ。
だが荷台で丸まった少年は、もう寝息をたてている。 その寝顔は、まだ子供のそれであった。
おどろ
あき
ほほえ
ライオットは驚き、呆れ、そして微笑んだ。
やつ
「不思議な奴ね、あんたって・・・・・・」
だがライオットだけは気付いていた。
てん
たったひとつ 彼女にとって一番大事な運命だけが、 流転の波に取り残されていた。
だれ
（あの子自身を救うには・・・・・・）
（誰が必要なんだろう......）
（あたしにできるのか......）
（あたしにあの子が救えるのか......）
どうしても救いたい。
ひそう
その思いが悲壮なまでに強まっていく。
全てが解決したように思えた。
クルセイダー
だが聖戦官ジャスティスの運命は、なにひとつ変わってはいないのだった。

あとがき

さて、新しい話を書こうとした時に・・・・
書きたいアイディアが幾つも、頭の中から勝手に湧き出してきました。

悲しい運命を背負った主人公たちの‥‥‥ コンビものが書きたい......
むほう
西部劇的な無法な世界でやりたい......
メカメカしい小道具も使いたい......
アルマゲドン
だけど神と悪魔の最終戦争もやりたい......
少しは笑えるシーンも入れたい・・

しゅしやせんたく
頭の中で飛び交うアイディアは、まるでパズルのピースです。 それを取捨選択し、ひねくり回し、組み合わせた末、一枚の絵にした......それが今回の作品、「ダーク・フロンティア・ブルース」です。
最初の短編は、龍皇杯参加作品のひとつとして、ドラゴンマガジン二〇〇〇年九月号に掲載されました。
龍皇杯で一票を投じてくれたみなさん、ありがとうございます。 この書き下ろし作品も、楽しんでいただけたら幸いです。

それにしてもデビュー作以降、本当に多くの心の支えをいただき、感謝するばかりです。
中でもファンレターほど嬉しいものはありません。まさに作家にとっては心の命綱!
　　これこそ執筆の原動力なのです!
ありきたりの言葉ですみませんが......
読者のみなさん、本当にありがとうございます。

そして、今回イラストを担当してくださったほぼるちゃさんにも感謝の言葉を・・・・・・
　　担当さんから雑誌掲載用のラフイラストをファックスで送っていただいた時、驚きのあまり笑いが止まりませんでした。
まるで僕の脳内イメージを写し取ったかのようにジャスティスが、ライオットが描かれているじゃないですか!
ぽぽるちゃさんには「ダーク・フロンティア・ブルース」を見事過ぎるほどにヴィジュアル化していただきました。まさにもう一人の作者といっても過言ではありません。
かごん
みなさんぜひ、 ぽぽるちゃさんにも励ましのお便りを送ってください!
　　ぽぽるちゃさんも僕同様、ファンレターが心の命綱です!

最後に〈奇跡〉の元ネタを挙げて、後書きを締めたいと思います。
はいしゃく
みな、ロックの曲名・アルバム名から拝借したものです。
曲と奇跡のイメージが合うものもあれば、「?」なものもあります。機会があれば、ぜひ聞いてみてください。

フロンティア
それではまた、新大陸のどこかでお会いしましょう。

二十世紀、 最後の年、最後の月に

市川丈夫

《曲名・バンド名・アルバム名・発表年》
ROUNDABOUT YES (FRAGILE) 1972
FOR YOUR LIFE LED ZEPPELIN (PRESENCE) 1976
PYROMANIA DEF LEPARD (PYROMANIA) 1983
ACES HIGH IRON MAIDEN (POWERSLAVE) 1984
RAZORS EDGE AC/DC (RAZORS EDGE) 1990
STORMBRINGER DEEP PURPLE (STORMBRINGER) 1974
IN THE LIGHT LED ZEPPELIN (PHISICAL GRAFFITI) 1975
DREAM EVIL DIO (DREAM EVIL) 1987
WALLS OF JERICO HELLOWEEN (WALLS OF JERICO) 1986
MARCH OF THE BLACK QUEEN QUEEN (QUEEN II) 1974
CHILDREN OF THE DAMNED IRON MAIDEN (THE NUMBER OF THE BEAST) 1982
ERUPTION VAN HALEN (VAN HALEN) 1978

ダーク・フロンティア・ブルース

市川丈夫

平成27年1月13日　発行

発行者　郡司 聡

発行所　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
03-3238-8745（営業）
http://www.kadokawa.co.jp/

企画・編集　富士見書房
03-3238-8585（編集）
http://fujimishobo.jp

(C)Takeo Ichikawa, Poporucha 2000

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました
富士見ファンタジア文庫『ダーク・フロンティア・ブルース』
平成12年12月25日初版発行